

253
269

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



斗 35 99

253-269

時代精神と教育

金 吉 紀 吉 春 小 樋 二
 子 田 平 田 山 林 口 荒
 馬 靜 正 熊 作 澄 長 芳
 治 致 美 次 樹 兄 市 德

合 著



大 日 本

學 術 協 會

序
 東京府は、學制頒布五十年に際し、客廳下波個所に於て記念講演會を開かれた。何れも意義ある講演であつたが、申にも本書に收むる八氏のもの、現代教育者の爲めに、大いに傾聴に値する卓論であると信じた。茲に於てか、吾人は特に請ふて、府學務課の承認を得て、これが編著に従事したのである。今や印刷成るに及び、由來を記して以て、これを同好の士に推奨し、俱に研鑽の資に供せんとする次第である。

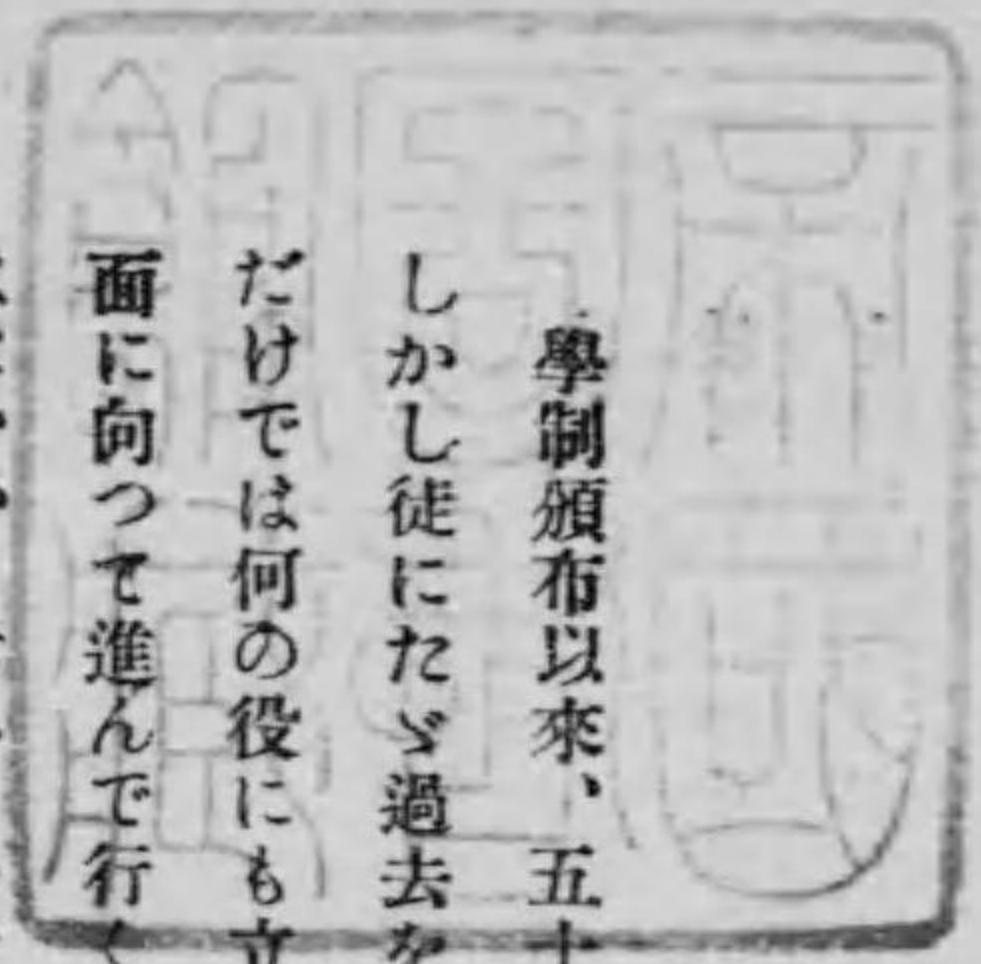
止水謹白

目次

時代精神と教育	文學博士 金子馬治(一)
現代の風潮と精神生活	文學博士 吉田靜致(三)
明治の初期と現代	文學博士 紀平正美(五)
明治大正時代の教育の功過	文學博士 吉田熊次(八)
教育効果の増進	文學博士 春山作樹(二六)
教育の新傾向	慶大教授 小林澄兄(二四)
教育上の實際問題	高師教授 樋口長市(三七)
ボーイスカウトの教育	伯爵 二荒芳徳(四〇)

時代精神と教育

文學博士 金子馬治述



學制頒布以來、五十年の教育の歴史を今日から振り返つて見るには、いろいろの方法が有るが、しかし徒にたゞ過去を振り返つて見ただけでは興味が少い。少いといふよりもたゞ過去を振り返つただけでは何の役にも立たない。過ぎこしかたを振り返つて見ると同時に、將來の教育がどういふ方面に向つて進んで行くものであるかを考へて見ることが、かういふ時機を適當に記念する意味ではないかと考へるのであります。

過去五十年の教育を振り返つて見るといふことには、いろいろの方面若しくはいろいろの方法があります。或は實際的の制度の方面から、或は實際教育法の變遷の方面から、或は何か特殊な教授法の變遷の方面からなど、いろいろ有益な回顧の方法が有ると思ふのであります。然し今日は

時代精神と教育(金子博士)

さういふ方面の観察は姑く別問題として、たゞ私が平生考へてをりますところの時代精神——この時代精神と教育とがどんな関係のものであつたか、過去五十年の時代精神と我國の實際教育とどんな関係があつたか、又其の時代精神の變遷推移から、教育精神の變遷の上になんか影響が現はれたか。そして更に進んで、この時代精神の推移の上から現在の教育乃至教育精神はどうなつてをるか。また更に將來それがどう動くべきであるか。此等の問題を簡単に述べて見たいと思ふのであります。

一體時代精神と教育とが極めて密接な関係のものであることは、今日改めて言ふまでもないこととて、いろいろな意味で教育は當の時代精神と密接な関係を持つてをります。例へば徳川時代に於ては、日本の時代精神が儒教或は儒教主義によつて支配されたものであつたから、教育もまたそれに支配されたといふ風に、教育が當の時代精神に支配されるといふことが有ります。或意味から言へば教育は時代精神から影響をうけ易いもので、其の時代精神から離れるといふことはなかなか困難なのであります。勿論教育は常に時代精神に支配されると極つたものでなく、或場合にはこれに對して批判的な態度を取つて、其の時代精神に反對しようとするやうな場合も有ります。殊に時代精神が教育の精神と矛盾するやうに見える場合は、そんな風に傾いて行くのであり

ます。

それに反して時代精神が立派なものであつた場合には、教育は積極的にみづから進んで其の時代精神に合し、其の時代精神から力を受けて教育の精神を發揮しようとするのであります。故に時代精神と教育との関係はいろいろな意味に於て親密であつて、時代精神の變遷の上から教育的精神の變遷をも見ることが出来ると思ふのであります。教育に於て最も重要なことは、言ふまでもなく其の精神即ち教育精神であります。教授法とか制度とかいふことも大事であるが、最も大事なことは到底其の精神であります。精神の無い教育は死んだ教育であります。而して斯やうな教育的精神は必ず時代精神といろ／＼な意味で密接な關係を持つのでありますから、過去五十年間時代精神の變遷の上から教育的精神の變遷を見るといふことは、極めて意味深いことと思ふのであります。勿論過去五十年の時代精神の變遷をふり返つて見ることは、細かに言へば、それだけでもなかなか容易な業ではありません。短い時間に於てさやうな事が到底簡単に出来るものではありません。故にこゝでは單に私どもがお互に今日まで経験し來たつた事實を其のまゝにふり返つて見て、そこから教育精神の推移といふやうなことを考へて見たいのであります。即ち出来るだけ簡単に過去の時代精神の推移をふり返つて見て、そこから我最近の教育精神の變遷を

考へて見たいのであります。過去五十年の教育的精神の自然又必然の變遷推移を知れば、我國の教育も次第に進歩して又は推移してこゝまで來たつたものであるといふことが一種のパノラマ式に私どもに理解されるのであります。斯やうにして大體の過ぎこしかたを知れば、そこから私どもは現在更に進んでは當來の教育といふことを考へることが出来るかとも思ふのであります。明治大正の教育的精神は決して一本調子な簡單なものではなかつたのであります。

私はこゝで平生申すやうな理屈は成るべく省いて、簡單に自分が経験した事實に就いて、時代精神の變遷と教育精神の推移の跡とを概観し、そこから將來の教育はどうなるべきものであらうかといふことを矢張時代精神の上から考へて見たいと思ふのであります。

こゝまでは前置としまして、さて實際経験した事實の上から、まづ過去を振り返つて見ますと、私も實はこの學制頒布當時のことは知らない一人であります。私どもの心ついて自分の経験として今日多少明瞭に記憶してをりますことは、漸く明治二十年前後からのことであります。だからまづ大體その邊の時代からざつと過去を振り返つて見るのであります。そこで其の頃から今日までの日本の時代精神の變遷をば私は三期に分けて見たいのであります。三期に分けなければならぬといふ譯ではありませぬが、便宜上私はそれを三期に分けて見たいのであります。

第一期といふのは、これもしつかり何時頃といふことは言えませぬが、大よそ學制頒布の時代から明治三十四五年乃至三十七八年頃迄を一括して言ふのであります。さて此の第一期は如何なる時代又如何なる時代精神の時代であつたかといふと、大體の上から言ふと先づ當時は儒教の精神がまだ強かつた時代、儒教主義の全体の人心を支配してゐた時代であります。明治維新頃から少くとも明治二十年三十年頃までは、徳川時代の精神を受けて、まだ儒教的精神が立派な力をもつてゐた時代であります。その當時私どもが學校でまだ兒供として毎日のやうに教はつたこととていまでも尙記憶してをりますことは、なんでも孝行しろ、孝行しなければならぬ、孝行は一切の本であるぞといふことであつた。今日では必ずしも、毎日のやうに學校で孝行しろ親を大事にしろとばかり教へられないやうでありますが、私どもの學校時代には毎日々々孝行の話、まあ孝行の話よりは外に何も無かつた位であります。しかしその當時は學生も教師も其の點に關して生真地目であつた、尤もいまの學生諸君が不真地目だといふ意味ではありませんが、其の當時は學校で親に孝行しろと言はるれば、本當に孝行しなければならぬと思つたのであります。教師の方も矢張り衷心からさういつた心がけであつたやうであります。儒教主義ですからどうしてもさうなつて來たのであります。單にそればかりではなく、長者に對する尊敬、これも儒教主義か

ら出てくる精神で、その當時の私どもの記憶を辿つて見ると、長者に對する尊敬、目上者に對する尊敬、殊に教師に對する尊敬、今日でもこの美風は遺つてをりますが、その當時は今日よりもこの風潮が遙に強かつたやうに思はれます。事實を経験した方の記憶に訴へれば分るゝであり、實際私どもは目上の者殊に教師に對しては非常に深いリベレンスを拂つてゐたものであります。今日はどうかすると、教師何者ぞ、教師だつて人間だ、人間に變つたとはないなど、やるのであります。私共の中學生といつた時代には殆んどそんな感じはなかつた。長上に對しては十分の尊敬を衷心から拂はねばならぬといふやうな心持を持つてゐたのであります。

それから儒教は御承知の通り一身を修めて後ち家を齊へ、そして國を治める、そこまで進むのが理想であつて、儒教の本當の理想的精神はなか／＼普通には理解されない高遠なものであります。私しどもがまだ子供として、それから日本の國民がまだ明治の十五年二十年頃の幼稚な國民として、儒教の骨髓、儒教の理想的精神などは容易に分からう筈がなく、たゞ一ツよく分つてゐたことは儒教の裡に含まれてゐる功利主義の精神であつたのであります。身を立てるといふこと、立身出世をするといふこと、これが儒教主義のうちに含まれてゐる通俗的な精神で、其の本當の奥義はともかく、世俗にたゞ出世すること、偉くなること、成功すること、此れ等が孝行や

長上を敬ふこと、竝んで、學校に行くとき毎日必ず先生から教へられた事柄であります。偉くなれば修養しろ、大人物となれば、頻りに鼓舞されたもので、たとへばその時代の學生に、君は何になるかと問へば、僕は陸軍大將になるんだとか、僕は總理大臣になるんだとかいつて、ケチな商賣人になるとか、金を溜めるなどといふことは、少しも考へてをらなかつたのであります。何になるかと問へば、たゞ偉くなりたいと答へる。學校に行つてもたゞ偉くなれといふ。それから、誰は苦心してどう偉くなつたとか、誰はどういふ立身をしたとか、そんなやうな話ばかり澤山に聴かされたのであります。その苦學するとか、寝ずに勉強するとかいつた風なことは、毎日々々聴かされたのであります。今日の學生も勉強する、いや單に勉強といふ上から言へば、今日の學生の方が遙に餘分に勉強する。だから其の當時は餘り勉強しなくても、たゞ偉くなりたい英雄になりたいと考へたのであります。謂はゞ英雄崇拜といつたやうな傾向が非常に強かつたことを記憶してをります。これがその時分の學校の空氣を支配してゐたと思ひます。

それから全体から見ると、其の當時の學生とか民心とかいふものは、今日に較べると、目だつて荒ッぱく粗奔で今日のやうに緻密に細密ではなかつたのであります。今日は科學的智識が發達普及した時代であるから、ものゝ考へ方は總て實着で綿密であります。あの當時のことを今か

ら振返つて見ると、全体がまあ東洋風の豪傑流といったやうな状態で、粗奔と同時に一種豪放な放膽なところも有つたのであります。御承知の通り昔の學生は破れ袴を穿いて、薩摩下駄なんか突っかけて、ステッキをふりまはして歩いたものであります。その時分の學生の亂暴さは今日からいふと全く嘘のやうな話ばかりであります。東京大學の學生が寄宿舎から夜中に飛出して悪いところへ行つたとか、柔道で亂暴にも人を投げたとか、そんな話ばかりで、細かい考へ方などは少しは更に無かつたのであります。謂はゞ意氣は甚だ熾であつたが、緻密な學術的な考へなどは少しもなかつたのであります。これは儒教主義の悪い方面の影響かも知れませぬ。ところが明治二十年頃からして、獨逸哲學といふものが日本に入つて來た。獨逸哲學が這入る前に英國の哲學、佛蘭西の哲學なども入つて來た。今日はおもろ老人になられた西園寺公爵なども、その當時は佛蘭西の自由主義を日本に輸入してハイカラ黨の一人であつたのであります。その當時外國から入つて來た精神或は思想といふものは、日本の政治の黨派と不思議な關係を持つてゐた。今日の政友會即ち元の自由黨が佛蘭西の思想を引入れてゐるし、昔の改進黨即ち今日の憲政派は英國の思想を引入れてきたのであります。

それは兎もかく明治二十年頃、から獨逸の思想や哲學が日本に輸入された。即ち獨逸理想主義

の精神が輸入されたのであります。けれどもまだその時代には日本には本當の獨逸理想主義は解らなかつたと私は思ひます。今日から振返つて見れば、あの當時ヘーゲルとか、フイヒテとか、類にふりまはされたが、本當の意味は決して十分には解らなかつたらうと思はれます。然しとにかく獨逸の理想主義が當時の日本の時代精神と表面的にでも歩調を一にしたのであります。全体がまづ理想主義的であつたのであります。

それから尙こゝで私どもの注意すべきことは、明治二十年前後に於て、日本には恰も日本民族としての國民的自覺が高まつたこととあります。國家主義はまさに此の國民的自覺に基づいたものであつたのであります。明治二十七八年の日清戰役を經、更に三十七八年の日露戰役に至つて、此の國民的自覺が最高に達したことは、御同様に今日よく記憶してゐる事實であります。此の點に關しては私はこゝで細かに申上の必要は無いと存じます。

さて斯やうな儒教主義又は理想主義の時代をば、私は便宜上第一期又は前期理想主義の時代と名づけるのであります。全体に於て假令未だ單純素樸であつても、理想主義的色彩が濃厚であつたと思ふのであります。あの當時の教育が今日の教育と餘ほど精神を異にしたものであつたことは言ふまでもありません。

さて次は第二期の時代であります。こゝで豫め申上げて置きたいことは、新しい時代精神が現はれるといふことは、其の前の時代精神が全く無くなるとか滅びるとかいふ意味ではありません。新しい時代精神が前代の時代精神の外に新しく發生する所以で、つまり時代精神はますます複雑に成つて行くのであります。而して此の第二期の時代精神とは私は便宜上現實主義又は實證主義と名づけたのであります。何時頃からかといふことは一寸六ツかしいが、三十七八年の戦争が境界線で、おほよそ三十四五年頃から四十年頃を頂上として四十五年頃までを假に第二期と見るのであります。もつと精しく言へば、今日でもまだ第二期の脈が續いてゐて、吾々はすべて現實主義の空氣の中にゐるのであります。此の現實主義こそは、我教育界に於ても大分問題と成つたもので、我教育界は一面此の時代思想に支配されながらも、他面これには反対もし反抗もしたといつた風な複雑な關係であつたと思ふのであります。前期の理想主義とは大分脈が違つたものであつたから、殊に教育界の古老先輩がはては、此の現實主義は十分長所も認められながら、其の短所も随分ひどく攻撃され反對されたのであります。

現實主義又は實證主義とは何かといふと、精しい哲學上の解釋は別として、先づ其の根本精神

から言へば、現實といふ言葉が示すとほり、どこまでも實際的であり現實的であり實着を眼目として、理想的とかロンマチックとかいふ方面をすべて排斥する傾向であります。既に此點は十分御承知であると思ふから精しくは述べませんが、現實主義が自然科学の精神から産まれた緻密な精確な確實な實際的な傾向であることは申すまでもありません。此の現實主義の風潮が明治三十四十年頃に至つてますます發達し、日本國民の民心即ち時代精神がかがために甚しく變つてきたことは、私どもが十分明確に目撃したとほりであります。科學的に確實に事實を尊重するといふ傾向はもはや日本の民心から抜べからざるほどに深く鋭く刻み込まれたのであります。時代は殆ど全く一變した。着實な綿密な風潮は、前の粗奔な東洋豪傑流の氣風を斥けて、ますます廣くますます深く人心を支配するに至つた。例へば前に述べた第一期の陸軍大將だの總理大臣だの、理想はいつのまにか廢れて、實業とか商賣とか金錢とか富とか實利とかいふ風潮がいよゝゝ強くなつてきたのであります。

現實主義は簡單に言へば實利主義であり實際主義であります。物質的解放又は物欲の解放といふやうなことが最も大事なことゝ成つてきたのであります。實際的なパン問題が生活の第一義と考へられるやうに成つたのであります。教育者は此の點で先づ大に苦しまざるを得なかつた。と

いふのは實際生活第一義では、どうもそれは教育の眞精神に矛盾するやうに考へられたが、然し事實みづから生活難に苦まざるを得ない。理想は如何にあらうと、教育者が先づパン問題に就て行きつると、いふことは、如何にしても不思議なデイレンマであり又悲劇であつたのであります。今日も未だ此の暗流が続いてゐると見られるものであります。

兎に角昔儒教主義から金銭など賤しいもの男子の口にすべからざるものなど教へられた時代に比較して時勢は實に急激に變化してきたのであります。日本の教育が頻に物質的欲望の満足を主張した譯ではありませぬが、斯やうな時代精神は深く教育界にまでしみ込まなければ已まなかつたのであります。斯くてまた前代の英雄崇拜などいふ傾向が無くなつて、反對に寧ろ凡人主義が人心を支配するに至つたは、これも時代精神の自然の結果であります。當時日本の文壇にはナチユラリズム即ち自然主義が大きくなつて運動を起したことは皆さまの御承知のとほりであります。

それから此の第二期に於ては——此等の點が殊に教育界に於ては問題と成つたのであるが、個人的風潮とでも名づくべきものが非常に強くなつてきたのであります。私どもの子供の折には、親に孝行しろ、長上を敬へと教へられたものが、今度は反對に子供だつて、親に對して權利をも

つてゐるといふやうなことが言はれるやうに成つてきた。中には階分極端な人たちも有つて、親が勝手に吾々を生んだのだから、そんなに親だ親だと威張られては困るなど、威張る連中も出来てきた。殊に長者に對する尊敬などは、時勢と共に甚しく變つてきたやうに感せられるのであります。教育界では、初等教育はともかく、中等以上の教育に於ては、殊に子弟の關係などが甚しく昔とは變つてきたやうであります。

又此の個人主義的關係と並んで現實主義が産出した一つの傾向は彼の新舊の衝突とか、舊派に對する新人の反抗といつたやうな傾向であります。斯やうな傾向が一時はどこにもこゝにも現はれ、教育界に於てさへも新舊の對立といふやうなことが問題に成つたことは皆さまの目撃され又經驗されたとほりであります。

これを要するに、現實主義の精神は、いろいろな意味に於て教育界にも深い影響を與へ、我教育界はこれがために主として成功主義、實利主義、主智主義、伶俐主義、才子主義、に傾いたことは、今日から見て最早少しの疑ひも無いのであります。現實主義は長所と共に短所をも教育界に影響を及ぼしたのであります。

次に第三期に入ります。第三期といへば現在の問題であり、又現在から將來へかけての問題で

あります。第三期とは如何なる時代精神の時代であるか、第三期時代精神とは何か。こゝに至つて問題はなかく六ツかしく成つてきたのであります。思ふに現在ほど複雑にして簡單に見分がたい時代ハこれまで無かつたのであります。餘りに澤山の思想や傾向やが互に入り亂れるといふほどに複雑に重なり合つてゐて、どこが現在であるか、何が現在及び將來の時代精神であるか、眞にこれを見分けることが困難なのであります。世間は皆めい／＼勝手なことを言つて、てんでこれが時代精神であると言つて、みんなそれ／＼違つたことを言つてゐるのであります。

私がこゝで述べようとしてゐる時代精神は、實は最近動きかけたばかりのものであつて、果たして將來の時代精神として事實に發達して行くものであるかどうだか今日から明らかに豫言することの出来ないものであります。事實上の豫言は出来ないが、是非とも將來の時代思想でなければならぬ、必ずさうあつてほしいと希望され願望される種類のものだと私は信じてをります。故にさやうな立場から私は平生見てゐる現在及將來の時代精神といふやうなものを申上げて見たいと思ふのであります。そこで私の見るところでは、今日時代精神として動きつゝあるものに二つの大きな傾向が有る。複雑な傾向中この二つのものが群を抜いて時代精神に成らうとしてゐる傾向が見える。それは何であるかといふと、一つは新聞や雑誌などで御覽の通り喧しい問題とな

つてゐる彼の社會生活といふ風潮であります。社會生活の改造即ち廣く多數民衆の生活を改造して行かう、民衆の實際生活即ちパン問題を改造して行かうといふ極めて實際的生活に關係した一種現實主義的な風潮であります。斯やうな風潮が戦後殊に喧しいのは諸君御承知のとほりであります。それからもう一つ他の傾向は、これも非常に漠然としてをりますが、最近の流行言葉になつてゐる文化主義が即ちそれでありませう。この文化といふ言葉も、この頃ではあまり流行過ぎで、何のことだか一向解らないやうになりました。流行となれば何でも文化でなくてはならぬと見えて、文化生活はまだよいが、淺草には文化瀧が有り、また文化帽子や文化靴乃至は文化まげも有るといふことです。昔はハイカラといふ言葉が流行つた。其のハイカラの代りに今日は文化的といふ言葉を用ゐるやうに成つたやうであります。あの人は文化生活をやつてるといふと、それは贅澤なブルジョア式生活をしてをるといふ意味であります。かうなつてくると文化といふ言葉も甚だ要領を得ないことに成つたわけであります。

それはともあれ、私はこの文化主義をば嚴格な意味の理想主義と解釋してをります。例の獨逸の哲學者カントは文化の範圍を三つに分けた。これは少し哲學をおやりになつた方はよく御承知のことでありませうが、文化は簡單に、精神文明で、第一は智識生活の發達、これが文化の一

面、第二には道徳的生活の發達、そして第三は藝術生活の發達であります。カントは此の三方面をば文化の範圍と見たのでありますが、これは最近日本で流行つてをる新理想主義は特に宗教生活の發達といふ一面を加へてこれを文化の一面と見るのであります。即ち學術、道徳、藝術、宗教に關する精神生活の發達、これが嚴密な意味に於ける文化であります。私は此の解釋が最も適當な文化主義だと思ふのであります。極めて簡單に文化主義又は理想主義を解釋すれば、それは最も嚴格な意味に於ける人格尊嚴主義であります。人格の根柢には或は學術的に或は道徳的に或は藝術的に或は宗教的に一種普遍的な絶對的な美しい光が潜んでゐるのであるから、其の美しい光即ち人格を發揮し、發揮する事が人生に於ける最大事、又それが人生に於ける最高價值であると観るが、文化主義乃至理想主義であります。斯やうな人格主義が今日日本の思想壇に微かながら現はれてゐることは事實であります。

斯やうに一方に於ては社會生活の改造、そして他方に於ては文化主義、此の二つの思想又は傾向が今日殊に新聞や雑誌を賑はしてゐるものであります。然るにこの二つの精神は本來互に相反する性質をもつてゐる、二つながらともに外國から入つて來た思想であるが互に相容れない。社會生活の改造といふ精神は、主として佛蘭西、英國、米國あたりから入つて來た思想で、文化主

義理想主義とは主として獨逸から、獨逸ばかりではありませぬが、主として獨逸から入つて來たものであります。單に別々な國から這入つてきたからといふ譯ではないか、兩者は互に相容れない傾向をもつてゐる。何故なれば社會生活改造といふ精神は、そこに明白に客觀的に眼前に現れてをる生活を改造して行かうといふのであるから、客觀的存在、現實な實際生活の改造を目的としてゐる。ところが文化主義理想主義は、人間のかくれたる、精神的生活を對照として行くものであるから嚴格な意味の主觀主義である。一方は客觀的であり一方は主觀的である。これだけの違ひがあるからして、現に今日日本の思想界を御覽になると如何にこの兩者が相争つてをるかが明瞭に分るのであります。

社會改造方面の極端な説を唱へる人達から見ると、文化主義といふものは大變迂濶な、そんなことはどうでもよい、それなら生活の改造が第一ではないか、文化主義なんて餘計なことだ、人間はまづ食ふことが第一の問題ではないか、文化主義なんて事實資本主義から發達した傾向だ、ブルジョア階級の文明だ、とかう言つて一概に文化主義即ち理想を空想だと斥けて了ふのであります、然るに一方理想主義文化主義の方から見ると、生活といふことは、直接には食ふこと、パンの問題には相違ないが、そのみで人生は立つて居るのみではない、吾々には生きた内的な生

命が有る生きた理想が有る。人間は精神一つ、理想一つで生きてをるものではないか。人はパンのみで生きるものではない。然るに社會改造論者がたゞ實際生活、パンの問題のみを唯一の人生問題とするは甚しく淺薄である、皮相も甚だしい、と斯ういふ風に兩方が喧嘩腰であります。まあ一方は獨逸主義、文化主義の立場の人、一方は英國主義、實際的實利的改造論者、この兩面の風俗が互に軋轢してゐるのであります。

そこで委しい理屈は畧して、私は結局この二つの思想は、今日は互に相争つてゐるが、理想的に言へば、どうしても調和しなくてはならないものと思ふのであります。或はこの調和といふことが日本文明の將來の大きな仕事になるのかも知れない。理想主義をば私は要するに斯う考へてゐる。人格の尊嚴、これが理想主義の生命である。なる程表面人間は淺薄なものである、汚いものではあるけれども本當に人間として考へるならば、如何なる人も人として人格としては皆尊いものである。無限の權威を備へたものである、その美しい光を發揮させるならば、どこまでも美しくなるべき素質を備へてをる。斯う見るのが理想主義であります。然るに社會改造の人々の主張する所も矢張り個人々々に人間といふものは尊いものである、どんな階級に生れたものでも人間は尊いものであるといふ人道主義に立脚してゐるので、此の人道主義を離れては社會改

造も何も有つたものではありません。故にこの點に於て理想主義と社會改造の思想とは期せずして相一致すると私は信するのであります。此の點を今日私は委しく申上げる暇がないから略しますが、つまり人格の尊嚴といふ點に於て今日の相容れざる二つの思想が結びつくのであります。これは餘り抽象的な言ひ方で、もう少し具体的に申させぬと要領を得ないかも知れませぬが、其の方面の難しい理屈は略します。

さてこの現代の二つの思想からどんな影響が教育上に及ぶかといふと、假にこの二つの思想が調和して發達するものとすれば、將來の教育は矢張り人格の尊嚴といふことを土臺とするやうになるだらう、又さうすべきであると思ふのであります。再び人格の尊嚴といふ所になつて來る。或る意味で言へばそれは昔の理想主義になつて來る譯になります。人間を人格として得難いもの、美しいもの、よいもの、どんな人間一人でも之れを人間として見れば、どこまでも非常に尊いものである、そしてその人間を人間として發達させるとが教育でなくてはならないと、斯ういふことになるのであります。個人として人格に重きを置いて行くと、これは今日までの歐羅巴の歴史が明かに證明してをるのであります。總てに國際的といふことがついて廻るのであります。時代思想が單にこの國內だけに止つてゐないで、更にその國內の國家主義を擴めて、そし

て世界主義へ廣がつて行く、インターナショナルな形を取つて行くのであります。人間を人間として愛する、廣い意味で人間愛、人生愛、それがずつと擴張されて行くのであります。

これまで述べて参りました三段の時代思想の變化と、そこから受ける教育の影響とに就て、こゝに之を概括して見たいと思ふのであります。有名な獨逸の哲學者ヘーゲルは、ものの發達はすべて三段式であると論じた。こゝに一つの例へは理想主義が有れば、第二にはそれに反對の思想が起つて来る、第一の思想を否定する思想が起つて来る。そこでこの相反する二つの思想が對立すると、そのまゝで止まつては居られないから、相反するものが調和して、更に互に綜合に達しようといふ第三の傾向即ち總合が現れて来る。丁度第一に理想主義の時代があつたとすれば、これに對して丁度先刻述べた現實主義の思想が現はれ、更に此の二つが第三の高い理想主義に總合されるのであります。ヘーゲルの説明によると、その高い第三の綜合は決して第一第二のものを否定するものではなく、寧ろ第一第二の盡くを自分のうちに藏めて更に一層高い發達を遂げるものだといふのであります。丁度これが只今まで述べた日本の時代思想に適合するのであります。斯やうに考へてくると教育制度が布かれて以來五十年、日本の教育界は時代精神の上から見

て、決して一本調子なものでなかつたことが、熟々感ぜられるものであります。私ども教育に係してをるものは、時代精神が如何に變化しつゝあるか、その時代精神に對する批判力を有せねばならぬ。たゞ盲目滅法に時代精神を受け入れてよいといふ譯ではない、いゝ所を取つて悪い所を捨てるといふ批判的態度を取つて、そして日本の教育を新にして充實して行くことが吾々の任務でなければなりません。眞に美しい尊い時代精神に活きて、活きた力ある人格的感化が被教育者に及ぶといふことは、或意味で教育の理想だとも考へられる程であります。(終)

著 合 人 新 大 八

張 主 育 教 大 八

(圖 三 價 正)

自學教育論……………	樋口長市述
自動教育論……………	河野清丸述
自由教育論……………	手塚岸衛述
一切衝動皆満足論……………	千葉命吉述
創造教育論……………	稻毛金七述
動的教育論……………	及川平治述
全人教育論……………	小原國芳述
文藝教育論……………	片上 伸述

現代の風潮と精神生活

文學博士 吉 田 靜 致述

「現代の風潮と精神生活」といふ題目について、少しく申述べて見たいと思ひます。精神生活は人間の本質であります、人間の特性であります、此の人間の特性に就て初めに少しく申述べたいのであります。

いろいろの點から人間の特性を考へることが出來ますが、人間の具へて居る感情の方面から人間の他のものと違つて居る所を考へて見たいのであります。さう致しますと先づ第一に擧げなければならぬのは、恥かしいと云ふ感情であります。英語の *shame* 恥ぢると云ふ感情、是れが人間にのみ具はつて居る感情でありまして、人間以外のものに見ることの出來ないものでありま

現代の風潮と精神生活(吉田博士)

す。裸體になると恥かしいと云ふ感じを持つ、隠すべき所を隠さずに居ることを恥かしく思ふと云ふことがある、或は婦人が大食をして居る所を見られると恥かしいと思ふとかいふやうに、様々の事に就て恥かしいと云ふ感じを懐くのでありますが、斯る感情は人間の特性と云ふて宜しい。他の動物即ち犬猫などは初めから素ツ裸でありまして、隠すべきものを隠さず、初めからさう云ふ事に就て恥かしいと云ふ感じを持たぬのであります。

そこで斯かる恥かしいと云ふ自然の感情はどう云ふことを表示して居るか云ふと、むづかしいことはすて措きまして、詰り人間は靈的精神的生活を持つて居ることを其の本質として居るのである。其の靈的精神生活といふものから見て、甚だ劣等な肉的生活と云ふことが恥かしい、斯る肉的生活と云ふものに對して、人格の人格たる靈の本質が茲に自覺的に現はれて來た。我は靈的存在物であると云ふ尊嚴を肯定し、難かしい言葉で云へば道徳的自覺を起したと云ふ意味が、恥かしいと云ふ感情の中に表示されて居るのであります。耻を感じるると云ふことがだん／＼進んで立派なものになれば、所謂良心の發動と名づけらるゝことになるのであります、恥かしいと云ふことは、是れはしてはならぬものである、其の反對のものは爲すべきであると云ふやうな譯で、道徳上の善惡の辨別と云ふことも、此の恥かしいと云ふ感情から直接導き出さるゝことにな

るのであります。是れが人格の具へて居る獨特の自然の感情で此の自然の感情が本となりまして、道徳生活と云ふものがだん／＼發展して來ると云ふことが言はれるのであります。

それから第二の特性と見るべき自然の感情は何かと申すと、是れは氣の毒に感ずるといふことであります。他人の惱み、苦痛に陥つて居るのを知る時に、之に對して氣の毒だと云ふ感じを起す。是が人格に具はつて居る一の特性であります。モツと範圍を廣くして言ひますならば同情と云ふことでありますが、其の同情の中の一つであります。同情と云ふのには苦しい者に對して同情し、之れを氣の毒に思ふことの他に、他人の喜んで居る事に對して、之れに同情して共に喜ぶと云ふこともありますが、其の共に喜ぶと云ふ意味の同情よりも、他人の苦しみに同情して氣の毒に思ふと云ふ感情の方が道徳的に云ふと極めて純粹なる性質を具へて居るのであります、詰り不道徳性を具へて居らないと云ふ一の特色があります、その事をちよつと説明して置きたいと思ふのであります。

一體喜びと云ふものは、往々にして不純粹なる性質を帯びることがあり得るのであります。無論喜ぶことに道徳上純粹なるものもありませんけれども、往々にして不純粹性を伴ひ得るのであります。例へば泥棒をして喜んで居る人も少なからうと思ひます。さうすると、斯かる喜びは

即ち道徳的には甚だ不純粹の性質のものである。不道徳の性質を具へて居る。其の喜びに自分が同情して一緒に喜ぶと云ふとは、不純粹なる道徳性が働いて居るのであります。泥棒と云ふやうなそんな大外れた悪い事でも、朝早く起なければならぬのに朝寝をして喜んで居る人も随分多いのであります。そこで其の喜びに同情して自分も一緒に喜ぶと云ふことは同情ではあるけれども、其の喜ぶことが既に不純粹なるものであり不道徳性であるとする、それと一緒に喜ぶことには不純粹不道徳性が附いて廻る、自分が一緒に朝寝をしてしまふことになれば、怠けると云ふ質の善くない事にもなるのであります。勿論共に喜ぶと云ふことは同情であるには相違ないのであります。最初に申し上げました恥かしいと云ふ此の自然の感情に依つて洗禮を受けて出て来た喜びならば、是れは純粹の喜びであります。恥かしくないやうな結構な活動をして喜ぶのは誠に結構でありますけれども、恥かしいと云ふ或は更に進んだ言葉で申せば良心の洗禮を受けない場合には、喜ぶと云ふことにも今言ふやうな不純粹な事がありまして、さう云ふ喜びに同情して一緒に喜んでしまふのは、質の善くないものと云はなければならぬのであります。之れに反しまして苦しみと云ふことは、さう云ふ不純粹性不道徳性を帯びて居らぬ。もと快樂と云ふことは、簡単に申せば利己的の性質を帯びて居るものである。之れに反し苦痛と云ふ方は非利己的の

ものであつて、道徳上不純粹なる性質はないのであります。勿論不純粹な不道徳な事をなした結果、苦痛を減すると云ふやうな事があります。色々な悩みを陥ると云ふことがある。其の場合には其の不道徳なる事を實行したる罪の報ひとして其の購ひとしての悩みであり苦痛であるので、悩み其のもの、苦痛其のものが不道徳なものではない。不純粹なものではない。寧ろ不純粹なる活動を爲した不道徳な活動をした所の報ひと云ふことに於ての悩みであり苦しみである。苦しみ其のものが罪のものではない。要するに悩み苦痛と云ふことは、喜快樂と云ふことに比ぶれば純粹性を包圍して居る譯であります。さう云ふ悩み苦痛と云ふものに同情して氣の毒に感じて共に苦しむと云ふことは、道徳上極めて純粹性のものと云ふて宜しいのであります。

それからもう一つ斯う云ふことも言はれるのである。満足を感じる、快樂を覺える、と云ふことは、或る目的を成就したと云ふことに伴ふ所のものである。それで満足してしまつたのである。早く云へばそれで落着いたのであります。斯うせねばならぬと云ふやうな熱望を感じるの方のものでなく、既に満足してしまつたのであると云ふのであるから、活動的でない、活動に關して云ふならば消極的の態度のものとなるのであります。之れに反して苦痛悩みと云ふ方は、満

足を得ないで是れは何とかせねばならぬと云ふことであるから、どうか之れを解決し、或は救ふ所の途を講せねばならぬと云ふ立場にあるのでありますから、活動と云ふことに就ては消極的でなく積極的であります。それが活動的の本質のものである。さう云ふ譯でありますから儲みに陥つて居る者に同情し、之れに對して氣の毒に感ずる時は、唯一緒になつて喜んでしまつて落着き了るのは反對で、進んで他人に對して適當なる處置を執ると云ふ生々した活動をなすと云ふことになるのであります。それに他人の喜びに對して共に同情的に喜ぶと云ふことも、他人に對する道徳の根底となるのであります。前に申した通り恥かしいと云ふ感情の洗禮を受けての上で喜ぶのは善いことではありますが、普通に申すと同情的に一緒に喜ぶと云ふことは往々不純粹性を伴ふ場合があり得ると申して宜しいのであります。何れにせよ共に喜ぶ場合にもせよ、共に悲しむ場合にもせよ、同情と云ふ場合は是れは人格の特性でありまして、人格以外のものは決して之れを見ることが出来ないといふ點に於て同様であります。其の同情殊に氣の毒に思ふと云ふことが、人格生活の一大特色と云ふて宜しいのであります。

そこで恥かしいと云ふ感情は人格の本質と云ふものから見て、即ち靈的な本質と云ふものか

ら見て、劣等なる生活状態、其態度に對して起る自然の情であります。氣の毒に思ふ同情を感ずると云ふことは、是れは己れと同じ資格の靈的存在物たる他の人々に對しての自然の情同等の者に對して同じ尊嚴性を具へ、同じ資格の人格に對して觀るところの自然の感情であります。無論人間以外の者に對しても之れに類する如き同情心が無い譯ではありませんが、純粹なる同情と云はれるものは、己れと同じ性質のものに對する場合である。「他を見ること己れの如く見る」といふ態度、是れが一般人類に對するところの道徳的態度の根底であります。他を己れと同じに見ず眞に同情の働が發動しないと云ふ場合は、他人を眞に有る通りに見ないのであります。それは眞實といふ道徳に反いた態度である。之れを己れと同じ性質のもの、同じ尊嚴性を具へて居る人格として取扱ふことに於て、眞實といふ立派な道徳が成立つのであります。他人に對する道徳が普通に社會的道徳と云はれて居るものであります。其の中に博愛若くは仁愛と云ふ事と、公正若くは正義といふ二つの徳を擧ぐるのであります。博愛と云ふことは通俗的に申せば他を助けると云ふことである。公正と云ふ方は他に損害を與へない、當然他に對して爲すべく限定されて居ることを爲すことである。其の事を爲さずに居ると云ふやうな、或は爲してならぬと決まつて居ることを他人に對して爲すと云ふのは、他に害を與へることである。さう云ふ他を害する如き

事を爲さないのが普通に正義公正、モツと立入つて申せば他人の當然要求する権利を尊重して之れを侵害しないと云ふ意味が公正若くは正義の徳と云はれて居るのであります。他人に對して爲すべく限定され居ることを爲さないならば、他人の當然要求して居る権利を侵すものである。仁愛は積極的社會的徳といはれ、正義は消極的社會的徳と云はれて區別されて居るけれども、理想的に申せば、吾々は他人に對して最善のことを爲すべく求められて居るので、他人を助けるといふことに於て出來得る限りの最善を爲さない時には、他人に對して當然爲すべく限定されて居ることを爲さないといふことになるのである。詰り他人から云へば當然爲して貰ふべき要求が充たされないことになるので、他人を助けないと云ふことは、言ひ換へれば他人に害を與へると云ふことになるのであります。普通には仁愛若くは博愛と云ふことはこちらの好意によることで、實は爲しても爲さぬでも宜しいといふ自由の餘地のあるものと考へられ、公正若くは正義の方は是非しなければならぬと限定されたものであると考へられて居るのであります。理想的に申せば他を助けるといふ仁愛博愛の態度に於て他人を取扱ふと云ふことは、當然他人に對して爲さねばならぬこと、もう一つ深く言へば、仁愛博愛といふことはやがて正義公正そのものと合致して別のものではないと云ふ理窟になるのである。兎に角吾々は自分と同じ資格の他の人に對して同情の

念を起すのであり、其の美しき代表的の形のものとして氣の毒に思ふと云ふ感情が人間の特性であるといふことをお話ししたかったのであります。

そこで恥かしいと云ふ感情は、己れの本質から見て一段と劣等な者に對して懐く感情であり、氣の毒といふことに依つて代表せられる同情と云ふものは、己れと同じ資格の人格に對して自然に想はれる感情であります。此の二つの外にもう一つ人格に特有なる感情があります。それは己れよりも遙かに優れて居る所に對して自然に起るところの感情であります。尊いといふ感情を懐く、畏多い、かしこいといふ言葉がありますが、さういふ心持は是れは己れよりも遙かに優れた者に對して懐く自然の感情で、是れが又人間のみに存在して他の者に存在せざる所のものである。孔夫子の言ふた言葉の中に斯う云ふことがあります。「君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言」是等は己れよりも遙かに優れた偉大なるものである、甚だ優れて居るところの原理、或は法則と云ふものに就て、尊崇畏敬の念を懐く、斯ういふ感情のあることが人格の一大特色であります。斯かる感情はどう云ふ所に最も早く認められるかと云ふと、小さい子供が親に對して此の感情が發動し來るのであります。幼兒に對して親と云ふものは格段と優れたものとして現は

れて居るのである。其の親にさへ取絶つて居れば全く安全である。親は己れの攝理者であるといふ意味に於て、全く之れに頼寄る、遙かに優れたる力として之れを尊み、崇敬の念を懐いて居るのであります。宗教的に申せば、信者が神佛に對して取絶つて安心立命を求め、神佛は己れの攝理者となつて居るといふ態度で、子供が親に對して自然に此の感情を起すのであります。

そこで子供の親に對する場合、或は信者の神佛に對する場合に、今言ふた尊崇畏敬の念が起るのであります。斯かる感情が發揚し尊崇畏敬なる念を起すと云ふ其の心の働きに就て少しく説明する必要があります。成程子供は親のやうな優れたものでないが、親を優れたものとして認めてこれを尊崇するといふ働をなす所の心の底には、既にさういふ優れた素質、偉大なる素質が既に内在的に具はつて居るといふことに着眼しなければならぬのであります。神佛を認め、神佛を信仰するといふ光をなす所の心には、佛の性、神の性と云ふものが既に具はつて居ると云はなければならぬのであります。己れに佛性神性が具はつて居らなければ、佛を信ずるとか神を認めるとか云ふ心の働きの出やう筈はないのであります。シエリングといふ思想家の言ふた言葉に、「神を認識する場合には認識されるものも神であるか、認識する者も亦神である」と言ふて居る。詰り神の性があるから神を認め、神を憧憬れ、神を崇拜し信仰するのであります。又バスケルといふ思

想家が斯う言ふて居ります。「既に見出されて居るにあらざれば求めると云ふことはあり得ない」或理想を求めるといふことには、其の理想が與へられ既に見出されて居るといふことでなければならぬのであります。見出され居るにあらざれば求めることは出来ないと言ふて居ります。是れは私は眞理であると思ふ。己れよりも遙かに偉大なるものとして其のものに對して尊崇畏敬の念を懐くと云ふのは、其の偉大なる芽が己れの心の奥底に胚胎し具はつて居ると云ふことを明白に示すものであります。いつ何所の猫が佛參りを致しましたか、いつ何處の犬が神詣りを致しましたか、彼等は神佛を求めると云ふことを問題としては居らぬ。兎に角神佛を考へ、神佛を求め、神佛を信じ崇拜するといふ働きをなす心には、神佛の性があると云はなければならぬと思ふ。總ての人が神を信じ佛を信じて居るとは限らぬが、少なくとも無限と云ふことを考へたり論じたりしない人はなからう。又信じないまでも神佛を考へないと云ふことはなからうと思ふ。無限といふことは少なくとも中學時代になれば問題となされるものであります。私も中學時代にはこの無限のことを幾何學上に於て説明された。それは二つの平行線は無限に於て切り合ふものであると説明された。ハアさうかと考へたが今の中學では平行線はどういふ工合に説明されて居りますか、大分私共の中學時代とは隔りがあるから分りませぬが、數學者は兎に角無限と論じます。哲學者は無

論であります。既に無限を考へ、或は論じ、或は宗教的に申せば神佛を考へたり或は信じたりするとするならば、さう云ふ働をなす心には無限性があると云はなければならぬ。神性佛性がそこに具はつて居たと云はなければならぬのである。即ち己れよりも遙かに優越せる偉大なる原理、或は偉大なる者に對して尊崇の念を起す感情があるとするならば、さう云ふ働をするところの心に既に斯かる偉大なる性質が具はつて居るのだと云はねばならぬことになる。然らばさういふ己れの心に對して大いに尊崇の念畏敬の念が湧いて來なければならぬのであります。大に自敬自重しなければならぬ。然るに餘りに自らを侮り己れを輕んじて、随分粗末な扱ひをするので困る。即ち泥棒をしたり、詐欺をやつたり、恥かしき事をして恬として顧みないのは、それ程尊いものとして自覺が無いからである。眞に己れが尊いものならば、其の尊い者として己れの活動をして苟しくもさせないやうにすべき筈であるのに、自らを輕しめ、或は卑しめて詰らない活動をするのは、甚だ慨歎すべき事と思ふのであります。

そこで斯くの如く吾々の心の本質と云ふものは無限性のものであるとするならば、それから當然出來る結論が茲に一つどうしてもあるのであります。それはどう云ふ結論であるか、物質的の

方から申せば誰も知つて居るやうにお互に個々離れ／＼になつて居り排他的に存在して居る所のものであるが、靈的生活即ち心の本質の方から申せば、吾々は互に身體が離れて居るやうな意味に離れて居るものでないと云ふ結論になるのであります。精神生活を無限とするならば、決して離れ／＼になつて居る關係のものでない。同一體のものであるといふことになる。若し離れ／＼になつて居るならば互に制限せられることにならなければならぬ。限り有ることになりますから無限性であると云ふことに矛盾して精神生活を奪ふことになる。無限性を具へて居る精神生活を本質とするならば、己れと他の人と離れ／＼のものでなくして、同一體と云はなければならぬのであります。是れが又人格の一大特色でありまして、其の特色を現代の人々は餘りに忘れ過ぎて居りはせぬかと思ふのであります。餘りに排他的である。従つて他の者にどんな迷惑が及ぶと、そんなことに少しも構はぬ。自己本位、自己中心主義と云ふ態度に立つて來て居るが現代文明の一大缺點である。是れは人格の特性に目が眩んだと云ふことで、甚だ慨歎すべき事柄と私は信するのであります。是れが色々々の事に現はれて來て居る。御承知でもありませんが、獨逸で最近にスベングラールといふ人が「西洋の没落」といふ書物を著はしました。二巻のものであるのが、第一巻だけ完成されて、まだ後は完成致しませぬが、西歐羅巴を中心とせる西洋の文明なるもの

は愈々滅びてしまふと云ふことを學術的に論じて居るのであります。私も精密に讀んだ譯でありませぬので、詳しくは讀んだ人から聴き又ちよつと所々即讀した丈けの材料からでありますから、十分正鴻を得て居るかどうかは疑問かも知れませぬが、このスベングラの考に依ると、文明と云ふものは古來色々ある。或は印度の文明もあり、支那の文明もあり、埃及の文明もあり、希臘の文明もあり、或はキリストの文明とか、西歐羅巴を中心とする西洋の文明等色々あります。是等は皆それ／＼獨立のものである。一つの文明が次の文明に續いて更に發展し、又次のに繼續するのでなくして一々獨立のものであつて、其の文明が生れ出で榮え衰へて死んでしまふのである。是等の間に繼續と云ふものがないのである。そこで西歐羅巴を中心とする所の西洋の文明も起り、榮え、衰へて來て、愈々滅亡することに今度はなりつゝあるので、即ち没落に類して居るのだと云ふことをだん／＼論證して居るのであります。其の滅亡に類しつゝある西洋文明の特色の一として今申しました物質主義、自己中心主義の跋扈といふのがあるのであります。此の自己中心主義と云ふものは必ずしも個人の上に就てのみ云ふのではない。階級の上に就て團體の上に就ても、國體の上に就ても、同様に當嵌るのであります。資本家の階級、無産者の階級と云ふやうな者でも、其の資本家が自己の階級だけを本位として、他の者に迷惑になることを構はず

活動すると云へば、自己中心主義である。無産階級者だけを中心として他に迷惑が及ばうと構はぬと云ふならば、是即ち無産階級自己中心主義であります。又國家と雖もさうであります。彼の獨逸は大戦以前及戦時中力政策を行つたのであります。是れは道徳もヘチマもあるものか唯力でやつつけろ、他の國家にどんなに迷惑が及ばうと、どんな影響が人類に及ばうと、そんなものはぬ、唯力主義的の自己中心主義と云ふものを採用したと云ふのであります。是れ又物質主義的な自己本位的な立場のものである。さう云ふ主義が西洋文明の特色の一となつて參つたのであります。此の特色が所謂今日の社會主義なるもの、運動を喚起すに至つたのである。是れ又一つの特色として見るべきものであります。即ち今までに於いて日本は兎に角としまして、西洋に就て言ひますならば、人間の生活と云ふものは靈的方面に於て極めて意味の廣いものがあるに拘らず、唯其の中の經濟的方面だけを本位とし、物質的利得一點張りとなり、而も資本主の人達は己れだけを本位とし、若くは資本主の階級だけを本位として、即ち自己中心主義、而も物質主義の立場に立つて人類一般の上にどんな影響が及ばうと、それは構はぬと云ふ態度に立つた。是れは只今申しました人間と云ふものは、其の心の木質から申せば本來同一體のものであると云ふ、人格生活精神生活の根本義に背くやうな態度に資本主義と云ふもの、陥つた弊害であります。さう

云ふことから生じました経済社會と云ふものには大なる害毒が生じたわけでありますから。之に對する反動として所謂社會主義なるものが勃興したと云ふことになるのであるが、此の社會主義なるものも、是れ又物質主義であります。経済的利得と云ふものを本位とするものである。さうして今度は無産階級本位といふ立場に出たのである。さうして有産階級なるものを己れ等の敵と考へ、憎むべきものと考へ、之れを滅ぼすと云ふことを目的とし、階級闘争と云ふことを出發點として、いろいろ計畫をするのであります。是れ又只今申しました精神生活の根本主義から見れば、總てのものが同一體であると云ふ事に背く所の立場のものである。其の意味に於て自己中心主義的であると云ふ點に於て、誤りたる資本主義の立場と、此の社會主義の立場と云ふものは全く同一になつて居るのであります。同じ間違つた土臺の上に成立つた所のもの同士が喧嘩をして居ると云ふ有様である。さうして無産階級者の連中は自ら號して改造と云ふて居りますけれども、精神生活の根本主義から見れば何の改造でもないのである。詰り同じ立場の上に立つての喧嘩である。同じサークルの上に立つて互に争つて居るのであります。即ち同一體主義と云ふものに反對するやうな、人格生活の根本義に悖ると云ふやうな、自己中心主義と云ふことの上に立つて居るのでありますから、眞に改造と云はるべき性質のものでないであります。

以上の如く彼等は改造と言ふて居るけれども、實は眞の改造ではない、若し眞の改造を叫ぶならば精神生活の根本義に基いて同一體的生活、資本主も即ち有産階級の者も、本來同一體である。或る階級が他の階級のことを憎んで争ふと云ふやうなことを全然一掃し去つて、本來同一體であると云ふ立場の上に於て、今日現はれて居る所の經濟上其他の困難なる問題を解決すると云ふ時に、是れが本當の改造運動と云はれるのであります。然るに今日の改造論者はどこまでもお互に自己を中心として喧嘩する、他を敵と考へると云ふやうな立場に立つて居るには、誠に歎かましい事と思ふ、斯かる現代の風潮に對しましても、どうしても精神生活の根本義を明かにすると云ふことが最大の急務であると思ふのであります。

さう云ふやうな譯で物質主義となり、それが纏て自己中心主義、さうして遂に其の結果と云ふものが今日の社會主義を生むに至つたと云うやうな事が、是れが即ち西洋文明に認められる所の特色の中の主なる事でありますが、兎に角さう云ふやうに西洋の文明は今や没落に傾しつゝあると云ふことを、スペングラの「西洋没落」と云ふ書物の中に言ふて居るのであります。さうして其の書物の中に斯う云ふ所がある。西歐羅巴を中心とする西洋文明は愈々没落するが、露西亞の文明にはまだ將來がある。所謂西歐羅巴を中心とする西洋文明には最早將來がないけれども、露

西亜の文明には將來がある。と云ふことを言ふて居るのであります。

露西亞の文明と云ふことに就て私の思出すことが一つある、それをちよつと紹介して見たいのであります。それは何かと申すと數年來私が愛讀して居る所の露西亞の思想家の著述がであります。其の思想家と云ふのは是れは餘りにまだ日本に紹介されて居らぬ人ではありますが、ソロゾイオフといふ人であります。此の人の著述を私は非常に愛讀をして共鳴を感じて居るのであります。露西亞の思想家で日本に能く紹介されて居るものはトルストイ、ドストエフスキーなどであります。其のトルストイ、ドストエフスキーとともにソロゾイオフは露西亞が最近生み出したる所の三大思想家であり、而も或具眼者の批評に依れば、三人の中の最も偉大なる思想家としてソロゾイオフを見て居るやうな譯であります。私が讀みました限りに於きましては眞に最も偉大な思想家と思はれるのである。さうして其の思想が人類文明の將來の光となるべき思想の一つであると私は考へるのである。即ち彼は精神生活を高唱し、さうして精神生活と云ふことに於ては、總ての人が本來同一體のものであると云ふことを能く納得出来るやうに説いて居るのであります。さうして先程來だん／＼お話しして參りました恥かしいと云ふ感情だとか、或は氣の毒と思ふ感情だとか、或は尊い、畏多いといふ感情とか云ふことが、人間の道德の自然の根柢であると

云ふやうな事の如きも、此のソロゾイオフの書物を讀んだことから暗示を得たやうな譯であります。さうして此のソロゾイオフが社會主義なるものに對して、極めて手酷い批評を與へて之れを攻撃して居るのであります。社會主義は誤りたる所の資本主義と云ふものを打破つて一層進んだ所の所謂無産階級文明なるものを造るなど云ふことを言ふて居るけれども、決してさう云ふ意味のものにはならぬ。謬りたる有産階級文明を滅ぼして無産階級文明を建設すべしと呼號して居るけれども、其無産階級文明なるものは實は有産階級文明を一層極端なる形に於て現はしたのに外ならない。矢張り同じ自己中心主義、物質的利益一點張りであつて、人格生活から見れば間違つた態度の同じ根柢の上に立つて、一層極端なる形に之れを現はしたものに過ぎないものである。眞の改造でも何でもないと云ふ考を、此のソロゾイオフが主張して居るのであります。ソロゾイオフは既に亡くなつて居ります。若し今日生きて居りましたならば如何に猛烈に彼の過激主義、社會主義等に對して鋭い批評を下して居るかと思ふことを想像することが出来るのであります。恐らくは今日の勞農露國に生命を保つて居ることは出来ずまい。迫害されて殺されて居るかも知れぬのであります。此のソロゾイオフが精神主義の立場に基きまして、社會主義等に攻撃を加へたと云ふことの如きは、大いに現代の趨勢を知るに就て参考になるものと思ふのであります。

す。然るに其の様に精神生活の本質が本来同一體であるに拘らず、吾々がそれを忘れて、他の迷惑になるやうな事を何とも思はずに、自己本位の態度に立つと云ふことが餘りにあり過ぎるのであります。殊に生計を立てる事に直接關係して居る職業と云ふやうなことに於てそれが多いやうであります。儲けると云ふやうなことに聯關して、殊に自己本位となり勝であり、物質的利益一點張となり勝であります。是等のことに就て詳しくお話する時間を持ちませぬから、簡単に精神主義の立場からして職業と云ふことに對してかう云ふ風な解釋をしたら宜からうかと云ふ私の愚見をちよいと述べて見たいのであります。

職業と云ふものに就きましては、普通之れを二種類に分けて居るやうであります、英語で申せば一つは *Profession* と申します。もう一つの方を *Trade* と申します。後にお話しますが、理想的に云へば一切の職業はプロフェッションといふ意味のものになつて來なければならぬものであると思ふ。人格生活としての職業ならば、如何なる職業もプロフェッション *Profession* と云ふ意味のものになつて來なければならぬのであります。それは事實としてなかなかさうはゆかないので、そこで普通にプロフェッションと區別して *Trade* と云ふ職業を算へるのである。然らばこのプロフェッションと云ふのはどう云ふ職業かと云ふと、是れは仕事と云ふことが

主眼であり目的であるのであります。已れの特長に應じて人類社會に貢献する所以の仕事をするが伴ひ來る、即ち露骨にいへば金が入ると云ふことが即ち手段となり或は従となる、主にあらずして従に、目的にあらずして手段となるのである。之れに反して *Trade* といふ意味の職業は儲けると云ふことが主である。金を得ると云ふことが目的であつて、其の目的の爲めにその仕事をすると云ふことが手段であり、それが従である。主にあらずして従となるのである。是れは即ち *Trade* といふ意味である。學校の教師、即ち教育家と云ふが如きは、是れはプロフェッションと云はるべき職業に従事して居るのである。教育すると云ふ仕事其のものが主である。是れは人類社會に貢献すべき誠に神聖なる事業であります。併しながら教育と云ふ仕事を完くすると云ふに就ては、どうしても収入がなくちやならぬのであります。さうでなければ其の教育の仕事を完くすると云ふことが不可能であります。先づ第一に經濟的自由が與へられて居らなければ到底教育の仕事は遺憾なく完ふすると云ふことは出来ませぬ。教壇に立つて生徒に教へやうと云ふ最中、さて明日喰ふお米はどうしたら得られるかと云ふやうなことを考へ出した時に、如何にして眞の教育が行はれますか、それは迎も出來ないお話しであります。又仕事を遺憾なくするに就て

はそれに應ずるだけの研究をも積まなければならぬ。書物をも購求しなければならぬ。或は社會の實際の事情等を知るに就ては或程度まで社交上の人となることが必要である。それが爲めには、それだけの餘裕と、又それに要せられるところの資金も必要である。且又苟くも教育者としての威嚴を保ち品位を完ふすると云ふことに就ても、矢張り相當の収入がなくてはならぬ。それがなければ教育の仕事、眞に其の要求さるゝが如き意味に於て完ふすることが出来ないのだから、當然教育者に對しては國家社會からそれに必要なだけの収入のあるやうにすると云ふことは勿論の事であります。収入は決して目的ではないのであるが、是非なくてはならぬ手段となるものであるから、そこで當然其の収入と云ふものは與へらるべきものとなるのであります。さう云ふ事が即ちプロフェッションと云ふことの特徴であります、さうして其の仕事爲すことに於て、已れの特長がそこに發揮されると云ふことになつて來なければならぬのである。是れは實に教育の仕事ばかりでない、醫者の仕事もさうでなければならぬ。辯護士の仕事もさうでなければならぬ。學者の仕事もさうでなければならぬ。藝術家の仕事もさうでなければならぬ。所が中には金を得ると云ふことの目的の爲めに醫者をする、金を得ると云ふことの目的の爲めに辯護士をすると云ふやうなことになるならば、是れは醫者といふ神聖なる仕事を侮辱する所以であり、

辯護士といふ神聖なる仕事を侮辱する所以である、嘗に今言ふた仕事ばかりではない、呉服店にしても、或は大工にしても、其他の職業にしても、實は皆同じ意味のものであるべきなのである。矢張り人類社會に貢献する所以のものであつて、そこに各特長を發揮すると云ふ其の仕事と云ふものが主であつて、さうして社會國家から其仕事を果すに必要な収入が入るやうなことになつて、今日の色々の制度が出来て居ると云ふことでなくてはならぬ。總ての事がさうでなければならぬのであります、兎角儲けると云ふやうなことに聯關して來ると、本來同一體である、人類社會全體と慶福を共にすると云ふ其の根本條件の上に立つて、それに背かざる限りに、儲けて行くといふやうな態度に立たないで、何でも宜い他の人にどんな迷惑が及ばうと、それは敢て問ふ所でない。自分さへ都合よく儲けさへすれば何處までも儲けて行くといふやうなことになる事は甚だ遺憾な事である。社會主義が反動的に起つて參つたと云ふことになつたのは、西洋邊りで資本主の連中が餘りに一般社會と云ふものを無視して、自分等の經濟的利得のみを本位にするやうな態度に陥り過ぎたが爲めだと云ふても宜いのである。其の甚だしきになりますと云ふと、所謂モノポリーなど、云ふやうな商略を應用するに至るのであります。競争と云ふことをせずには暴利を貪り得るだけ儲けて行くといふやうな一つの商略であります。競争するならばまだ幾

らか結構です、それでも物質的利益一點張りとなり、唯自分だけ儲かりさへすれば宜しいと云ふ態度も不都合でありますけれども、競争のある間はまだ結構なのである。即ち成るべく良い品物を製造して、成るべく安く買ると云ふ事で、已れの方にお客さんを餘計引付けると云ふ競争だから幾らかまだ宜しい。所が今日ではそんな馬鹿げた事はやりませぬ。互に組合を拵へるとか、或は資本を合同して値段は下げずに置く、さうして品物は良いものを造らうとしないのである。餘り澤山品物を造り出すと云ふと値が下がると云ふ虞があるから、お前の方は是れ以上造るな、俺の方も是れ以上造らぬなど云ふて粗末な品物を造つて互に値段は一向下げない。寧ろ之れを高くすると云ふやうな事をして、一般社會の迷惑になることを意としないと云ふことまで西洋邊りの資本主等がやつたのである。これなどは甚だ以て宜しくない。矢張り總ての人と共に慶福を同じく得て行くと云ふことにし、人類は本來一體であると云ふことを根本土臺として、其の上に立つてそれに背かざる限りに於て儲けて行くと云ふやうなことを一つ考へて貰ひたい。今日日本に於きましても物價が下らなくて困る／＼と言ふて居りますが、之れも矢張り人格生活の根本義に照すといふと、不都合だと云ふやうな意味のことが眞に自覺されて來れば幾らでも下げられ得るやうな場合でも、尙ほ之れを下げずに暴利を貪つて居ると云ふやうな所があるのではなからう

かと私は能く其邊のことは分りませぬけれども——想像せられるのである。是れは一つ大いに此の現代の風潮に對しまして、精神生活の根本義から目が覺めなければならぬと云ふことを強、主張せざるを得ないのであります。

兎に角如何なる職業と雖も、苟くも人間の營む職業であるならば、決してツレードと云ふやうな意味に墮落しては相成らぬ、如何なる職業と雖も、プロフェッションといふ意味の事ではなくては嘘であります。然るに普通に世間の者が認めてプロフェッションだと云ふて居る所の高尙なる職業に従事して居る者までが、ツレードの人となると云ふやうな陋劣しい景見を起すやうになるとしたならば、是れは誠に慨歎すべきものと云はなければならぬ。

ところが日本はさて置きまして、歐米等の状態に就て、昨年から今年に懸けて凡そ一年程旅行をして、其の間に見聞する所に依つて見ますと、教育者などは非常に生活上苦しんで居るのである。戦争の爲めに一方には成金と云ふものが出來ましたが、それと丁度相對して新貧と云ふものが出來ました、新貧と云ふのは詰り新しい貧乏人と云ふのであります *new Poor* と云ふのであります、是れが今まで無かつた階級である。新しい貧乏人の階級と云ふものが出來ました。殊に戦争と云ふやうなあの勃發的事件の爲めに斯ういふ變調な状態が世界に湧いて來たのであります

す。其の新貧といふ新らしい階級の中に、學校教師と云ふものが特に著しい位置を占めて居る。甚だ遺憾な譯でありますけれども、是れは兎に角世界的の事實として認められて居るのであります。さうなつて參ると云ふと、どうも背に腹は換へられぬと云ふやうな譯で、「食ふ」と云ふことが大事なことになるから、金を得んが爲めに、収入を得んが爲めに教師をするなど、云ふやうな誠に之れを口にするだにゾツとするやうな陋劣しい景見が湧かないとも限らないのであります。さうなつたならば此の人格生活精神生活と云ふものゝ意義を發揮して、人類文化の將來と云ふものを本當に意味のあるものにして行くと云ふことに就て、極めて重大なる責任の位置にある所の教育者が、神聖なるプロフェュションに従事して居るものでありながら、それを唯収入の爲めに、金を得んが爲めに、教育をするのだと云ふやうなツレドの意味に自分の職業を見るやうな事になるといふことは、實に人類文明の將來に取つて大なる禍と云はなければならぬ。さう云ふ考を起させないやうにすると云ふに就ては、國家も社會ももう少し教育者と云ふものに對して、精神的にも亦物質的にも、豊なる待遇を報いなければならぬと思ふ。是れは私自身教育者であるが故に言ふのではない。又其のことが教育者だけの事に就てのものではない。其他の職業に従事して居る者に對しましても、一般のものゝ慶福を共にするといふ爲めに其の仕事をやると云

ふことに就て、遺憾なく成績を挙げ得るだけの収入が其の仕事に附いて廻ると云ふやうな、さう云ふ公平なる意味に於て、總てのものが報わられて居るかどうかと云ふことを茲に考へる必要がある。それをかんがへるに就ても、決して自己本位と云ふやうな、そんな間違つた態度に立たないで、人類の生活と云ふものは本來一體であると云ふ其の根本義に立つて、此の最も困難な問題を解決しなければならぬと思ふのであります。一方に成金が出来ると云ふやうな亂調子になるのも、是れは矢張り狂つた状態である。さうして其のアベコベに新貧などが出来ると云ふことも、是れも狂つた状態である、さう云ふやうな亂調子が起つたと云ふ時には、矢張りそれに適するやうにテキパキと法制を改良し、社會政策的に是等の問題を解決すると云ふやうなことを實行して貰ひたいのであります。それ等を實行すると云ふことに就きましても、唯徒らに物質主義とか自己中心主義とか云ふやうな、さう云ふ弊害に陥つて居る所の文明などに囚はれないで、どこまでも人格生活精神生活の特徴が何處にあるかと云ふことを能く辨へて、其の基礎の上に立つて之れを改めて貰ひたい。どうしても此の精神生活の根本義と云ふことを明かにすることが、現代の風潮と云ふことに照して、一刻も忘れてはならぬ緊急事と思ふたものでありますから、甚だ粗雑なことを申した譯であります。此の機會に私の平素の持論を述べた次第であります。(終り)

編局輯編會本

判批育教大八

(錢十五圓三價正)

序・論	八大教育主張の歴史的考察
自學教育論	批判 (要點・長短批評)
自動教育論	批判 (要點・長短批評)
自由教育論	批判 (要點・長短批評)
衝動滿足論	批判 (要點・長短批評)
創造教育論	批判 (要點・長短批評)
動的教育論	批判 (要點・長短批評)
全人教育論	批判 (要點・長短批評)
文藝教育論	批判 (要點・長短批評)
結論	八大教育主張の總括的歸趨

明治の初期と現代

文學博士 紀平 正 美述

「明治の初期と現代」と云ふ題に就いて述べて見たいと思ふことは、五ヶ條の御誓詔の精神と、それに據つて動かされた日本人の氣分と、又その結晶としての教育勅語と現代との關係的意味又その精神が今日では如何に徹底しなければならぬかとその様なことに付て申上げる積りでありま

す。學制が頒布せられて以來既に五十年になつた今日に於て、色々考へる時に、我々は實に無量の感慨に打たれなければならぬ。取り敢へずこの間も同僚と色々話をした時に、五十年前に拵へられた總ての教育の制度を、今日に至つても變へることが出來ないで、そのままにして居るやうでは、如何に理想論をやかましく言つた所で、實際上の効果が擧るべきものではないとそのやうなことを話した事があります。先づ差當り最も困難なのは、私共よりも一層頭が白くなつて居る

明治の初期と現代(紀平博士)

過去の所謂功勞者のやも所をどうするかとさへ決つて居ないのであります。教師と云ふ仕事を長いことやつて居りますれば、どんな事をやつてゐたとて、それ相當の經驗を得ますので、所謂能率の上つた教師は出来ませう。そして其の出来た教師なるものを考へて見ますれば、之を一個人として考へて見ると、立派な先生が出来て居りますが、扱、その立派な先生が集つて、一個の教育機關、團體として仕事をする時には古い人は矢張り古いのであります。さう云ふ年の古い人々が、現在方に延びて行かんとする大元氣を持つて居る青年に對した時に、果してどれだけの力を有すと認め得らるゝか。下小學校と言はず、上中學校、大學校に至るまで古い人を相當な所へ片付けてしまはなければ、これから五十年先の進歩を見ることは出来ないと思はれる。是がこの老人をどうするかと云ふ制度さへ、まだ出来て居ないのであります。これは何れか其の内に、何かの方法によつて講じられることと信じます。

現今の傾向として大體見込のついて居る點を先づ申さうと思ひますが、兎に角私の申上げることに付て、一寸、準備的にお聞きを願つて置きたいことがあります。先般或る教育雜誌から哲學と教育との關係と云ふことに付て意見を書いて呉れと言はれて、それに出す積りで簡單なものを書いて居るが、かゝる問題の提出といふ事其事に付て、私は、私の専門として居る哲學の上か

ら、多少不平があるのであります。今時の教育雜誌が、哲學と教育との關係如何などと問ふ事その事が如何にも理解のない事と表白したものであると云ふことを考へたのであります。成程、哲學を從來のやうな意味で、恰も雲を掴むやうな事を云ひ、天上を駆けるやうな議論をなし、神とは何ぞや又責任とは物か心かなどいふ事を頭からひつ掴んで議論するのが哲學であれば、これが教育に關係があるかないかとそのやうな疑問が起るべき筈であります。併し、哲學はそんな意味のものでなく、又從來のものと雖、果してそんなものであつたかどうかは疑問であるが、それは別問題として置いて、今日では我々が人間として働いて行くに、如何に純粹なる働きがなし得られるか、この純粹なるものを求めようとするのが哲學の本來の意味であります。其の純粹なるものを求めると云ふ上に哲學の要求があると云ふことを先づ了解して貰つたならば、教育するといふ一つの仕事は、最もその純粹なるものを得ると云ふことより他にないのであるから、哲學的に考へること、或は近頃の言葉で言へば哲學することが即ち教育することではなければならぬ。昔の誰々の哲學組織が、現在自分が此の兒童を教育することにどう云ふ關係があるかと云ふことであれば、疑問が起るのも當然ですが、斯の如く生活して、その生活を如何に純粹ならしめて行くかと云ふことが哲學であるならば、教育すると云ふことは、最も純粹性を得んとする努力でなければ

ばならぬことは當然考へられます。從來、哲學的なことを一切教育と云ふことより離して考へたのは、又離し得られるものと考へたのは——これを實際私は耳にしたのでありますが、或る立派な高等教育に従事してゐられる教育者にして、自分の學校には哲學などは要らないと云ふやうなことを明言された人もあつたのであります——然らば何の爲にさう云ふことが言ひ得られたか、これが私の五十年を回顧して見た時に、直ちに起つて來た問題であります。そこで明治の初期と云ふことを題に取つたわけであります。

明治の初年から今日に至るまで、日本人が日本人を教育するに其の方法を如何にしたか、又さう云ふ特獨の教育方法があつたであらうかを問題にして見たい。一體、教育の仕事は社會から學校へ出て來るものであつて、學校から社會へ出て來るものではない。社會生活に於ける兒童のなせる經驗を教師が整理してやる、即ち組織立ててやる事の方法を教へるのが學校に於ける教師の仕事の最大眼目である。教師が兒童に只知識を教へると云ふやうな態度に立つたならば、これは全く間違ひである。それは恰も軍隊に於て軍人が國民に軍隊教育を施すことに由つて、國民の忠義心が養成せらるゝものと考へるのと同じ事になるのであります。國民に存する忠義心を軍隊に

欠

欠

りますが、人の奪ふことの出来ないものは自己の経験であります。而て人の本性として其経験を其儘にして捨て置くものではない、何等かの方法でそれを組織するものであります。それで其組織の仕方といふ事が大切なる要件となるのであります。今組織といふ事を論理的に考へると先づ第一が單純にするといふ事である。難駁な経験を單純にする、單純にするを轉回せられる、そこで其知識は普通の知識とは一見異つて来る。何にもそれ自ら考へて見れば違つて居るのでも何でも無いが普通の知識と變つて来る、そうなたた場合にそこに命令力が出来て来る。その命令力に只管従ふのが純粹性であります。カントの批評哲學以後先天或は純粹といふ事が認識論即ち哲學上のやかましい問題になつて居ります。純粹維持、純粹経験、純粹感情、純粹意志といふやうに、皆哲學上の關係の問題であります。然し其純粹性とは経験の同一的組織に過ぎない、経験を組織するが故に、普通の経験から言へば、轉回せられて居るが故に異つたもののやうになつて居る。従つて例の哲學はむづかしいものといふことになり、哲學者は、變てこなことを言ふものなりといふやうな誤解を受けるのであります。然し自分がそこに這入つて見れば間違つたことは言ふてゐるのではない、皆當然のことを云ふて居るのである。これより他にないと云ふ個別的事實を示すのである。よく組織せられ、轉回せられて居る所に自分の力が湧き出し、其處から純粹なものが

動き出すのである。此の働きに眞の自由性があるのである。個性と云ふ意味もそこにある。即ち自分の有つて居るところのものを、自分で楽しみ、其樂を以て事に従ふ此れが人間が受くべき最高の福祿満足であります。哲學的に考へる事は、斯くて人の仕事を最も満足にやる方法を考へる事のである。この満足なくして、指導の任に當つても特に教育といふ仕事にありては果してどれだけの効力を認められるか。それで若し兒童の爲めを思ふて、いくら計畫をして、教案を立派に作つても、さて、教場でその教案通りにやれるかやれないか。それが果して眞に兒童の爲に効果を及ぼすであらうか。若しそれ此純粹性を外にして考へるとするならば、如何に名案を以て仕事としても、御氣の毒でありますが、ウキルヘルムズルトンが立てました、目的結果不一致の法則に縛られるのであります。私の知つて居る人で、私には何にも六ヶ敷しい事は分らぬが、子供の爲には十分盡して来た、それ／＼の子供の教育資金も拵へてやつたし、女の子供には嫁入の費用も作つてやつた、これで親としての仕事を盡したと申してゐる人があるが、かく自分では子供の爲め、子供の爲めと思ひつつ、而かもその子供を最も力の弱いものに拵へ上げて居る、即ち子供の不爲をしてゐて、目的結果不一致の法則を説明してゐるよい例を作つてゐるのがあります。従つて教師としていくら考へても、それが兒童の爲になつて居るか、なつて居ないか分つたもので

はない同様に國家の爲めと言つても、それが國家の爲めになるかならぬか分つたものではない。所謂古い人の内に眞に國家を憂ふる人があるが、その國家を憂ふるが爲に國家の邪魔になつて居る人がある。今日のやうに、若い者が元氣潑潑として出て来た時代に、古いことを言つてゐては、其精神には純なるものがあるに關せず却て、反抗氣分を養成する様な結果になるのであります。此鐵則を免れる唯一の方法は『無門關』といふ禪宗の書物の第二則に出て居る不昧因果——因果をくらまさないといふ方法を取るより他に仕方がないのであります。此の意味を西洋の方の語で云へば、自然は服従することに依つて、征服せられると云ふ、フランス、ペーコンの言葉によつてよく現はされてゐるのであります。一個の主觀的な意味によらずに、自然に従ふ、即ち純粹性を以て活動するところに、初めて、總てのものを組織統一して我がものとなし我用に供することが出来るといふのであります。教師は又それによつて兒童を引付けることが出来る。私は長い間教員をして居るからよく感じるが、例へば論理學を担任して居て、此の事項は論理學上に重要なことである、これは是非試験に一題出すから是非覚えて置けと云つて、口の酔くなる程言つても、其答案を見ると失望する、三分の一だけは眞面目になつて覚えて来るが、残る三分の一は有耶無耶で、残り三分の一は一向にやつて居らぬ。併し、こちらが眞の意味で、教室に於て眞

面目になつた時には、先方の顔色が違つて居る。偶然言ふたことでも、先生に斯う云ふことを言はれたが、これを唯一の守本尊として教育に従事して居りますと言つて、後日年賀状などに書いて来るものが澤山あります。眞に眞面目になつた時に、多少の間違があつても、それは先方がちやんと正して置いてくれるものであります。——間違ひのないと云ふのが實際間違つて居る。序に一言して置きます、一體間違ひといふ事はどう云ふことであるのか、絶対的の間違ひはどこにあるか、絶対的の眞理が分らぬ如く、絶対的の間違ひといふ事も亦分らぬ。宗教的に云ふならば、絶対他方宗の親鸞は、萬行の諸善の假門——即ちいくら勉強し善を行つても、それが果して神或は佛の前に善であるかどうか分つたものではないから、それを捨て、善本徳本の眞門に這入つて、即ち、南無阿彌陀佛の一行に這入り、南無彌陀陀と言つて居れば、それで極樂往生が出来ると言ふ佛の願によることにした。所が猶ほこれでも往けない事に氣がついた、何故ならば南無阿彌陀佛と言つて居るうちはよいが、之がなければやはり因果に捕えられて駄目であるからであります。故に更に轉じて、煩惱具足の身を信じて、只信すといふ一念によつたのが親鸞の宗教的精神であります。此を我等の論理的の語で言へば純粹なるものを捉へて行く、其處に因果の法則を脱するのであります。人若し純粹であれば、よし間違つたことがあつてもそれは先方で正して

呉れる。即ち間違ひ誤りは却て正しきもの、條件と轉するのであります。教育といふ仕事には此の覺悟がなくてはならぬ。前述べた通りに、總てが自分のものとなり得た時に、出て来た命令方に其のまゝ従つて行くといふ事でありませう。さう考へて見れば、哲學的に考へるとそのことが、教育することである。一步廣く考へて見れば、教育することそのことが哲學することである。孔子の書いて置いたと稱せらるゝ『大學』でも、其精神は即治國平天下の道である。而て其は明明徳、止於至善、親民の三綱領であり、此を盡すものは格物致知即ち哲學であり、終局するところ修身より外に出ないのであります。

一體、自然に服従することに依つて征服せられると云ふことの精神はどこにあるか、これは近世の初に於て深刻な自己意識に伴うて來たので、デカルトが *Coyi to engo sumi* (我考ふ故に我在り) と云ふた其精神に存在するのであります。此はラテン語で *Cogito et sum* と云ふ言葉は、日本流に我考ふとか、英語の譯してアイ、シンクとか、或はドイツ流にイツヒ、デンケとかイツヒ、アイ、我、と云ふ字が這入つて居らない語であります。考へると其の言葉の語尾の變化の上に、我と云ふ意味が含まれて居るのであります。考へる働きに我がとけ込んで居るといふ處に眞の純粹性が

あるのであります。而て其考へる働きそれ自らが存在と云ふことで、此もスムといふ一語の内に我のとけ込んで居る語であります。即ち此の方が純粹性を現はし、ベーコンの方は其によつて運用せらるべき自己の経験を大切にすべき方面を現はしたのである。片方は合理的の言ひ方で、片方は経験論的の言ひ方で、その精神は同じである。それでその上に活動して來たのが、西洋に於ける近世の啓蒙運動であるが、其の場合の純粹性とは果して如何なるものであつたかといふに、數學的の思考であつたのであります。此事は歴史的に論究せなくてはならぬ問題であるが、六ヶ敷い事はやめて、數學的の働きの、自己意識の發達とは相伴ふものであります。これを實際教育上に如何に應用すべきかと云ふことも、興味ある問題であります。これを置きます。ともかくその當時發達しました數學を基礎にして、純粹なるものを働かせて往つたのが、啓蒙運動の精神であり、又實際數學を應用することに依つて、一方に於ては自然科學と云ふものが發達して來て、其の又運用が現今の自然征服の仕事となつたのであります。そこで先刻申す通り、科學的の意味で考へて見ると、他人の研究した結果を受賣りして行けばよいやうであります。ここに考へて貰はなければならぬことは、科學を組織する働きは依然として純粹性に基つかねばならぬといふ事である。受賣の出來るのは結果だけであるが、然もそれは運用の出來な

い、否實際運用の誤られ易い所のものである。例へば物理學ならば、物理學者それ自らが物理研究を生命とすると云ふことでなければ物理學の組織は出來ない。自分の命となると云ふところまで行つた時に、それが他所事ではなく、己のものとなつて、純粹なる命令力が出て來るのである。

斯く數と云ふものを土臺にして近世の發達と云ふものは、さう云ふ純粹性から來て居るが、併しそれは數其のもの、性質上から明かであるが如くに主として抽象的のことであつて、從てそこに出て來た究極のものは機械論、機械主義である。それで機械主義には歴史が入りませぬから、古い傳統を出て、新しい自由の氣分に依つてどしどしやつて行かうとしたが近世に於ける運動の一番中心でありました。處が此と丁度精神を同じくしたのが自分の國を何んでも西洋と同位にせようといふ考へ、而て此の場合に於て居た純粹性に就ては、更に他の論及を必要としますから御預りとして置いて、ともかく其意志によつて西洋の啓蒙時代の精神が其まゝ受け入れられた、其故にこの啓蒙思想と云ふものを最もよく文献の上に現しましたのが、先帝陛下が下された五ヶ條の御誓文であります。あの中に「大に皇基を振起すべし」と云ふ一つの事項が這入つて居りますが、これを除けてしまふと、これほどよく啓蒙思想の精神を表はした文献を私はまだ見ない

のであります。一寸と横道へ這入る様であるが、此一項に就て先づ辨じて置かねばなりません。然しこのことは随分長くなりますから精しくは申して居ることは出来ませぬ。一體君主が、極く粗朴な時代に於てはこの國でも一寸そう思はれるやうに専政的の君主では決してありませぬ。ところが、西洋に於てはこれがローマになりますと、異種の民族を統一するが爲には法律を以てしばらねばらぬといふ事になり、同時に共和國が帝政にならねばならぬ様になつたと云ふのは、非常に深い意味のものであります。所が帝政になり法律を運用するには皇帝の大なる威力を要することになります。其一例として興味のあるのは、ユスチニアヌス帝の欽定ローマ法學提要の始に載せられてある勅語であります。この材料を持つて來ればよろしい、如何にも恐ろしい威力が示されてあります。此れを先帝陛下が軍國の場合に下し給つたものは別として、其他の場合、特に教育勅語に於きましては、「朕惟ふに」と甚だやさしく出て來て居る。私はそこに教育勅語の純粹性を認めたいと思ふのでありますが、それは後の問題として置きます。ともかく法律で以て國を治めると云ふ様になつて、君主を無理にでも神聖にしなければならぬのであります。それから後に宗教的の意義が加はつて、丁度支那で天子とは天命を受けたものといふ考が起つたと同様に、神からの命令と云ふやうな形式にせられ、神には責任があるが、下臣民に對しては絶對

の權利を持ち得ると云ふやうなことになつて、ここに君主神權説が出て來たのであります。君主が君主として正當な責任を盡すならば神權説もよいが、君主が若し主我的に活動し、それを神權説で辯護する様になれば、其處に君主專制が出て來て、人民は大迷惑をせなければなりません。丁度フランスのルイ十四世が「朕即國家」といひ、我儘を行つたのが其極限でありました。即ち専政君主に向つて、純粹に出て來たところの自我が發動をして、所謂民約説が出て來た。國家と云ふものはお互の契約である、と云ふ説であります。これは君主神權説を打破する爲に起つたもので、それがフランスの大革命を起し、遂に君主を斷頭臺上に消えしめたのであります。此が君主神權説の最後の止めでありました。所が日本の明治初年に出で來たものは、所謂維新といふ語にて表明せられて居るやうに、純粹な日本人といふ事であつた、それ故に大に皇基を振起すべしと云ふことが最後の最も大切な眼目となつたのであります。此一項を除けば五ヶ條の御誓文ほど啓蒙思想の本質を最もよく現したものはない。萬機公論に決すべしなど、どうしてこんなよい言葉が出て來たかに驚かしめられる。人心をして倦まざらしめんことを要すなどは、最も適切なる語であります。此等は皆純粹性の表はれであります。

處が約五十年後の今日は大に時勢が相違して來たので、最早五ヶ條の御誓文そのままではなりません。西洋に於ては約百年前に啓蒙思想の精神は既に轉回せられて居るのであります。例へば廣く智識を世界にもとめ、などは、それが前申した一刻も早く西洋の様にならうとした爲に、實際に今日の摸倣的精神の養成になつたのであります。今日の吾人の覺悟は純粹なるものによりて大に智識を發展せしめて廣く之を世界に廣めて行くといふ覺悟でなくてはならぬ。今時、外國の知識ばかりを只受賣りしてゐて奴隸的魂性に止まつてゐてはならぬ。それはともかく、御誓詔の上にはあらはれた純粹性が實に其後種々起つた危険なところを、いろいろ潜り抜け得て幸ひ今日を致したわけなのであり、而てその最後のものとして教育勅語が出て來たのであります。而て此が憲法發布に依りて國家の基礎を固め、教育勅語に於ては我々の精神上のことを定めて、動きなき國是が定められたのであります。我等は之を考へるとき實に感激の涙にくれる次第であります。

ところがこの教育勅語の頒布以後の精神は、大變不純粹になつた。この不純粹になつた理由は即ち摸倣といふ事で、何もかも事情の彼此相違するに關せず、彼のものを取つて來た事でありませぬ。其事を説明する爲めにもう一つ西洋の啓蒙思想に立戻り、其の運用の事に就て考へなくては

なりません、而てそれには先づ中世の末から起つて來た、約二百年或は二百五十年ほど續きましたところのルネッサンス文藝復興といふ一時期に就てよく考へて行かねばならぬ。この時代に種々の事情があつて個人の方が段々目覺めて來た日本人の目覺めと西洋のものとを比較して見るとも面白い事であるか、それも御預りとして置いて、共に封建制度を壊し武士道に代へるに町人道即ちブルジョアが力を得て來たのである。然らば町人道とは何か。町人其の集つて居る社會道徳と云ふのであります。前述の通り純粹なコギトが其基調ではありましたが我國に於て廣く知識を世界に求めが運用上摸倣になつたと同様に、個人が出發點でありますから、其社會組織としては、個人權利の主張、自己責任、即ち自分の故意にしたことだけに責任を負ふ事、所有權の確認、契約の自由、と云ふことが、社會結合の原理とせられました。之れが所謂個人主義であります。ローマ法が精神が復活して法治國といふ事が出來上りました。而て此原理は實際ナポレオンといふ力によりて——ユスチニアース帝の武威によつてと等しく——彼のナポレオン法典の精神となつたものであります。而て此法の精神が實際の社會生活に於てはどう云ふ工合に運用せられたか。それは彼の經濟と云ふ原理であります。經濟の原理其のものは近世が古代と區別せらるゝ大事な要件であつて、決して其自身に惡ひ性質のものではないが、それが富強に金の蓄積と

いふことに限られる様になつて、西洋に於ても今日の様な各種の社會問題が起つて來たのであります。特に此事に就て日本の教育者に警告したいことがあります。一體イギリス流に考へた經濟論を又其まゝ間似て之を教育上にも直ちに應用せんとすることではありません。今日の教育者か文部省の役人から民間の議論者に至るまで殆んど總て間違つて居る。物質的な即ち數學を基礎としての科學的に見た經濟の原理から言ふと、成るべく努力を少くしてより大なる効果を生せしめたいといふ事で、こちらに十の力が出るものを、こちらの力をやめて、そのまま之を他に更に有効なる方面へ使ふことが出來ると考へる事があります。これは機械的に云へば尤もであります。併しこれは自然科學的の經濟原理で、それをそのまま我等の精神界へは持つて來られない。ところが近頃の教育の上の議論としては、兒童の負擔が餘り重も過ぎる、だからそれだけ止めてしまつて他にもつと有効な所へ用ゐさせようと云ふ、例へば漢文廢止或は制限論がそれでありました。處が精神方面の經濟の原理はキリストが信仰に就て云ふた所の有たぬ者は奪はれ、有てるものには與へられむと云ふことであります。精神能力は人によつて適不適もあります。直ちに此方の力を止めたから、其を他の方へ用ゐさせるといふ事は出來ない。つまり又純粹性の問題であつて自分の有つて居るところのものが少しでも純粹になるならば、愈々其れに力を與へる、人のものを摸倣

して居るとそんな知識は有てる積りであつても奪はれてしまふ。何となれば自分も機械的になり、生徒も機械的になつてしまふから、つまり死んでしまふのである。芭蕉和尚が同様の事を云ふて居る。汝に杖あれば我汝に杖を與へん、「汝に杖なければ我汝の杖を奪はん」と、無門といふ和尚が此を評唱してこの一本の杖さへあれば、橋のない水も渡られる。眞暗の月のないところでも歸つて來られると。——扶過斷橋水、伴歸無月村。若喚作拄杖、入地獄如箭——只の杖だと思ふたら早速地獄行きだといふのであります。此れが精神上の純粹性の働きの即ち經濟の原理であります。所が實際それを只の杖と思ひ、物質的に解したが爲に地獄に陥つたのが、今日の西洋諸國の實狀ではありますまいか。而て我國人は猶ほそれをも摸倣せんとして居る、即ち今の新しがりやの議論は我は之を修羅畜生道を説くものだとして批評するのであります。

實際かく運用を誤り、單に經濟と云ふ原理か物質的にのみ考へられ法律とそのものがこれを保障して來たのが、今日までの西洋の社會の成立ちであります。この意味から西洋の個人主義的の考へから社會と國家との區別がはつきり來ないのであります。さう云ふやうに、近世に於ける西洋の社會の組織は始めから我が日本國とは根本的に違つて居るのであるが、それに氣附かず、我

等は只真似をしたのであります。即ち、一は法治の精神をそのまま模倣して、西洋各國の法律をそのまま翻譯して見た。然し流石其儘ではいけなかつたものであるから、他方變容し家族制といふ様な事を加味して、今日の民法、商法などは決つたのであります。教育制度に於ても、又同様に西洋の眞似をして、只足らざるをのみ心配して居る。やれ西洋はどうであるなど云ふ事を唯一の理想論として居るのが猶今日の状態ではありますまいか。私の小學校の先生が、——、今日丁度斯る機會にてここに私の古い先生の事を申上げるのは光榮と思ふのであります——島川毅三郎と云ふ先生がりましたが、この先生は私等を卒業させるなり教職を捨て、計畫を立てられて一年志願をせられ其がすむなり支那に飛込んで行かれた、日清戦争の時はロシアに逃げ込み、戦争後ロシアへ遊學せられ、後勝伯に知られ、日露戦争の時には支那にあつて大いに働かれて、常に國家の經綸を以て任せられた人であります。後吉林の領事にまでなつたが、不幸肺を病むで死亡になつたのであります。この先生に注入せられた私共の精神は今日でも尙大なる恩惠と思つて居ります。私は今日と雖も聞かぬ氣を有つて居るが、生れつきもありませうが、亦大にその先生から受けた感化であります。猶ほ今日私は哲學上の歴史の論にも多少特有の考を有つて居るがこれも其基つく所は小學校時代に此先生の御教へ下さつたことが本となつたのであります。先生

の教育法は今日の眼から見れば或は無茶であつたかも知れませぬが、生きた教育であつたと信じます。而て私を政治家にする積りでありました、即ち私も小さな頃から國家の經綸を以て自ら任じて居たが、それは啓蒙思想の精神そのままを受けたのであります。さうして政治家になるつもりで小學校時代は経過しました。處が法律政治といふ様な事も最も嫌になつたといふのは、實際こう云ふ事情からであります。當時は法學を志望して、東京あたりで、それは私立の學校位の卒業生であるが、そう云ふ所謂法律屋が其當時どう云ふことをやるかと云ふと、私の國では狸代言と名附けて居るが、法律を楯に取つて弱いものをいぢめるといふ様な仕事ばかりやつて居る。それで私つくづく考へた、第一に亦辯設士といふ職務がいやになつた。例へば或罪人を明かに有罪であるものをも辯護士は無罪を主張するし、検事が十年と云ふのに、一年減じて九年にするのならばまだ分つて居るが、それをも無罪と云ふ。死刑と無罪と大變な相違である、即ち餘り勝手な詭辯を弄するもので、甚だ不都合である。一般に法律法律といふて何もかも法律づくめて押して行き、其が爲に善良な人を悪くすると云ふのが法律であると云ふ様に考へたから、それで遂に其方の事をやめて哲學をやるやうにしたのであります。而て其の志を確めたのは中學校の三年頃の時でありました。即ち世道人心の根本的のことをやるならば哲學をやらなければならぬと思つた

のであります。その時考へましたことは、今日と雖も少しも變せずなほ問題としつつ進んで居るのであります。然しよく考へて見ると法律其ものが決して悪いのではないが、此も外國のものを其まゝ受取つたので、實際生治と法律とが離れてしまつたから悪化したのであります。故に法律を學ぶのは、たゞ利巧に世を渡る道具手段に外ならない事になつた、從て從來の法科大學でも、官吏養成、裁判官の養成、辯護士の養成、ひどいのは會社員の養成、而して其の會社員は法律の網を如何にして潜らんかの爲の顧問に雇はれるといふ始末であつた。上大學がこんな様子になつたのは文學部が中等教員の養成所になつたのと同様に、又勢の然らしむる處ではあつた、即ち相當な人物を手取早く製造せなければならなかつたからであります。其が爲に大學といふ精神は全く没却せられてしまつたのであります。今日と雖、法學部には英法、獨法、佛法といふ區別が立てられてゐて、一向獨立の日本法といふ様なものはありませんのは、古い頭の殘物であります。其他實際立憲政治の運用に就て如何に人心を惡化して居るかは最早申すまでもない事であります。海賊を事として居たものが永い間かゝつてこしらへたものが、所謂政黨政治の御手本とせられて居るのであるが、其政黨政治の今日の狀態に就ては、我等は寧ろ口にするを穢はしとせざるを得ないのであります。前に申した通り個人主義的な時代に個人の集合を確かにする爲め法律

が必要になつた、丁度機械觀と同様に一般的抽象的な規約が法律である、故に個々の行爲は一先づ法的行爲に翻譯しなければならぬといふので、法律が學問的に専門になり、又實際には辯護士といふ様な職務も必要になつて來たのであります。處が其法律が實際生活と離れた模倣的のものであるから、其辯護士の職が不都合な仕事と見らるゝ様になつたのであります。獨り辯護士のみならず、御役所向といふ變んなものも出て來たので此等の弊害は擧げて數ふべからず、而て此れがどれだけ教育の方にも自由なる働を阻害したか。

ところが時勢は一變しかけて大に人意を強くしてよい時代が來りそうであります。これは本當はまたえらい大きな運動にはなつて居りませぬが、現在に於て、始めて法律の上に多少の目覺めがなされて來たやうであります。コペルニラスが、從來の天動説を變じて地動説にした事は諸君の御承知の通りであるが、大哲カントが出て來て更に内外を轉倒せしめた、即ち時間空間は實在するものにあらずして、認識する形式だと論證したのを自らコペルニクスのごとく名づけた、此は共に二大轉回であります、即ちカントは此の思考によりて、從來の抽象的な知識を捨てることにより啓蒙思想に大轉回を與へ、それによつて個々人格の尊嚴を論證したのであります。法律

界の新人牧野博士は、このカントのコペルニクスの轉回以上のことを法律上で只今日本でやつたと評して居られるのでありますが、如何にも法律の上では今までは、西洋の眞似をして居つたけれども、ここに至つて西洋の眞似ではありません。特別のことを、而てそれを徹底せしむれば從來の法の精神を轉回する様な事を日本が出したと云ふ面白い事があるのであります。この事は丁酉倫理に牧野博士の講演として出して居りますから、詳しく事は其方に譲ります、是非御一讀を願ひたい。而て其事件といふのは大正二年の一月十八日、大審院が下したところの夫婦契約も亦有効なりと云ふ判決であります。一體牧野君は古い法律家からは蛇蝎の如く嫌はれて居る人である。何故なれば牧野君や——穂積君はもう少し穩當でありますから餘り嫌はれて居らないやうであります。牧野君のやうにすると所謂從來の法律が根本に於て破れて来るやうに見えるからであります。其故に法律と云ふものを命とし昔ながらの法律を考へて居る法律家からは蛇蝎視せられるのは當然であります。處が牧野君等を嫌ふ様な人々が寄集つた大審院の判決に、從來の法律を破るやうな夫婦契約も亦有効なりと云ふ宣告をしたと云ふとは、時代の動くところを考へる時に、實に面白くてたまらぬのであります。牧野君でも、穂積君でも、此を法律の社會化或は道德化と云ふ事を唱へて居らるゝが、我等哲學上から見ればもう一步深く深く考へなくてはならぬ點が

あります。例へば法律の社會化と云ふ如きは當前の話である。社會的ならざる法律がどこにありますか。一時社會的教育といふ事も云はれたから、同様に社會的教育でない教育がどこにあるか。然し斯かる自明な言を云はねばならぬのは、法律が實生活と離れて居ることを示したもので實生活に基礎のない法律を否定する爲に必要な語なのであります。然し更に一步を進めて考へるときには、如何なる社會に基かすか、只實際に基かすかといふ丈では法律の原理が無くなるわけでありませぬ。近世の初期に出て來た啓蒙思想に於ける社會組織に對しては、從來の法律がよかつたのであります。さうでなくちやならなかつたと云ふことを考へねばならぬ。羅馬時代の羅馬法がどうして生きて居るかと云ふと、羅馬の社會を考へねばならぬ。我々の只今の社會を考へ、其社會構成の原理の上に法律を基かせなくてはならぬ。然らざれば法律は世に追従するだけのものとなり、無力になります、即ち其處に哲學的な思考を缺いては何にもならない。又模倣になつてしまふ。今日、ブルジョア、プロレタリアとやかましく言つて居るが、從來の科學的考へによつてゐる限り、ブルジョアが專斷であつたから其を打破してプロレタリアを以てした所で、只甲に乙を代へるだけで結局は同じ事になる。故に更に一層高い處へ立つて其等を綜合せなくてはならぬ。法律の上でも、之を哲學的に考へ、如何なる社會にといふことを批判するだけの力がな

くはなりません。此の根本原理を考へずにはやれば、或は危険かも知れないけれども、十分考へてやれば危険所が大なる發達が望まれるわけでありませぬ。

夫婦契約(實は内縁の妻)も法律上有効なりとした事が本となつて、多くの新判決が下される様になりましたが、其の内には實に面白いものもあります。而て斯る判決がなし得らるゝのは我が憲法の精神に於て始めて可能なりといふ事を考へる時に我等は更に御國體に就て有かたく感せしめられるのであるが、其議論は省きます。ともかく斯る新判例を徹底せしめると、其結果は辯護士の職務が不必要になります。現に借地借家法には協調委員といふものが出来ました。次には裁判官が皆大岡越前守の様にならなければならぬ事になります。それから最も大切な事は一々の個別的事件が直接対象となりて、其を法的行爲なるものに翻譯せなくてもよくなること、同時に個別的なるが故に絶対に他人の模倣を許さず、例へば某は某事件に於て勝つたから、自分も一つ間似をして勝つてやらうとした所で駄目になるといふ事があります。即ち一回限りといふ事になるので、此が特に哲學的に考へて愉快な點なのであります。

前説に申上げた如くに、自然科学の機械觀では繰返して豫想して居る。法律の出来た精神も亦繰

返してはならぬといふのを制限する爲に出来て居るのであります。所がカント以來人格の尊嚴を認め來りし精神から云ひ、特に今日哲學上問題となつて居る價值の上から云へば人格の行爲には繰返しはない歴史の事件でも一回限りであります。それが先づ大審院の新判決に出て來たのであります。教育學も科學的に取扱はれるなら従て上述の如く個性の研究と言つても特殊性くらゐしか出來ないことになつてしまふ。然し教育の仕方は、實際個々の問題であつて、それぞれの有つて居るところの經驗を組織してやると云ふことになつて來る。繰返を許さぬ、即ち他人の模倣を許さぬ、人の受賣りを許さぬ。己自らの力でなければならぬ。總てに絶対性を有たせると云ふことではなければならぬ。價值創造の働きは一回限りでなければならぬ。繰返されたる善は最早善に非ず、昨日斯うしたらよかつたので、今日も亦同じ事をしたとて其は善ではない、只機械のみ同一の仕事をし得るのみである。絶えず自分の力で、自分のものを發現せしめて行つてこそ、善と云ふものがそこに出て來る。眞の自由と云ふものは、一回限りと考へて貰はなければならぬ。斯くて法律の問題も一回限りのものである、而て其一回限りの事件は皆價值創造でなくてはならぬ。而て其は哲學的に考へて意味して居ります。

此の意味に於て從來の師範教育が亦根本的に間違ふてゐる。教員になるのだからとて、生徒を

養成することが、現に個性の自由を束縛して人を機械扱ひにしたものである。何故に入たる様に教育せぬのか、立派な人が教員になる、これ程結構な事はないではないか、上大學に學んだ人が教員官吏となつたとてそれが悪いといふのではない、官吏教員になるのを目的にするから悪い、即ち目的結果不一の法則に縛られては本當の教員、本當の官吏が出来ないのであります。

以上私は哲學的に考へることが現今最大の急務であることを申しました。然し此は遍則な制度である師範學校の教科目の内にまで哲學概論や哲學史を入れようと云ふのではありません。それは自ら別問題であります。又今の處私は寧ろ不賛成であります。私の今申す哲學的に考へるといふことは、即ち自己の經驗を尊重せよ、摸倣の惡弊を捨て、自分で絶えず一步深く考へよといふ、それは哲學書を讀むことは勿論大切であるが、又それを模倣してはならぬ。即ちそう云ふ習慣を養へといふ事に歸着します。此點は價値の創造が出来る、即ち創造教育も出来れば又自由教育も實現するのであります。

甚だ永くなつて教育勅語に顯はれて居る純粹性に就て細話することが出来なかつた事を遺憾と致しますが先づ是で御免を蒙ります。

明治大正時代の教育の功過

文學博士 吉田 熊次述

私は、學制頒布後五十年間に於ける我が國の教育の功績と尙不十分であつた點とを考へて見たいと思ひます。此問題を取扱すに付しまして、大體二つの方面に分けて見やうと思ひます。一つは學校の制度組織の方面に於ける功過如何と云ふ事、もう一つは教育内容の方面に於ける功過如何と云ふ事でございます。先づ此制度の方面に付て申し上げます。我が國の明治大正の世に於ける教育の制度は、見やうに依つては世界無比の良い制度であります。どう云ふ點に於て良い制度であるかと云ふ事を考へます前に、我が國の教育制度がどうして出来上つたかと云ふ事を考へて見る必要があると思ひます。

我が國の教育制度は、言ふ迄もなく學制頒布に依つて定まりました。而して此學制と云ふもの

は、大體に於て佛蘭西の教育制度を採用したものであると言つて宜しいと思ひます。尤も佛蘭西の何時の時代に出來た制度を参考としたかと云ふことに付きましてはハッキリしたことが分りませぬのですが、文部省に於て調査を致し、學制頒布以後に於て出版をして居ります處の佛國學制と云ふものに依つて考へて見ますと、可なり古い時代のものである。と申しますのは、學制頒布の當時より余程前に遡つての制度が参考されたものと思ひます。佛國學制と云ふは、本郷の東京女子高等師範學校の圖書館にも一部あります。是は十九世紀の始めより中頃までの佛蘭西の教育制度の法規を編纂したものであります。蓋し學制頒布の當時に於て、歐米の教育制度を調べた際に、其當時の佛蘭西の教育法規集とも謂ふべきものを翻譯したものであらうかと思はれるものであります。此學制の第一の長所とも謂ふべきものは、全國を統一的に、劃一的に、角から角まで亘つて行届いた教育制度を布いたと云ふことが一の長所であると言はなければなりません。歐米諸國の教育制度には、それぞれ國に依つて趣きを異にして居りますが、佛蘭西の如く、全國を統一的の制度に依つて教育を施すと云ふことは他には類がありません。御承知の如く、英吉利などになりますと、最近に至るまで殆ど國全體の教育制度の統一と云ふものがなかつた。最近の政變に依りまして文部大臣を辭職致しました處のフイッシャ氏が、歐米の大戦亂中に、即ち

千九百十七年に原案を出しまして、たしか千九百十八年に通過したと思ひます所の、所謂フイッシャ案なるものに依つて、初めて英國全體の統一的教育制度を布きました。是は英國の教育史に於て破天荒の出來事であつたのであります。世界の教育國であると言はれて居る獨逸の如きも、獨逸帝國が出來上りました後と雖も、教育制度に關しましては、其内部にある處の二十二箇國の獨立した州には、各々教育規定に關する特種の權を持つて居つたのであります。即ち獨逸全體としての統一したる制度がなかつた。北米合衆國に至りましては、華盛頓にあります處の合衆國の中央政府には、今日に於ても文部省が設けられてないと云ふ狀況であります。内務省の一局として教育局と云ふものがありますけれども、獨立した文部省は置かれてありません。勿論二三年前から、タウナー、スミス法案として、米國合衆國に、教育省即ち文部省を置かねばならぬと云ふ案は出て居りますが、未だに通過致しませぬ。通過せられざる所以のものは何處にあるかと申しますれば合衆國の國の成立ちと致しまして中央集權と云ふ事を喜ばないのであります。即ち各洲に於て、それ／＼特種の教育規定を持つて居るのでありますのみならず、其州の教育規定と云ふものも、州全體に亘つて巨細に教育のやり方を規定するに非ずして、其大綱に止つて居る。我が國の小學校規定に付て申しますれば、小學校令と云ふべきものが各州の中央部から出て

居りますけれども、小學校令の施行規則に關するやうなものは、其下の自治團體、即ち郡であるとか、或は大きな都會であるとか云ふものが細かなる規定を定める事になつて居る。さう云ふ譯合でありますからして、全國を統一的に規定すると云ふ教育の規則は、世界に於ては殆ど佛蘭西の外に見る可きものはない。我が國は、丁度其佛蘭西の制度を採用したものであります。是は明治初年に於ける日本の計畫と云ふものは、教育に依つて國の建て直しをやらうと云ふ爲政治家の大抱負に出たものであらうと考へます。此點に於て、明治五年の學制と云ふものは、世界に類の少い教育上の法規であると言つて宜しいと思ひます。吾々は、今日の所謂デモクラシイの世の中に至りまして、今更の如くに教育の力に依つて民心を向上せしむるに非ざれば、社會の向上發達が望み得ないと云ふことを感じて居るのであります。然るに明治五年の當初に當りまして、所謂家に不學の子なく國に不學の人なからしめむことを期す。との抱負を立て、教育を基礎にして國を建て直さうと云ふ大策を實行せられたと云ふ事は、當事者の一大見識と言はなければならぬのであります。

此の如く劃一的の教育制度と云ふものは、我が國の教育制度の長所でありませう、又功績の

みでありませうか。と云ふ所以のものは何處にあるか、是は議論の存する處でありませう。我が國の明治大正の教育が劃一的であつたと云ふことは、見やうに依つては長所であると同時に短所でもあります。併ながら、私が之を長所の一つに數へると云ふ譯は何處にあるかと申しますと、我が國の明治初年の如く、所謂文明國の社會組織とは全く趣きを異にして來た處の封建制度の長く行はれたる國柄にありまして、取急いで世界の文明國の仲間入りをしやうと云ふ場合にありましては、劃一的教育制度を布くと云ふことが最も適切なる手段であつたに相違ないのであります。若し普通の原則に依りますれば、子女の教育は父兄の意志を本としなければならぬ。地方の教育は地方自治團體の希望に添はなければならぬ。所謂時勢民度に添はなければならぬと云ふ處の一般的原則に従つて、我が國の社會と云ふものを文明に導かうと致しましたならば、五十年間の中に今日見るが如き教育の進歩並に文物の進歩を見ることは到底出來なかつたに相違ないと思ひます。劃一的教育政策と云ふものは、是は變則であり、變態である。言はゞ權道とすべきものでありまして、普通の教育の原則とすべきものではありませぬけれども、明治初年に於きましては、最も變則的の權道を原則とする事が必要であり又適切であつたと考へるのであります。是が適切なる制度であつたと云ふことは、既に明治の世に於ける教育上の經驗が證明して居ります。

明治五年の學制が、余りに劃一的であると云ふので以て、其當時に於ける文部省の中心人物でありました處の田中不二麿と云ふ人が改革を企てました。田中不二麿氏は、北米合衆國の自由主義の教育制度と云ふものが合理的であると考へまして、我が國のやうな無理な制度は宜しくないから、少しく地方の自治團體の意志に依つて教育の施設と云ふものはなすべきものである。勿論其當時自治制度は布かれてなかつたのでありますから、地方自治と云ふ言葉はなかつたでありませう。町村の意志に依つて町村の教育をすべきものである。恰も曩の原内閣が方針とせられたやうに、小學校の經營は地方町村で以て負擔すべきものだ。斯う云ふやうな考を持たれた。是は違つて居らない、一般原則としてはそれは正しい。明治十二年に至りまして、田中不二麿氏は、愈々自分の理想を實行しやうと云ふので、例の教育令と云ふものを出しまして學制を改革したのであります。是は大體學校の設立、廢止其他の事に關しましては、市町村の希望に添ふ事にしたのである。其改正の結果はどうであつたかと申しますると、學制の劃一的制度に依つて、次第々々に發達し掛つた處の我が國の學校は、バターと倒れた。どうも教育費が嵩んで、是はたまらぬ、學校を無くすれば教育費は要らぬと云ふので小學校を無くする。それで、第一に苦情を申込んで來たのは地方長官である。自分達が盛んに盡力して漸く今日に至らしめた教育が一朝にして

土崩瓦解すると云ふ事を見るに忍びない。そこで文部省が教育令を出してから一年ソコ／＼で以て再び教育令を改正した。是が明治十三年の改正教育令である。其時の教育改正を説明する任に當つた方は骨の折れた事であらうと思ひます。私は文部省の圖書館にあります書類の中の、明治十三年改正教育令の元老院に於ける議事筆記と云ふものを見たことがある。其時、説明委員は、今の島田三郎氏と久保田讓男爵とであつたと思ひます。其人が元老院に行つて非常に油を搾られて居る。文部省が、一年前にもう少し教育と云ふものは地方の意志に添はなければならぬと論じて改正して未だ其言の響の消へない中に再びそれを取消すと云ふ事は何事ぞ。と斯う云ふやうな譯で、其爲に田中不二麿氏は文部省を去りました。處が、偉い人と見へまして司法大臣に移りました。兎に角、我が國の教育制度と云ふものが劃一的制度に依らなかつたならば、明治大正の教育は進歩が出来なかつた事であらうと想像する處の一つの證據を残したのであります。其後になつて、幾度か教育規定の變更はありました。併し乍ら、今日に至るまで、我が國のやうな劃一的の教育を布いて居る國は佛蘭西の外にありません。そこで、自分は、此劃一的制度の長所を確かに認め、其の功績も承認するけれども、是で以て將來宜しいかどうかは問題である。と思ふのであります。私は、今や普通の原則に戻して、此劃一的の制度を漸次緩めて行くべき時期が來て居

るのではないかと考へます。言ひ換れば今後は、我が國の教育制度の瑕瑾と云ふ事を考へなければならぬと。思ふのであります。

人は曰ふ、日本の教育は内容が充實せぬ、表面だけは整ふて居るが内容は零である。日本の學生は暗記ものは知つて居るけれども、十分消化して居ない、況や自分で考出すやうな事は出来ぬ。と斯う云ふ事を聞きます。是は、單に日本の學生のみではない。一體學生の時から、偉い考を自分から出すと云ふことは願ふ方が間違つて居る。それにしましても、我國教育中に、さう云ふやうな非難すべき缺點が餘計にあると云ふことは劃一制度の弊である。何事にしても、規則に依つて定つた通りの事をやれば宜いと云ふやうな立前で行ひますれば、自分のものとして其の教育をする考がどうしても起り憎いのであります。教師自身が恐らくはさうじやないかと思ふ。小學校令施行規則の條項に照し、それに添はねばならぬし、それに添へさへすれば宜しいことなる。若し、今日或人々の唱ふるやうに即ち、極端なる自由主義のやうに、凡ての教授案と云ふものは捨て、しまし、教授科目なんかも邪魔だ、斯う云ふ教育制度は制度其物としては宜しくないけれども、若しそれに依つて教育を行ひましたならば、其が行はれる範圍に於ては、教育と云ふ

ものは、教師自身の自分の考が出て來るのである、それに依つて教育せられる生徒それ自らが、外部の規定、形式に拘束せらるゝことなしに、自分で作り合つて行くと云ふ事には相違ないと思ふ。教育は、原則としましては、どうしても教育を受けるもの又は教育を受けしむる處の保護者、若くは地方の狀況に依つて、教育の仕方を變へべきものでありまして、都會と田舎。山地と川岸と云ふやうな、外圍の狀況の相違を考慮せずして劃一的教育を布くと云ふ事は、教育の理論に合ひませぬ。斯かる議論は、今日亞米利加邊りにも現にある、グリーンスクール、是は貧しい學校と云ふのでありますが、色々の意味になります、貧民の受くる學校と云ふ事にもなります。又設備の不完全な學校と云ふことにもなります。兎に角、米國の田舎の小學校は、都會のグリーンスクールを眞似たものであるから宜しくないと論するのである。都會は都會らしく教育すべく、田舎は田舎らしく教育すべきものであるにも拘らず、都會のグリーンスクールを田舎で眞似ると言つて非難されて居る。此事は、我が國の教育のみならず、何處の國の教育制度に於ても參考せらるべきものであると思ふ。語をかへて言へば、日本の教育制度の劃一策と云ふものは、過去に於ては功績を擧げたが、將來に於てはもう少し之を緩めて、教師の活動範圍を廣くし、校長の考を以て變更する範圍を廣め、殊に視學官の見識に依つて施設し得る處の範圍をもう少し廣くすべ

きものであると思ひます、斯くして其任に當るものは、教育の監督者たる。實際教育家たるを問はず、自分のものとして、自分の内心より湧出たる處の教育と云ふものを施すと云ふ事にならなければ我が國の教育は、内容上實質上に於て、内容を充實する事は出来惜いと思ひます。今や、世界各國は、競ふて、ほんたうの値打のある國民を作ると云ふ事に努力して居ります。此際に於て、徒に形式を揃へると云ふ方針に苦心して居ると云ふことは、是は確に時勢に順應し時勢と共に進んで行く方策ではないと考へます。劃一制度と云ふ事に付ては、功績はあるが、瑕瑾も確かにある。將來に於ては、是は必ず改めらるべきであると思ひます。

劃一制度よりも、モットより多く我が國の教育制度の功績として數ふべきものは、學校系統の連絡系統其宜しきを得て居ると云ふ事でありませぬ。其意味は、小學校を卒へた者でなければ中學校には入れないぞ、中學校を卒へた者でなければ高等學校には入れないぞ、高等學校を経た者には非ざれば大學には入れないぞ、と斯う云ふ風に、小學から大學に至るまでの學校系統と云ふものは統一的に連絡を保つて居ると云ふ事は、我が國の教育制度の世界に誇るべきで長所であると思ひます。斯かる法案は、佛蘭西にも嘗てはありました。佛蘭西の革命當時に出しました處の

ンドルセーの教育法案と云ふものに其精神が出て居ります。然るに、佛蘭西の現制度に於ては、我が國の如く學校の連絡系統と云ふものは能く付いて居りませぬ。佛蘭西に於ては、中等學校に進む者は學齡以前よりして皆其特別なるコースを経て行くのであつて、小學校は經由しないのが原則である。尤も、小學校より中學校に行く事も出来るが、實際上に於てはリセーと言ふ中學校には豫科があつて其處から這入つて行く。小學校に一度這入つてそれからリセーに移ると云ふ事は中々困難であります。佛蘭西では男子のリセーと女子のリセーとは分れて居りますが、何方も幼稚園から連絡する事になつて居る。小學校は別であります。獨逸に於てもさうである。私は、常に申すのでありますが、獨逸に於ける此等の革命と云ふものは、恐らくは、其半ばは獨逸の教育制度が其宜しきを得なかつた結果であると言つて差支ない。獨逸は世界の教育國と言はれ、而して獨逸の教育は徹底せる國家主義であると稱せられて居つた。獨逸が假令世界を相手にしての多年の戦争であつたとは言ひ乍ら、戦争半ばにして國內が分裂すると云ふ事は何たる醜態であらうか、これ實に、一面から云ふと、教育の無力を告白したものと謂ひ得るのであります。何故ならば、若しも、教育と云ふものが眞に國家社會を築き上げる處の力となるのでありますならば、獨逸の教育の如き帝國主義であつた國が、而して獨逸の如き徹底した教育國が、斯くも容易

く革命を起すに至つたと云ふ事はあり得べからざる事ではなからぬ。けれども、それは、一面の觀察であつて、或る一面から申しますると、獨逸の教育が徹底したるが爲に革命が起つたのであるとも言ひ得る。何故ならば、獨逸の教育制度が革命を起すやうに出来て居たのであるからで、革命を起すやうに出来て居た教育が徹底すれば徹底する程革命が強く起る道理である。其の譯は如何と申しますると、獨逸に於ては、佛蘭西よりもモット窮窟に、中等學校から高等教育に進む者は學齡の時からキチンと分れて居る。獨逸では、小學校義務教育で其の年限は八年であると云つて誇つて居りますが、八年の義務教育を卒つた者はどうしても中等教育を受ける事が出来ぬのである。是は獨逸許りではありませぬ。佛蘭西も、英吉利も、さう云ふ状態であります。彼の國に於ける處の教科目の關係に依り、中等學校に於ては羅典語と云ふものを主とします。彼我が國に於ける英語の如きものであつて、羅典語が中等學校の授業時數の大部分を占めて居る。而して羅典語は滿九年の時から始まりまして、其教授時數と云ふものは最も多いのであります。然るに、小學校の方には羅典語がないのでありますから、小學校の上に進めば進む程中等學校との距離が遠くなる。斯かる欠陥は、一には教育内容の關係に依りますが、一には教育革の沿から來て居るのであります。歐羅巴の中等教育と云ふものは、大抵大學と連絡するもので即ち大學

の豫備教育であります。大學の豫備教育でありますが故に羅典語と云ふものが大事になつたのである。處が小學校は、それと關係なしに發達した。一般市民の日常生活の必要に應ずるが爲に、小學校教育と云ふものが發達した。それで歐洲では社會が二分して居た、大學教育を受ける處の學校は中等以上の身分ある者である。それから一般市民と云ふ者はそれを全く別な教育を受け全く別な世界を建てて居た。それ故に、教育の主義方針としてはどちらも國家主義であるとか、帝國主義であると云ふやうな語を用ひましたけれども、最も、獨逸精神、國家精神に徹底したのは中等以上の教育であります。中等教育と言つても是は其大學教育と聯關しての事である。我が國に於ける高等官程度の、文武官に於ては、必ず大學或はそれに相當する教育を受けた者でなければならぬ。試験規定がさうなつて居る。高等文官の試験を受ける者は大學の教育を三年以上受けた者でなければならぬ。又中等學校の教員たる資格を受ける者も同じく大學に於いて三年以上の教育を受けた者でなければならぬ。さう云ふ規定になつて居る。それ故に、中等學校の樞要なる任に當る者は、どうしても中等學校以上を受けた者でなければならぬ。一般國民と云ふ者はどうしても下層社會に身を僭めて居るより外に途がない。幾ら國家主義であれと言つた處で、是の間の一般の人民は不平なき能はずであります。國民教育即ち小學校教育だけし

か受けない者でも、智能に於ては中等學校へ行つた者より秀れて居る者もあり得る。又大學に行つて高等教育を受けた者が必ずしも立派な人間だとは定つて居らない。然るに國民教育だけを受けた處の國民の大多數と云ふ者は、十分に自分の才能を現すと云ふ事が出来ぬと云ふ社會組織に置かれてからは、何うしても不平が起るのであります。而して、時の政府、時の社會を支配する處の人達は——獨逸では之をユンガツム、即ち貴族社會と云ふが——その貴族に對する反感を國民の大多數は持つて居ります。即ち下層社會の人々は、一般的に政府に對する反感を持つて居つたのであります。それ故に、戰爭の機會に於て、獨逸の此徹底せる國民教育の効が現はれた。彼等は、道理上不正當なる取扱を受けて居ると云ふ自覺を教育の結果として十分に持つて來たのでありますから、戰亂に際して、其の不平は爆發したのである。且又此機會を利用したものは獨逸の社會民主黨である。獨逸の社會民主黨は、我が國で云ふ社會主義者とは違ひますけれども、元は同じくマルクスから出たものである。獨逸の社會民主黨は、マルクスの如く必ずしも共產主義ではないが、國民の中の下層階級を友として居る。それ故に、社會民主黨と下層の國民とは何かピッタリと妥協し合ふ所がある。其間に立つて暗中飛躍をした者は小學校教員である。

獨逸の小學校教員と云ふ者は、どうして養成せられるかと云ふと、八年間の小學校教育を終りまして、二箇年乃至三箇年の師範學校豫備校に這入る、其上に二箇年乃至三箇年の師範教育を受けて小學校教員の候補者となります。それからして、二箇年以内に第二回の試験を受けて始めて本科正教員となります。此間の年限を通算して見ますと、小學校に這入つてからの修業年限と云ふものは、優に高等學校を卒業して大學の三年位まで行ける事になる。即ち實際に於ては、中等教員即ち高等官以上の教員と殆んど其の修業年限が同一であるにも拘らず、彼等は永久に小學校教員として見下げられて居る。是は獨逸の小學校教員諸君の憤慨置く能はざる處であつた。私に此度の革命運動には、小學校教員と云ふものが確に暗中飛躍をしたものと思ひます。私は、確にそう推定し得る證據を握つて居るのであります。證據とは何ぞ、獨逸新憲法の中に規定せられてある教育に關する一章である。一體憲法の中に教育と云ふやうな特別な章を設けて居ると云ふ事は他に例のない事であらうと想像致しますが、又實際例がないと聞き及んで居ります。是だけでも、獨逸の新憲法、即ち革命黨が造つた憲法の中に教育者の影が見るのであります。教育者でなければ教育と云ふ一章を憲法に入れさうもないことである。而して其教育の章の中に掲げられてある條項と云ふものに、年來戦前よりして多數の小學校教員の要求して己まなかつた處のも

のであります。其の中で、最も露骨なのは、第四百十三條の二項で「教員養成高等教育一般に通ずる原則に従ひ國內に於て統一的に規定せらる」と條項である。これに依れば、教員養成の機關は普通の學校系統に屬すべきものであつて、特殊の傍系的機關に於て爲すべきものではないと云ふことになる。言ひ換れば、從來の師範學校の如く此特殊機關若くは特殊部落的の學校と云ふものを廢して、普通の中學大學の間に於て教員養成をやれよと云ふ事である。是即ち小學教員の不平の聲に非ずして何ぞ。尙ほ第四百四十六條には、中等學校に進む者は小學校を経由すべしと云ふこともある。是は即ち戦後に於いて實行せられて居る處の獨逸の基礎學校Grundschuleと稱するもので、既に實行に着手されてあります。今年の四月から中等學校の豫備校は廢止され、其代りに小學校を経由しなければならぬと云ふ事になつた。是も年來の小學校教員の主張でありました。又新憲法に依ると、學校と宗教とは分離するが原則となつた。是は沿革のあることで、獨逸には宗教科と云ふものがありますから、自ら時の政府の統治者と成れ合つて貴族主義となつて居た。故に彼等は下層民から言ひますと、宗教は貴族等の味方一味と云ふ風に考られたのであります。又さう云ふ事も實際ある。そこで、獨逸の社會民主黨の年來の主張として、宗教と教育は分離すべきものであると主張したが、是は又獨逸小學校教員も久しく主張して來たのである。さう云ふ譯で、宗教

と學校と云ふものを分離しやうとする憲法の條項にも、小學校教員の主張が表はれて居るのである。此等に皆獨逸の學校系統の不備の爲めに起つた。處が我國の制度と云ふものは、始めから小學校を経て中學大學に行くことになつて居る。是は學制當時からさうなつて居る。名前は變つて居ります。初めは下等小學、上等小學などと謂つて居つたのでありますが、其の連絡系統の關係に於ては變りはありません。世界の中で、我が國の如く學校の系統の如く能く出來て居る國と云ふものは北米合衆國にあるのみであります。北米合衆國は我が國よりモット進んで居ると言へば率言へる。即ち八箇年の小學校を経て始めて中學校に這入るのである。我が國現制度に於ては六年の小學を経て中學に這入る。合衆國の方はモット進んで居るとも謂はれる。處が北米合衆國が近頃目を醒まして、八年の小學校は長が過ぎると謂ひ出した。長過ぎると言つて、國民教育に八年を費すと云ふ事は長が過ぎるのではないか、小學校と云ふ同じ型の下に八年の教育を施すと云ふ事は長が過ぎると云ふのである。そこで、小學校は六年でやつて、それから上の者は直ぐに中學校に連絡するか、或は初等中學校に直すべしと云ふのである。かくして、段々に我國の眞似をしてかけて居る有様である。此點から謂つても、日本の教育制度は全く世界一の教育制度だと云ふ様なことの勢ひが見へる。兎に角、世人は曰ふ、我國は獨逸の眞似をしたのである、我國の教育は

獨逸の眞似をしたのであるから獨逸の教育と同じく官僚式であると云ふかも知れませぬが、それは素人の説であります。教育の内容を知つた人から見ると、全く誤つた説である。成程我國の教育にも幾分官僚式の處はあるでありませうけれども。教育制度及内容よりすれば、我國の教育は北米合衆國に亞いで極めてデモクラチックのものである。獨逸は、戦後に於て社會状態が一變しました。社會状態が一變したと云ふのは、言ひ換へれば、今迄高等教育を受けた者が天下を取つて居つたが、それが一變しまして小學教育——國民教育——を受けた處の一般人民が天下を取るやうになつたと云ふことです。ですから獨逸の新しい教育と云ふものは、此見地から見れば總てが徹底的に理解が出来る。處が其革命の結果として、一般人民が獲得したものは如何にと云ふと、僅かに四箇年の基礎學校と云ふものを經由するでなかつたならば中等學校に這入れないぞ。と云ふことであります。四箇年の基礎學校を置くことに成功して、彼等は満足して居るのであります。我が國は、革命もしなくて六箇年の基礎教育を設けて置くのに比して非常なる相違と云はねばならぬ。

宗教と教育の分離にしましても、戦後に於て初めて解決致しました。否、解決の端緒が開けた

に過ぎない。處が我が國の有様は獨逸など、比べものにならない。さう云ふ内容實質から言へば、我が國の教育組織が獨逸式だなど、云ふ事は決して言はれたものではない。けれども、私は我が國の教育制度が完全無缺などは考へませぬ。獨逸の戦後の教育制度に於ては、我が國より進んだ所もある。それは、基礎學校の上に小學校に直接連絡した中等學校と云ふものを二種類造つたことである。それを卒業した者を直ぐに大學に入れやうと云ふ案が今日に於ては成立しかつて居る。我が國に於ては、中學校と云ふ一本路を經まして、大學に達する事になつて居りますので、デモクラシーの主義が未だ完全に徹底して居りませぬ。それから又亞米利加などに於ても小學校の上級を下層中學にしようと思ふやうな事にしまして、其下級中學と云ふものも色々分科制度にしまして、それより上級中學へ移る事の出来る組をも造り、又下級中學を卒へた者が直に社會に出て仕事出来るやうにすると云ふことも工夫されて居ります。これは我が國の高等小學校問題の如きものであります。けれども、大體の制度として、我が國の教育制度は、最もデモクラチックなものであると云ふ事は認めて宜しいと思ひます。

我が國の教育制度の中に於て、最も明白なる缺點とも云ふべきものが一つある。是は、女子教

育の不完全な事である、尤も、明治初年には相當に女子教育は盛んであつたのであります。田中不二麿氏の如き、又タビットモーレと云ふ人の如きも中々熱心でありまして、女子教育を盛んにしなければならぬと云ふことを第一回の教育年報にも書いてある。けれども、之を實際の施設に付て見ますると、女子教育と云ふものは殆ど投げやりにされて居たのであります。高等女學校令が出来たのは明治三十二年であります。兎に角、女子の中等學校に關する規定の出たのは頗る遅い。女子の高等教育に關しては、今日尙ほ混沌たる状況にある。高等女學校の上に高等科と云ふものを置くと云ふ事は、臨時教育會議に於て決定されまして、それが少しづつ現在行はれつゝあります。女子の大學と云ふものは今なほ認められて居りませぬ。現在我が國には未だ女子の大學はないのであります。自稱女子大學校と云ふものは幾つかありますけれども、文部省に於てのその取扱は依然として専門學校の扱ひになつて居ります。女子の教育と男子の教育は組立てに於ては勿論違ふ處はある。何故ならば、男子の教育でありますると、男子の全體が何等かの業務に従事して獨立生活を營むと云ふ事を國家が期待し、それに應ずるやうな學校を造る事にして居る。處が女子の方になりますと云ふと、其大部分は家庭の人になるが故に、獨立生活の準備に要するやうな教育施設を國家がなす必要は少いと云ふ事も事實である。併し、高等教育を卒へた

男子と雖も、高等遊民的に何等の専門的業務に従事しないで徒食して居る者もあります。女子の方にも、事情に依つては獨立の業務に従事して獨立生計を立て、行く必要のある人もある。而して社會が複雑でありますから、是等の各方面の要求に應じた施設をしなければならぬ道理である。或る男子の便宜と云ふ事のみを考慮して、縱令少數であつても女子の必要に應ずる高等教育機關を造らぬと云ふ事は我が國民道徳の主義に悖ると私は思ふ。男子の大學程多くの女子の大學は入りませぬけれども、又大學になつたら男子と共學でも宜しいかも知れませぬが、高等學校程度の女學校は是非多數に出来なくてはならぬ。我が國の教育制度は、女子教育に於ては明白に遅れて居るのみならず不十分である。我が國教育制度中、もう一つの不十分な點は視學制度であります。將來に於ては、視學制度と云ふものを改良して、もう少し視學其人の見識に依つて適切な教育施設をやると云ふ視學の活動の範圍を廣くしなければならぬ。或はそれは官僚式の考へじやないかと言はれるかも知れぬが、決してそうではない、世界中に於て視學官の最も権力のあるのは北米合衆國である。若しも視學官と云ふものの活動範圍の廣いのが官僚式であるならば、北米合衆國の教育は世界一の官僚式である。我が國の視學制度の整はざるは劃一制度の弊である。我が國では全國の教育規定を中央政府の卓上で定めて居るから地方視學の必要も殆どない。是で

は前に言つたやうに、徹底的に教育をする事は出来ぬのであります。將來に於ては、劃一制度を破ると同時に視學制度と云ふものを改良して、視學官の活動範圍と云ふものを廣くしなければならぬ。教育の施設に當る者の活動範圍を廣くし、又それに適する人物を教育界に取り入れることが教育界の急務であります。教育の制度に付ては、大體そんなやうな事に付て效果の存することを私は感んずる次第であります。

教育の内容になりますと、我が國の教育と云ふものは、是も世界一の教育内容を持つて居りますと誇るべき事があると思ひます。試に考へて御覽なさい。我が國の中に這入つて來ない處の教育學説は教育史上にはない。學制當時には、制度としては佛蘭西式が這入つて來ましたが、其後には交通の機關其他の關係よりして、米國及英國の教育法が這入つて來ました。最初は教育思潮と云ふ事でなかつたでありませうが、實際の教育のやり方と云ふものは主として米國式である。我が國の小學校は其教授書と云ふものは多く英米から這入つて來たものであつて、先づ大體スペンサーの學説が直接間接に我が國の教育界を支配して來たと言ひ得ると思ひます。其後一變しまして、是も北米合衆國を経て這入つて來たのであります。ペスタロッチの教育が輸入せら

れたのであります。是は高嶺秀夫先生が輸入したものであります。ペスタロッチ教授法は瑞西に起つたものであるが、英吉利を通つて米國に渡つたのであります。亞米利加より渡れるペスタロッチ主義と云ふものは、所謂實物教授となつて居る。而も實物教授は亞米利加に早く行はれたる處のスペンサーの自然科學主義と提携して行はれた。自然科學と云ふものは、實物を取扱つて行くでなければ眞實の理解は出來ないのであります。それが我が國に參りまして純ペスタロッチ主義となり、所謂改正教授術となり、所謂開發主義となつた。又明治二十年以後になつては、獨逸のヘルバルト主義が這入つて來た。明治三十年以後になつては余り流行はしなりましたが、亞米利加のパーカーを経てフレイベルの教育思潮も這入つて來た。斯く觀じれば、亞米利加、英吉利、佛蘭西、獨逸等の教育思想は皆這入つて來て居ります。世界の教育史上に於て大家の思想と謂はれるものは皆這入つて來て居る、であるから、私は何時も申すのであります。我が國の小學校教員諸君は大に自重し、自負して可なり、世界中に於ける教育思潮、教授法論の結晶が諸君の頭の中に沈澱して居るのであります。沈澱と云ふ意味は蓄積して溜つて居ると云ふ事である。我が國の今日の小學校教育と云ふものは、偶然に出來たのではないのである、處が動もすると斯かる自重、自覺を持たない教員があるやうであります。大に情ないことでもあります。何か、新聞

や雑誌やらの記事に付て聞き齧つた事に依つて直ぐ吃驚仰天して、直ちにそれに歸依しやうと云ふ態度がある。是は甚だ慨歎すべき事であると思ふ。成程人の説の善い事は是は受入れなければならませぬけれども、自分の持つて居る寶を無暗に捨てること云ふ事は宜しくないであります。私は思ふに實際我が小學校の教授法などは、恐らく世界中に於て何の國のにも劣るまいと思ふ。私は總てが宜いとは言ひませぬ我が國のやうに熱心に小學校の教育方法を研究して居る國はないであらうと思ひます。

此の如くに我が國の教育と云ふものは、世界の文明國の長所を集めて居るのであるから、大に自重して宜いだけでも、又缺點と云ふものも明にある。併し、其缺點は寧ろ世界共通の缺點である。過去に於ける教育の仕方に、世界諸國共通の缺點と今日呼ばれて居る缺點があるのであります。それは何であるかと云ふと、所謂新進教育家が唱んで居る處のものがそれでありませぬ。従来の教授法で、最も我が國の教育界に落込んで持つて居るのは、獨逸のヘルバルトの教授法であります。元來獨逸の教授法の理想としたものは何であるかと云ふと、ガウデヒと云ふ人の批評に従ひますると云ふと、教師と云ふ者が主になつて生徒と云ふものが受身になつて働くべきものと考へて來たのである。教師が明瞭に力強く問を發し、生徒が迅速に而も正確に其に對して答へる生徒が答へると、教師が直ぐに次の問ひを出す、生徒が又直ぐ其れに對して答へると云ふやうに、教師が生徒と一緒に活動して行く事が教授法の理想の状態であると考へた。我が國でも色々の名を有つてあらはれて居る處の新しい教育思潮と云ふものは此の點を非難して居る。教育と云ふものは、教師本位であつてはならない、生徒本位でなければならぬ、生徒が受身になつて働くべきに非ずして、生徒自ら働いて行く習慣と力を養つて行かねばならぬと云ふのが新教育思潮の共通の點なのであります。それは、最も至極の論であると私は思ふ、何故ならば人間の値打と云ふものは、人間か機械的に使はれるに都合の宜い道具になると云ふ事を理想とするものではないのであります。矢張一人前の人間として、責任を以て自分に與へられたる仕事を爲すと云ふことでなければ、是は人間たるの値打はないのであります。其仕事の大事業と小事業とを問はず、番頭でも宜しい、番頭は斯うすべきものであると云ふ考を自分でやらなければならぬ。處が従来の教授法はさうなつて居らない。特に我が國の教授法を見ると、西洋以上に、獨逸以上に、他動的である。世間では、我が國民は眞似をするのが上手であると云ふ。眞似をするると云ふことは即ち他動的である證據であります。人眞似許りする處の人間じや迎も世界の一等國民とは謂は

れない。私は何にも大發明をすることのみを云ふのではない、どんな小さい事をやるにも其處に工風が加はらなかつたならば眞に充實した仕事は出来なと思ふ。私は此點に於て我が國には根本に悲觀すべき性質があると考へる。表面は、如何にも立派なやうであるけれども、内容は今言つたやうに充實と云ふ事を原則的に缺いて居るやうに思はれる。其の一原因は、政府當局が余りに親切に面倒を見る處から起つて來た缺點であると思ふ、尤も先きにも言ひました通り、政府が面倒を見來つたと云ふ事は今日までは宜かつた。けれども、今後に於ては、一般人民自らが政府の指圖を待たずして自ら進んで仕事を立派にやつて行くと云ふ心持を養つて行かなければならぬ。故に教授の方法に於ても新教育が主張するが如き點に向つて根本的改良を爲すべきであると思ふのであります。さう申しましたも、私は、今日の新教育の主張を無條件に謳歌するのではない。歐米の新聞紙や雑誌にあると云ふやうな一時的のものを受賣りすると云ふやうな態度は根本的に排斥すべきものであります。吾々は自ら進んで工夫すると云ふ態度に出なければならぬ。今日の新教育の思潮などに必ずしも自己の主張に合するものではない。又其說の内容から言ひましてもそれ等の人の多くと云ふのは歴史的發達と云ふ事を考慮する事が極めて乏しい。是は自分自ら工夫すると云ふ心の態度に伴ふ處の缺點であります。自分の考、自分の心を標準とする人は、歴

史を重じないと云ふ事に成り易いものである。是は、教育史上でも、思想史上でも、明白なる事實である。公平なる判斷者は、歴史的の經驗、人類の經驗と云ふ事を十分に考て見た上で、自分の意見を立つべきである。我が國の教育者は、我が國の過去に於ける教育思潮及教授方法の沿革及歴史と云ふものを考へるだけの余祐を持たぬ。唯々新しいやうなことを考出して見たり、人真似をしたりするやうに思ふ。猶又是等の人が自分の考からして直ぐに之を割出すと云ふ事を急にして、自分の相手である生徒と云ふ者が如何なる發達を精神的に身體的に遂げて居るか、而して現在自分が相對して居る處の生徒は、子供より大人に至るまでの如何なるステージ即ち段階にあるかと云ふ事を考慮することが不十分であります。斯の如きは教育學の進歩しなかつた時代では許さるべきである。併し今日の如く教育學の進歩した時代に於ては、最早許すべきではない。私は我が國の教育内容と云ふものには改善を要するものがあると云ふ事は認めるが必ずしも今の新教育思潮を謳歌するものではないのであります。吾等は過去五十年間に於ける我が國の教育内容が發達した事は功績として十分に値打けると共に、その缺點と云ふものに留意しまして、今後に於ては其缺點を補充して行くべきであると考へる次第であります。終

專門百廿四大家分擔執筆

教育學術叢書

(全八冊各冊正價三圓宛)

- 最近哲學の進歩……………(桑木博士外十八大家合著)
- 最近經濟學の進歩……………(平沼博士外十八大家合著)
- 最近社會學の進歩……………(遠藤博士外十八大家合著)
- 最近倫理學の進歩……………(吉田博士外十八大家合著)
- 最近心理學の進歩……………(連水博士外十八大家合著)
- 最近理化學の進歩……………(石原博士外十八大家合著)
- 最近教育學の進歩……………(小四博士外十八大家合著)
- 最近教授論の進歩……………(佐々木氏外十八大家合著)

教育効果の増進

文學博士 春山 作 樹述

明治五年に學制を發布せられたことは、我國の教育の歴史のみならず、教育の歴史を離れて全體の我國の歴史から眺めても、非常に重大な意味を持つて居るところの事柄であつたと思ひます。此の時に始めて我國の教育制度の基礎が定められたのであります。以後度々の改正が加へられたけれども、根本は此時に定まつたのであります。其の事實を今日から振歸つて考へて見ますと、殊に此の世界大戰後歐米各國に於て既に試みられ、或は試みられんとしつゝある所の教育改造に現はれたる大勢の上から見ますと、我國民が如何に幸福であつたかと云ふことをば今更の如く感ずるのであります。何故に明治五年に出た所の學制が今日の大勢に照し合はせ幸福であつたと感せしめるかと云ふと、歐米と申します中にも主として歐羅巴であります、歐羅巴諸國に於

ては、今回の大戦争の後に至つて初めて試みやうとして居る所の仕事が、我國に於ては、明治の五年に既に其の根本方針だけは決定せられて居つたからであります。この明治五年の學制を見ますると全國を八大學區に分ち、一大學區を三十二の中學區に分ち、又一中學區を二百十の小學區に分つて、一小學區には一小學校を設け、一中學區には一中學校を設け、一大學區に一大學を設けると云ふことになつて居ります。斯くの如く其の規模の非常に大きいことは、今日から考へまして誠に驚異の感を我々に與へるのであります。當時明治の新政府と云ふものは、漸く成立つたばかりでありまして、財政は甚だ窮乏して居つたのであります。其時に當つて、斯の如き大計畫を立てられたと云ふことは、實に驚くべき事であつたと思ふのであります。今日になつて考へて見ますと、中學校はその當時の計畫に比べて見ると、數は却つて多くなつて居ります。小學校も其の小學區の制度には據つて居りませぬで、たゞ／＼別に改められた制度に據つて居りますが、それも數は非常に多くなり、又如何なる山間僻地に於ても必ず通學の便があると云ふことになつて居ります。其點に於ては別に今更驚く程のこともありませんが、全國に八大學を置くやうなことは、今日未だ之れを實現することの出来ないものであります。明治の初年に於て、其の計畫を樹てられたと云ふことは、非常に遠大の謀であつたと考へられるのであります。先づ吾々は學制の

根本の規模に於て、非常に大きなものであつた、大規模の計畫であつたと云ふことに對して、大いに感動せざるを得ないのであります。

次に、此の明治の五年の學制と云ふものは、機會均等主義の上に立つて居るものであつて是れが非常に意味のある事であります。今日の大勢から振歸つて考へて見て、幸福を感じなければならぬことの一ツであります。明治の初めの學制に依ると、如何なる田舎までも教育を普及させて一人でも教育を受けない者のないやうにしたいと云ふ思召は、當時の被仰出書の中に明かに示されてあります。斯くの如き考は、勿論相當に長い歴史を持つて居りますが、それが今日まで十分に實行出來て居る國もあり、又出來て居ない國もあります。勿論今日では、この義務教育制度と云ふものは、文明國としては必ず採らなければならぬものになつて居るから、何處でもその制度は設けられて居るのであるが、それが果して實際に勵行せられて居るかどうかと云ふことを疑はしめるやうな事實が、文明國の中にも見受られるのであります。

彼の亞米利加合衆國は非常に大きな國で又非常に富んだ國であります。而も今回の戦争に於ては寧ろ有利なる地位に立つて居つた爲めに、國運が益々隆んになりつゝあるのであります。こ

の義務教育の實況はどうでありますか、勿論亞米利加に於ても、各國に於て多少の差違はありますけれども、義務教育制度と云ふものは行はれて居つたのであります。然るに今回の戦争に際して俄かに大陸軍を建設しようとした際に、壯丁を集めて検査をして見ますといふと、全然無教育なる者が發見せられましたのであります。而かも驚くべき多數であつたのであります。そこで亞米利加人は今更の如く驚いて、義務教育制度と云ふのは名ばかりであつたりではないか、一體是れまでどうして居つたのであらうかと呆れて居るやうな次第であります。所が我國に於てはそれよりも遙かに良き制度が實行せられて居つて、だん／＼文字に通じない者と云ふやうな者が無くなりつゝあります。是れは吾國民として非常に幸福であつたといはなければなりません。

次に又考へて見るべきものは何であるかと云ふと、明治五年に、この學校制度を立てる場合に貧富貴賤の別なく、同じ系統に屬して居るところの學校に入れて教育をすると云ふ根本主義を定められた事であります。この明治五年の學制の由つて來るところを考へて見ると、大學區、中學區、小學區と云ふものを設けられた所はフランス制度と非常に能く似て居ります。恐らくはフランスの制度を模倣したものであらうと思ひます。併かしながら、フランスでは今日も尙ほ我國の

學校制度とは多少違つた所があります。歐羅巴の國々に於ては、平民の初等教育の爲めに學校が發達する前にそれに先立つて中流以上の社會の子弟の爲めに、中等以上の教育が發達して居りました。その後で平民階級の初等學校が發達したのであります。そこで英佛獨共同様に、中等以上の教育を受けやうと思ふものは、普通の小學校へは行かないで、家庭教育或は中學校の預備科と云ふやうな所で或程度の準備を成して、早くから中學の方へは入るのであります。それで、普通の小學校へ入ります者は主として下級社會の子弟であつて、一度小學校には入ると、外國語が小學校の課程には入つて居ない關係上、小學校を卒業してから後に中學校へ進級しようと思ふ場合に、非常にむづかしい試験を受けなければならぬので、大抵は駄目なのであります。従つて初めから小學校へは入つた者は此處で行留まりになる。若し高い程度の教育を受けようと思へば初めから中學校へは入つて行かなければならないと云ふやうな事になつて、小學校と中學校の入口が別になつて居ります。そこで小學校の卒業の時には最早修學の道は袋町で、先きは開けて居ないと云ふやうな制度になつて居ります。それが英吉利でも亞米利加でも獨逸でも長く續いて居つたのであります。佛蘭西でも同様でありました。ところが英吉利と佛蘭西とは自然に緩和せられて、小學校へは入つて居ても途中から中學の方へ轉入學をすることが出来るやうな途が徐々

に開かれつゝあつたけれども、今尙ほ過去の情勢に囚へられて、矢張り中等以上の教育を受ける者は早くから中學校の豫科へは入るといふやうな状況にあるのであります。英吉利では、最近小學校が餘ほどよくなりました。中學校豫科風のものも漸次少くなつて來ましたが、佛蘭西ではまだ少し遅れて居るのであります。勿論佛蘭西の方でも其の點を緩和する爲めに、小學校の課程と、中學校の豫科の課程とを同一にして、小學校を少しばかりやつた所で、中學校へ轉入學が自由に出來るやうにしましたが、其れは稍々後のことであつて、吾國の明治五年の頃はまださうはなつて居なかつたのであります。即ち其頃は矢張り入口が別になつて居つて、先きが袋町で行詰りになつて居つたのであります。これを以て見れば我國の學制を立案せられたことは非常に卓見であつたといはなければなりません。大學、中學、小學の制度は、無論佛蘭西の型を移されたのであるけれども、併しながら彼國の如き先きの行詰りになつて居る所の學校制度は採らなかつたのであります。そこは却つて亞米利加之式に倣つて、亞米利加之所謂ワンスクール、フォアア、オールと云ふ主義に倣つて、貴賤貧富の別なく、同じ系統の學校に入れる、中學には入るには、小學校を卒業してから入學すると云ふ制度を採られた。此處が非常に進んでゐる所でありませぬ。若し是れがなかつたならば、吾々は今日のやうな社會を現出することは出来なかつたであらうと思ひます。佛蘭西はそれより後になつて、漸く斯ういふ制度に近付かうとして、未だ十分になり切つて居ない状態であります。獨逸はどうなつて居るか云ふと、矢張り入口が別になつて居つて先きは行詰りになつて居る制度を最後まで頑固に採つて居つた國である、それが今特に改まらうとして居ります。今度の戦争の終りを遂げた所の獨逸の革命がそれを實行するやうにさせたのであります。只今獨逸ではこの革命に當つて造られた新憲法の中に教育の根本方針、學校制度の根本的確立と云ふものを規定して居ります。それに依ると、總ての人が男女の別なく亦社會階級の別なく、四年間共通の基礎教育を受けなければならぬ。中學校高等女學校へ進んで行く者も四年間は何れも共通し教育を受けなければならぬと云ふことを定めて、之れを基礎學校と名付けて居ります。そこで、從來我國の教育のやり方はすべて諸外國の眞似をして居る、殊に近頃は獨逸の模倣が多いと云ふやうな批評を受けて居たけれども、其の制度の根本に立つて考へて見ると、既に明治五年の昔に於て小學校を卒業してから後中學校へは入ることにして、誰でも小學校を経なければならぬものだと云ふ制度を樹てられたといふことは、實に先見の明があつたと言ふべきであります。この點に於て、我國は獨逸よりも五十年進んで居つたと謂つても差支ありません。

さて、最近の世界大戦争が、歐米各國の教育改造に於て根本の方針と言ふべきものが幾つもあるが、其中で最も顯著なるものは何であるかと云ふと、教育上の機會的均等主義と云ふことである。この教育上の機會均等主義は、國々に於て色々な形をとつて居ります。先づ獨逸に於ては只今申しましたやうに階級主義の學校制度を廢して、國民のすべてに四年間の基礎學校と云ふものを通らせると云ふ主義を採つたことであります。佛蘭西でも、やはり亞米利加式の學校制度を採つて、總ての階級を通じて或年限の間共通なる基礎教育をやらなければならぬ、獨逸と同じやうにやりたいと云ふ運動も、今佛蘭西の教育界に盛に起つて居ります。それから、英吉利の方では、小學校へは入つた者の先きが行詰りになると云ふことは幾分かづゝ緩和されつゝあつたのであるけれども、尙ほ從來英吉利の教育の中心、即ち英吉利人が主力を向けて居た所は、貴族富豪の中等以上の教育にあつたのであります。諸君は英吉利の教育のことを紹介せらるゝ毎に必ずイトンカレッヂ、ハーロースクール、或はラグヒースクール等の名前を聞いて居られるであらうが、之れを若し我國の普通の中學校と同じ性質のものと考えたならば非常なる遠であります。イトンカレッヂ、ハーロースクールは貴族的の學校であり、中にもイトン、カレッヂの

如きは我國の學習院より一層貴族的の學校であります。その學生として立派に立つて行くことの出来るのは、公侯爵の當主或は嫡生子であつて、伯爵以下の子供に遠慮しなければならぬと云ふやうな貴族學校であります。ハーローの方はそれ程門閥と云ふことが八釜しくありますけれども、矢張り貴族的の學校であります。さう云ふ風に非常に澤山の金を掛けてやつて居つたのであります。貴族、富豪の受けるといふ中等以上の教育に主力を向けて居つたのであります。平民階級の初等教育と云ふものは寧ろ第二位に置かれて居つたのであります。所か、今回の戦争の初めに於て、獨逸軍がドシ／＼進入して来る、そしてそれが非常に強い、その強い原因は如何なる所にあるのであるか、といふやうな喧ましい議論が起りました、是れは平民階級にも能く行届いて居るからであらう、英吉利人も深く考へなければならぬといふことになりました、戦後の教育改造に於ては、著しく英吉利の教育の主力の向け所が違つて来たことを發見するのであります。即ち千九百十八年に新に制定せられた所の教育法、其の立案者であり文部大臣でありましたフィッシャーの名を取りまして、フィッシャー教育法と申して居りますが、そのフィッシャー教育法に依りますと、明かに英吉利の教育は、全體の中心が過去の教育の如く貴族富豪の中等以上の教育には向けられないで、平民階級の初等教育に向けられて居ることを發見するのであります。

是れ又英吉利に於ける教育上の機會均等主義の顯著なる現はれであると思ひます。

斯様に、何處の國を見ましても、今日は教育上の機會均等と云ふことが叫ばれつゝあるのです。それが我國に於ては既に明治五年の昔に於て、少なくとも其の根本主義が確定して居つたと云ふことは如何に吾々に取つて幸福であつたかと今更、其の有難味を感じるやうな次第であります。或は明治の初年に於て、まだ封建の遺風残つて居る時代に、斯くの如き思ひ切つた學制の創められたのは、不思議であるとも解せれるかも知りませぬ。併かしよく考へて見ますと、そこにはそれ相當に理由のある事を發見するのであります。即ち新に學校制度を設くる爲めに視察に出られた人の意見や、或は外國人の意見や、それらを參酌せられて外國の制度に倣ふた。而かもそれらが、一國に偏しないで、よく其の長所を採つたと云ふことになるのであります。亦一面には斯くの如き制度の設けられると云ふ我が國の社會狀態それ自身が、既に餘程平等主義的に傾いて居つたと云ふことを知るのであります。そこで私は、此の一般民間に教育を普及させると云ふことは、過去に於て如何なる状態にあつたかと云ふことを考へて見たいと思ふのであります。徳川時代に於ては、學問は可なり盛んでありましたが、當時勢力を占めて居つた朱子學派の

立場からして教育を民衆の間に普及させると云ふことをはどう云ふ風に見て居たかと云ふと、大學の中に書かれて居る所の「親民」の二字を「民を新にする」と讀み、國民の精神に立入つて、國民を精神的に改造すると云ふことを重要視して居つたのであります。故にその立場からすると、一般の國民に教育を普及させることが絶対に必要な條件として現はれて來なければならなかつたのであります。林羅山先生の文集を見ますと、徳川家康公が駿府に居られた頃、一日大御所即ち家康公にお目見得をして、いろ／＼の話の末、「支那には村々に閭塾と云ふものがあつて教育が普及せられて居る、至極結構なことであると思ひます」と先生が言はれたといふことを書かれて居る。そして「幕府顧みて他を言ふ」と書いて、文章をブスツと切つて居ります。これから考へて見ると、羅山先生が、其の頃既に普通教育制度を布かうと云ふ考を持つて居られたのだらうと想像される、所が家康公が賛成しなかつた爲めにそれ切りになつたのであらうと思ひます。この羅山先生と家康公との關係を見ますと、常に家康公の保護の下に居られた所の羅山先生が「幕府顧みて他を言ふ」と云つて後何も言はずに文章を切つてある所を見ると甚だ殘念であつたらうと想像されます。併かし先生地位としては、それ以上突込んで言ふことは出来なかつたのでしよう。それは徳川時代の初めの事でありませぬ。其の後どうなつて居つたかと申しますと、だん

く、學問の大切であると云ふことは唱へられて居つたけれども、所謂學者先生の方から、民間の教育に對して積極的にやられると云ふことはなかつたのであります。民間の教育と云ふものは、寺子屋に限られて居つたのであります。寺子屋教育と云ふものを學者先生から見ると、何だか變なもので餘り下らないものゝやうに考へられて居つたやうであります。當時の文章や文集や隨筆の中に、時々それ等に就いていろ／＼悪口を書いたものを發見しますけれども、兎に角朱子學派の根本的立場から考へて見ますと、どうしても教育をば民衆の間に普及せしめねばならぬといふことに歸するのであります。

荻生徂徠先生は、又違つた考を持つて居た。先生は親民(民を新にす)と云ふことを言つて、一人々々に修養をさせて、さうして國を良くしやうと云ふのは、實にまどろっこしい話である。丁度米を臼に入れて搗くをしないので、一粒々々磨きを掛けるやうなもので、そんな事では間に合はないと云ふやうなことを言つて居られる。徂徠先生は、制度の改革に依つて世の中を善くすることは出来るが、個人々々の教育に依つてやると云ふことは迂遠の方法である。と斯う言つて居るのであります。併し平民階級が無教育で宜いとは言つて居ない。餘り高い程度の教育をするには及ばぬ、其れは却つて有害であるか、或程度まで教育が必要であると云ふことは言はれて居るのであります。

のであります。

次に王學派の方の立場から見ると、儒教一般と云ふうちにも、殊に王學派に於ては、聖人も凡人も其の根本の性と云ふものは一つであると云ふ。此立場から見ますと、矢張り普通教育と云ふものを民間に普及させることは必要のことになります。中江藤樹先生の書かれましたるものゝ中に此の考へが能く現はれて居ります。又熊澤蕃山先生の事業の中には其精神が含まれてゐます。徳川時代に於ては、無論この普通教育制度は行はれてはゐませんが、併かし民間の教育を試みられたのは事實であります。例へば、水戸の領内に於ては彼方此方に學問所といふものを設けられたことがあります。それは義公の精神から出た所の朱子學派に基いたものであります。又備前岡山の領内に於ては、二十ヶ所ばかり手習所と云ふものを設けられました。其のやり方は違つて居ります。けれども、今日ならば小學校と見るべきものであります。この岡山に手習所を設けられました時には、熊澤蕃山先生は既に去つて、大和國に隱棲せられて居つたのでありますから、蕃山先生直接の事實であつたとは言ひ兼ねるけれども、其頃も尙ほ先生と備前侯との間には矢張り精神が通つて居りまして、先生は常に岡山の事に對して種々献策せられし居つた

やうであります、殊に岡山城内の御花島學校開校の場合には、蕃山先生自ら出て行かれたと云ふやうな譯でありますから、岡山に手習所を設けられたと云ふことには、矢張り先生の考が餘程そこに籠つて居つたものと考察せられます。そして、是れは、とりもなほさず王學派の立場から出たのであると思ひます。其他には普通教育上に學者先生が直接に手を出されたと云ふやうなことは澤山ないのでありますが、併かしながら明治の時代になりまして平等主義の學校制度を立てらるべき理由は他にチャンと存在して居る。それは、徳川時代より通じてだん／＼町人階級が經濟的に勢力を占めて來たといふ事でありませう。武士階級は、表面に於ては權力を持つて居つた様であります、經濟上に於ては常に町人階級の鼻息を窺はなければならぬやうな状態で、町人階級、或は地方の地主階級が頭を擡げて來たといふ事、それが非常に大きな社會的平等主義の原因をなしたのであります。それから、今一ツは武士階級の考へ方なり亦生活状態なりがだん／＼と町人階級に擴まつて行つた事でありませう。これには色々原因がありますが、一ツは彼の所謂浪人の方であると思ひます、戰國時代に、何でも槍先の功名に依つて一國一城の主人公になりたいと云ふやうな考を持つて、百姓であれ町人であれ、無暗に飛出して馬に乗つたり槍を放つたりしたのであります。そこであの時分には矢張り澤山の武士と云ふものが出來た。かれ等は武士の仲間

に入つて武士の氣風を受けた。段々とさうしてやつて行く内に、彼方の家が潰れ、此方の家が取られたりすると、終は浪人になつて土着しなければならぬ人間が澤山出來たのであります。豊臣時代から徳川時代の初めになりますと、大名の家の潰れた者が非常に澤山にあります。又家が潰れない迄も戰爭の續いた時分に、實力以上に人を抱へて居つた大名がドシ／＼人減らしをやりました。丁度此頃の様には澤山の要らない無用の人間を淘汰して行つたのであります。それが徳川時代には極めて著しい現象でありました。そこで武士生活を少なくとも一度やつたといふ者が澤山民間に住んだのであります。是が即ち浪人であります。浪人とは一度は武士の修養をした者が町人生活をする事でありませう。之れがだん／＼と民間に擴がりました爲に、少くもその武士的人格が民間に及んで行つたのであります。それ等の人の中には寺子屋を開いた人が澤山にある、即ち教育者となつて盡した人が澤山にある。而してその勢力は非常に偉大であつたのであります。今一ツ他に大きな原因があります。即ちだん／＼と町人階級が勢力を得て參りますと、表面的の有力な階級でありました所の武士生活の眞似をしたくなる、乃ち町人の方からこの武士の眞似をすることになつて參ります。この武士の眞似をすると云ふことを助けたものに又大きな働をして居るものがある。何であるかと云ふと女子のお屋敷奉公であります。女子が大名旗本のお屋敷に

入りまして行儀見習をやる。それから歸りまして嫁入りをする、嫁入りをした家で先祖のお祭をするとか、或は正月の儀式、或は其他の儀式をやりますと、私の勤めて居りましたお屋敷ではこんな時には斯う云ふ風にやりましたと言つて、だん／＼とハイカラになつて來ます斯様にして町家の生活がだん／＼武家風に近付ましたのであります。以上の如く種々の原因が相合しまして、徳川時代の終りには表面には武士が大小を佩して威張つて居り、町人は九腰でお辭儀をして居ると云ふ風になつて居つたにも拘らず、その實力の上に於て又思想の持ち方に於て、生活状態に於てだん／＼と相近付いて來たのであります。若しも斯くの如き社會状態が整つてなかつたとすれば、幾ら四民平等の思想が入つて來ても、明治の初年に於てあれ程にスバツと新しい制度を探ることは出来なかつたのであります。詰りいろ／＼の準備が出来て居た所へ、外國の新思想が入つて來たのであります。一方では即ち學者先生の方では徳川時代には餘り普通教育と云ふものに盡力せられなかつたけれども、自分達の學問的の立場の根本主義から云へば、至極結構な事でありますから、直ちにそれに賛成せられるといふやうな次第で、斯くもキツパリした制度が成立したのであります。誠に總てのものが都合よく參りました次第であります、今回の世界の大戦後に至つて吾々が平日先進國などと云つて居りました歐米の國々で大に改造して行かうと云ふやう

な教育制度問題の根本主義をば、吾國に於ては既に明治五年の昔に定められたと云ふことは、誠に有難く思はなければならぬ事と思ひます。併かしながら吾々は唯有難く思つただけで満足してはなりません。満足と云ふことは行止りである。吾々は過去を追想して結構であつたと考へると共に益その精神を擴大して、將來に於て尙ほ一層その精神に基いた活動を續けて行つて、さうしてその教育の効果の増進を圖らなければならぬと考へるのであります。

斯様に、我國の學制の定められました時には、其の根本方針が誠に正しいものであります。が、其後五十年の今日に至つて其の教育の効果はどうであるかといふに、成績はかなりに擧つて居るといつてもよろしい、併かしながら、今日を以つて吾々は満足すべきものであるかと云ふと、中々以て満足することは出来ないと思ふのであります。只今申しましたやうに、歐羅巴諸國の戦後の教育改造に於ては、色々な條項がその中に含まれて居りますが、各國並に義務教育延長の問題が起つて居ります。獨逸は以前から八學年制度を探つて居ましたから別に問題は起りませぬが、佛蘭西の方ではさうなつて居ませぬでしたから、近頃は是非八學年に延長しなければならぬと云ふ議論がやかましくなつて居ります。また吉英利では、先刻申しましたフイッシャー教育

に依つて、義務教育年限が延長せらるゝことになつて居ります。尤もこのフィッツジャー教育法は決まりましたけれども、それが實施せらるゝ期日はまだ決まつて居りませぬ。今の所まだ空文であるのでありますが、兎に角満五歳から満十四歳までは、國民共通に義務教育を受けしむることになつて居ります。その以前は全國劃一になつては居ませんでした。即ち満五歳から満十五歳までの間に於いて、その土地の事情に應じ、地方の教育官憲が其の年限を決めてやつてゐたのであります。そして事實はなかく、八學年などと云ふことにはなつて居なかつたのであります。この五歳から始まりますと云のはインフアント、クラスと云ふ日本の幼稚園に似たやうなものが一學年の下に附いて居りますので、五歳から義務教育を課して居るといふ譯であります。亞米利加にも二三年引續いて議會に出て居ります一つの法律案があります、これはスミスといふ人とタウナーといふ二人の議員が提出して居りましたので、スミス、タウナー法案と言はれて居りました。が、今年の議會にはスターリング、タウナーヒルと名は變つて居りますけれども、内容は大抵同じものであります。但しそれが提出せらるゝ毎に議論が起りますので、内容に多少づゝ修正せられて居ります。北米合衆國は、從來、文部省なるものはなくて、教育は各洲の仕事であつたのであります。所がタウナー法案によると、中央政府の中に文部省を設けて教育行政には直接の關係

なくたゞ調査機關ではあるけれどもそれに毎年一億弗の豫算を與へて、その一億弗の金をば、體育の奨励、普通教育の徹底、有力なる教員の養成の爲めに各州に分配して補助をしようとするのであります。その補助金を受ける條件としては、満十四歳までの義務教育を勵行することゝ云ふ條件が入つて居ります。若しそれが實行せられるならば、アメリカの義務教育も延長せられることになるのであります。亞米利加は從來洲に依つて區々になつて居りまして、或處では最早八學年まで行つて居る所もあるけれども、平均しますれば、そこまで往つてゐなかつたのであります。それから、獨逸の新憲法の中に規定してあります所にガープテン、アウスレーゼと云ふ問題があります。それは俊才の爲めには公の費用を以て中等以上の教育をさせると云ふことであります。すゞこの國でも俊才であつて學資が足りない爲めに中等高等の教育を受けることの出来ない者が澤山にあるが、さう云ふやうな者を選び出して、公の費用を以て教育すると云ふ事でありませぬ。この考は他の國にも入つて居ります。例へば佛蘭西に於ても矢張り此頃頻りにこの運動が起つて居るのであります。亦亞米利加に於てもさう云ふことが出来るならばやつて見たいと云ふやうな希望が彼方此方に發表せられて居ります。さう云ふやうな種々の問題がたくさんありまして、教育上の機會均等と云ふことを徹底致しまして、而かもその内容を充實するといふ上から見まして

も、尙ほ吾々の考へなければならぬ問題が澤山あると思ひます。公共の資金を以て俊才を教育すると云ふやうな事は暫く別問題と致しまして、手近い所で、吾々が現在やつて居ります教育其のものを今一層十分にその効果を發揮するやうにする方法を考へて見なければならぬと思ふのであります。

其他吾々としていろいろ考ふべき問題があると思ふのであります。明治五年に於て現はれられた所の制度を見ますと、其中には矢張り在來の我國の教育の事情と云ふやうな事を參酌せられてあるのを見受けます。全く外國の主義に倣つた譯ではない。併かしながら大體に於ては、矢張り外國風の教育が非常に多くは入つて居るのであります。制度が改まつて俄かに新式の教育をやらうと云ふ際でありますから、我國では如何なる點に最も注意しなければならないかと云ふことは、十分明かになつて居なかつた爲めであると思ひます。其後種々の問題が起つて來た、殊に德育の根本問題として、國民道徳を以て基礎としなければならぬと云ふやうな事がだん／＼明瞭に考へられる事になつて、教育勅語などが發布されたのであります。私はその國民道徳を以て基礎とすると云ふことは、それはもつ既に確定したものと致しまして、尙ほ少し違つた方面からして

我國の教育に於て、如何なる點に注意しなければならないかと云ふことを述べて見たいと思ひます。其の一ツとして考へます事は、國民の精神の働き方の上に於て、必要的に考察致しまして、何か特別に注意しなければならないものがありはしないかと云ふ事でありませう。さう云ふ風に考へて見ますと、私は我國の精神の働き方の上に一ツの大きな弱點のあることを見免すことが出來ないのであります。それは何であるかと云ふと、直覺的の傾向が餘り著しいと云ふことであります。従つて總ての判断が感情本位になりたがると云ふ事でありませう。私はこゝに直覺と申しましたが、その直覺の意味を十分に明瞭にして置くことが必要である、直覺といふ言葉はいろいろの意味に使はれて居ます。或場合に、自分に最も直接であつて之れを疑ふことの出來ないやうな真理と云ふやうなものを捉へて、之れを直覺と名付けることがあります。是れは哲學者がよく使ふところの直覺であります。デカルトの所謂コギト エルゴスムと云ふのもさう云ふ意味に於ても一ツの直覺と云ふことであります。最近には佛蘭西のベルグソンに於て唱へられた所の直覺もさう云ふ意味であります。それから教育學上に於て、教授法上に於て直觀式など云ふことを申します場合には、物を教へるに言葉に訴へてやらないで本人の推定に訴へると云ふ事でありませう。或は再現觀念を基礎として物を教へないで、直接の感覺を通じて觀察されると云ふ意味であ

ります。私の申します所の直覺と云ふのは、其の何れでもないであります。餘り早く通り過ぎると云ふ事であります。結局その觀念の聯合の経過が餘り迅速であります爲めに、十分之れを制御して行くことが出来ない、調節することが出来ないやうな傾向を指して言ふのであります。急に人が此處に這入つて來ました時に、何か吉報を齎して來たか、或は凶報を齎して來たかと云ふことは話を聴かない内に所ぐその顔付を見れば、これは何か芽出ない事を知らせに來たのであるか、何か不吉な事を訴へた來たのであるかと云ふことは判る、其人の顔付なり、肩の様子なり、足の運び工合なりを見て判ります。それはどう云ふ風にして吾々は知るのであるかと申しますと、困つた時にはどう云ふ顔、喜んだ時にはどう云ふ顔をするかと云ふことは、平日の經驗に依つて吾々は能く知つて居ります。その平日の經驗に依つて、人は喜んだ時にはどう云ふ姿勢で、どう云ふ歩調で、どう云ふ顔付をするものであるかと云ふことを知つて居る、その知識がその場合には前提となつて居るのであります、或人が這入つて來た、その人の顔付なり、姿勢なり、足の運び工合と云ふことが、前提となつて、吾々はこの人は其萎れたやうな顔付をして這入つて來たからは何か悲しい事があるに相違ないと、さう云ふ風に考へる、それが結論として現はれて來るのであります。けれどもその働と云ふものは、一瞬間に起るのでありまして、非常に迅速であ

る。それでありますから、大前提、小前提、結論と云ふやうなものは、吾々の意識に明瞭に現はれて來ない、即ち意識せられない、或は半ば意識的に行はれた一種の推論であります。斯くの如き推論に依つて、判断すると云ふことが多い、吾々日本人にはそれが非常に多いのであります。よく理由を聞いて先の先まで問詰めた上に判断すると云ふことが少なくて、人の話を半分聞いて直ぐ判断すると云ふやうな事が非常に多い。さうなりますと、其の時々の自分の氣分に依つて支配せらるゝことが多くなつて參ります。それが我國の人の長所であり又短所であると私は思ひます、ツヒ先頃のことでありましたが、源氏物語の講義を只今やつて居ります國文學の泰斗三矢重松君が「皇國」といふ神職會の雜誌に、我國民は直覺的であると云ふことを、先生の廣く知つて居られる所の中古の國文學を基礎として論せられて居るのを見ましたが、私はその結論は正しいものと思つて居ます。この理窟に訴へないで其の時々の感情に委せて判断をすると云ふことは我國民の癖である。三矢君は理窟っぽく彼是言ふのは外國人の癖であつて、理窟がなくしてスラツと即座に事を運ぶのは日本人の長所であると言はれましたが、成る程それは一面から見ると長所とも言はれませう。その爲めに非常に機敏な、外國の人に出來ないやうな働を致します、代りに、それと同時にまた吾々は屢々誤つた處置を致します。それで私は今後の日本人としては、そんなに

氣が早く廻るよりは、モツと落着いて物を考へる様な修養を與へなければならぬと思ふのであります。何故なれば、私は今日の社會状態を眺めて見まして、此日本人が餘り直覺的である、常に具體的の刺戟に依つて、而かも強烈な、直接の刺戟にのみ依つて動いてゐる、少しも冷靜な理性によつて判斷しない爲に、實際種々の弊害の起つて居たとを看脱することが出来ないのであります。何かの問題が起つて参りますと、事情をばよく探らないで直ぐ興奮致します。此頃は日比谷では屋外集會を許さないで芝公園になりましたが、數年前まではよく日比谷で會合がありました。何かあると直ぐワイ／＼人が集りますが、それが各々その問題に就て事情をよく知つて居るか云ふとさうではない。徹底した自分の意見があるかと云ふとさうではない。只集つて来る、さうして驟雨でも降ると云ふとすつかり解散してしまひまして、翌日は忘れたやうになつて居る。少しも取止めた事がない。何でも其時々氣分に依つて動搖して居るのであります。政黨間の關係の感情本位であるし、學校生徒は勿論先生までも感情本位でありまして、更に理窟の立たない事が多いのであります。即ちすべてが感情本位になつて居つて、冷靜なる思慮に依つて導かれると云ふことが少ない。私は、外來の思想と云ふものが我國民に對して甚だ危険だといふ説を屢々聞きますが、成程過激なる思想も我國に輸入せられた、併かしながら日本人の魂が全體入れ替つてし

まつて、さうして其の過激思想にすつかり同化してしまふと云ふことは、殆どあり得ないこと考へますが、何かの機會に前後の思慮なくどんな事をするかも知れないと云ふ爆發性を帯びて居る國民があるならば、それは非常に危険である。寧ろ危険として恐るべきものは外來思想の内容其のものよりもそれを受けるべき所の國民の精神の働き方、即ち日本國民の爆發性であると思ふのであります。肉彈となつて兵士が塹壕に跳び込むには此の爆發性が有効であるかも知れないが、是は昔の武士の尊重した沈勇ではない。平素泰平時、政治問題なり何なり冷靜に考へる時には、この爆發性は甚有害である。教育は之を矯正しなければならぬ。其れは即ち思考の訓練と云ふことゝ感情の陶冶、此二ツによらなければならぬ。この思考の訓練と感情の陶冶が教育の全體を盡して居るではないか、今更之を説くには及ばないと或は仰しやるかも知れませぬ。さうに違ひありませんが、私はそこには少し考へて見るべき餘地があると思ふのであります。過去の我國の思想の歴史を辿つて見ますと、著しく吾々の目に着く所の一つの癖がある、それは何であるかと云ふと、「何々に擬らへる」といふ言葉が矢鱈に出て來ることである。例へば二ツの物がありませんと云ふと陰陽に配當する、五ツ物があると云ふと五行に配當する、三ツ物があると云ふと天地人に配當する、七ツ物があると云ふと七曜に配當する。或るものに配當してもそれだけでは、

其もの自身に就ての因果關係と云ふものは、少しも説明せられて居ないので、昔の人はそれで納得して大層理窟のあるものだと思へて居たらしい、其が甚宜しくないのであります。

右様の癖は元來我國に固有のものであつたかどうかを考へますと、そこはハッキリ分りませぬが、恐らく固有のものではなからうと思ひます。支那の思想が主に關係して居るのであらうと思ひますが、支那の思想に於いて、殊に漢時代から後の思想に於ては、さう云ふ考へ方が多く現はれて居ります。易などが大體さう云ふ風に出来て居るので、自然界の現象を捉へて、それに譬へて人間社會のことを説いたものであります。其の易の考へ方と云ふものは、後世に支那の學問には非常に深く入つて居る。何でも陰陽、或は五行と云ふやうなものを配當すればそれで理窟が濟むやうに考へて居つた。その思想が日本に這入りましたから、段々さう云ふ風になつて來たのであります。所が今日の學校教育に於ても、知らず識らず昔の型の考へ方に捉へられて居ることを發見致します。最も極端な例を一つ二つ擧げて見ませう。さうなると成程と考へられるかも知れぬ。小學校の生徒の算術を習つて居るのを見るに、先生は、斯ういふ式を立て、斯う計算すれば宜いのだと説明して居られるのであります。子供は其時の理窟をば成程と思ふだけで、そ

の原則を捉へて新しい他の例題に應用すると云ふ方に頭を働かしては居りませぬ。前の問題は斯ういふ風であつた、次に同じやうな關係が出て來て居る、前にこれとこれを加へ、これを掛け割つてやつたのだから、次の問題は同じ關係にあつて數だけ違ふのだが、その數だけ入れ代へてやると大抵間違のない答が出るだらうと、斯ういふ風に子供は考へて居る。そこには原理を捉へて他のものにそれを適用すると云ふ論理的の働きは加はつて居ないので、形の上でそれを現はして來やうとして居る、さう云ふ形に子供の精神がなつて居ることを發見するのであります。それと同じやうなことを種々の教科の上に時々發見せられる、私はさう云ふやうな考へ方がいけないと云ふのである、それを改良することが出来まして、その實物に就て研究を致しまして因果關係を捉へて物を研究するならば、必ずその原理を捉へて、それを色々な所に活用すると云ふことに氣を付けましたならば、昔の考へ方と云ふものは餘程違つて來るだらうと思ひます。さう云ふやうにしてやつて行きますことが、今日では算術であるとか、廣く見まして數學、數學物理化學と云ふやうな自然科學的の教科に於ては、比較的に先づよく行はれて居るのであります。人文に關係した所の教科、即ち修身であるとか、歴史であるとか、或は國語であるとか云ふやうなものになりますと、一々物を論理的に考へて行くと云ふことに稍々遠ざかりまして、頭から感情に

訴へるといふ教育が、寧ろ多く現はれて居ないかと思ふ。さうしますと云ふと、或はそれ等の教科はたゞ冷静に知識として習つた事で満足すべきものでなくして、必ずそこに熱烈なる感情が伴つて来なければならぬものと仰しやるかも知れませぬが、私は茲に於て一言しなければならぬ、感情と理智と云ふものを兩々相對したものと立て、置きまして、違つたものであるが互に助け合ふものだと思ふやうに考へ、或は違つたものであつて時には互に衝突するものであると思ふ風に考へることは廢めなければいけないと思ふのであります。

感情と理智と云ふものゝ根本の性質に就てお話をする時間の餘裕を持ちませぬけれども、謂はゞ斯う云ふ譯のものであらうと思ふ。感情と云ふものは、吾々の精神中に於て動的の要素である。それが吾々に動き働く所の力を與へるのであります。理智と云ひ或は理性と云ふのは、形式的の要素或は原理であります。譬へば、理智と云ふものはそれ自身に動かないレールの如きものである、それから感情も云ふものは其上に汽車を走らせる所の機關車の如き、或は蒸氣の力の如きものである。それで二者が相俟つて常に働いて行くのであります。感情と云ふものを斥けて理性に勝たせるとか云ふやうな譯ではないのである。吾々は理性と云ふものに依つて統制せられつ

つ、感情が動いて行くやうな人格を造り上げなければならぬ。さう云ふ風になつて行きますとそこに始めて道徳上の感情と云ふものが現はれて參りますが、それは矢張り理解に基いた所の信念と云ふものが基礎になつて居なければならぬのであります。今日の教育は、或學科は純粹に理智的に教へて行きますが、それは吾々の道徳的行爲などには直接の關係のない方面で、一方には道徳上の問題なども能く理智に訴へて理解させて成程と思つた所からそれに對してのこの温かき感情の起つて來るといふ風にしないで、頭から斯う云ふものだと云ふ風に教へる、或は無暗に感情に訴へてたゞ興奮させると云ふやうな風に傾いて居りはしないかと思ふのであります。この所を餘程注意しなければならぬと思ふ。それで、私はこの思考の訓練と感情の陶冶と云ふものを兩方よく注意して、さうして我國民のこの性癖と云ふものを矯正して行くことを將來の教育に於てやらなければならぬ。無暗に輕卒な行動をやらない、即ち機敏ではあるけれども失策が多い、或は一時の感情に乗じて突飛な事をやると云ふやうな傾を押へて行くやうにしなければならぬと思ふのであります。

それに就ては色々お話しすべき事もありますが、その問題は姑く別と致しまして、尙ほ他に二つ

の大きな問題が残つて居ると思ひます、其一つは我國の學校の課程乃至實際の教授法のやり方を尙ほ一層社會の實際生活に近づけて行かなければならぬと云ふ事でありませう。それにはまた色々お話すべき事もありますが、今日はたゞ問題としてそこに擧げて置きます。尙ほそれに加ふるに一の問題があります。それは吾々が非常に教育に努力して居りますに拘らず、教育の効果と云ふものが兎角減殺せられて參りますのは何處に原因があるか、斯う云ふことを一つ考へて見たい、日本の學校でやつて居ります學科の内容と、同じ年齢の者に對して外國でやつて居ります學科の内容を比べて見ますと、我國の方が著しく幼稚であります。それはもう明瞭なる事實であります。其原因が何處に存在して居るかと云ふとそれは今日の國語國字の不整頓と云ふことが最大原因を成して居るのであります。國語國字の不整頓の状態は吾々が讀書力を養ふことの爲めに、諸外國の子供が全く知らない澤山の苦心をしなければならぬ、殊に漢字と云ふものは非常に難かし、さうして、其爲めに大いに惱まされて居る。それに就ても色々の問題がありますが、最も簡單にその二つを比較して行つて見やうと思ひます。一言に申しますと、諸外國のアルファベットを使つて居ります國の子供は、耳に聞いて分る所ならば同じことが書物に書いてあります場合に讀むことが出来ます。日本では耳に聞いては分りますが、書物に書いては知らない字が書いてありま

すやら分らない。それが爲めの學校の教授に於て著しい差違が起りました。即ち諸外國の國語の時間は別問題と致しまして、他の理科とか、算術とか、或は地理とか、歴史とか云ふやうな教科に於ては、先生が其の事に就て問答をしたり何か致しまして、さうして其の内容がよく分りましたら、それで十分であります。何故なれば教科書は子供が開いて見れば讀んで字の如く讀まれますから、教科書の讀み方と云ふものは別にやらないでも宜い。我國の教育では、算術であらうが理科であらうが、或は歴史であらうが、地理であらうが、其の内容に就て十分に説明を與へました後に、必ず教科書の讀み方と云ふものが附いて參ります。それだけでも如何に我國の教育者が無駄の骨折をしなければならぬかと云ふことがお分りになるのであらうと思ひます。これは非常に大問題でありまして、一朝一夕には解決を遂げることは出来ないのでありますが、兎に角この不便をどうにかして切抜けなければ、我國の教育の効果と云ふものは十分に擧つて來ないと云ふことを私は痛切に感ずるのであります。

前置が長くなりまして、本題の教育の効果増進と云ふことに就て十分お話することの出来なかつたやうな憾がありますが、兎に角私のお話しようと思ふて居りましたのは右のやうな事であり

ます。明治の五年に於て學制が立てられたと云ふ事は、非常に有難い、而かも今日の時勢に照して考へると云ふと尙ほ一層有難い事でありませう。其後教育もだんぐり進歩して參るし、將來は尙ほ一層の進歩を圖つて行かなければならぬ。其の進歩を圖つて行く上に於て考ふべき重大問題は、何であらうか、それも色々ありませうが、その中に於て、私は、我國民のこの精神の働き方と云ふものを捉へて、その癖を見て適切なる教育をしようと云ふ事がその一つであると思ふ。その癖とは即ち直覺的である。さうして感情本位に流れ易い、冷靜なる思考と云ふものが動もすれば行はれない、そこに一つの弱點を持つて居る。それを矯正することを將來の教育に於て餘程工夫をしなければならぬと思ふのであります。それから學校の教育の内容が實際の生活に密接に連絡を保つて行かなければならない。もう一つは國語國字の整理。この三つの事を、教育の効果増集の爲めには是非吾々は考へて行かなければならないと思ふのであります。(終)

教育の新傾向

小林 澄 兄述

教育の新傾向は世界到る處に現はれてゐる、我國にも現はれてゐるといふことは諸君が等しく認めることと思ふ。然らば何が教育の新傾向であるかと反省して見ると、必ずしも明瞭に思ひ浮べることが出来ない。教育の新傾向といふことに就て諸學者は既に著書に雜誌に新聞にそれぞれ意見を發表してゐる。歐米に於ける教育の形式内容を紹介批判してゐる人もあれば、「八大教育主張」なるものを主張してゐる八人の名家もある。新學制頒布記念に關聯していろいろな論議が現はれて、我國の教育の形式内容は大に進歩したが、なほ不十分なものが甚だ多いといふことに一致し、何等かの新工夫が必要と見られてゐる。さう見られてゐる中に教育の新傾向を明かに主張したり暗に諷したりしてゐる人がある。が、私の知る限りでは最近澤柳博士一行の歸朝土産として

同博士が處々でされたお話「戦後の教育」と題する一文と小西博士が大阪朝日新聞紙上に掲げられた「現代の歐米教育」といふ一文とは、孰れも簡單なものであるが、注目に價するものである。兩博士始め一行に加はられた他の諸氏もまた、もつと詳細な視察記を發表されることは期して待つべきであるが、只今までのところ小西博士の右の一文の如きは非常に中味のあるものである。疾くにお読みの方もあらうと思ふが、まだお読みにならない方は、東京の文化書房といふ本屋でパンフレットにして發賣してゐるから早速お買ひになつてお読みになることをお勧めする。このパンフレットの内容目次は(一)緒言(二)文教に關する經費(三)教育普及の現状といふので、文教に關する經費に就ては英米獨佛の事情を述べ、我國がこの點で及びもつかないことを嘆いてをられる。教育普及の現状に於ては第一に中等教育の普及、第二に大人教育の普及といふことから見て、歐米諸國が恐らく我國爲政家の夢想だもなし得ないやうな多大な努力をしてゐることを紹介してある。このパンフレットを通讀しただけでも、歐米諸國の教育の新傾向——主として形式方面の新傾向といふものが一目瞭然と解るのである。

ところが私はこのパンフレットに述べてある形式方面の新傾向の中にも内容方面の新傾向が暗示されてゐると思ふ。例へば(一)教育はどこまでも尊重すべき價値と意義とを有するものである

ふことが、教育専門家の意見たるにとどまらずに一般に是認されて來たことを示してゐる。これは教育に對する一般的理解の進歩である。それから(二)教育は實際の効果のあるものであるといふことが明かに信せられて來た。これは教育の果に對する理解の進歩である。次に(三)教育は何人にも或る程度まで普及されねばならぬといふ考が確立して來た。これは教育に對するデモクラシイ的理解の進歩である。この教育に對するデモクラシイ的理解の進歩といふことは、何人も或る程度まで教育を受けなければならぬ、また受ける權利を有つてゐるといふ理解の進歩である。何人も或る程度まで教育を受けて、何人も單なる動物的生活から人間的生活へ向上して行くべき義務があり、また向上して行くことを要求するだけの權利があるといふ理解の進歩である。單なる動物的生活から離れて人間的生活に向上するといふことはいろいろに解し得るのであるが、それは要するに人間として知識的にも情意的にも道德的にも完全になつて行き得る力を有すること以外ならない。而もその力は個人的に修養されるのみならず、文化のために役立ち得る力になければならない。かういふ力を養ふには教育が必要である、さういふ必要のある教育は何人もこれを受けなければならぬ、受ける權利があるといふことが一般に理解されて來たのである。私はこの意味に於て教育に對するデモクラシイ的理解の進歩が見られると思ふ。して見れば今日

歐米諸國に於ける教育の形式方面の新傾向といふ中には、立派な教育の目的論までが暗示されてゐるのである。教育に對するデモクラシイ的理解の進歩といふことはやがて教育の目的に對する理解の進歩といふことを意味するからである。

このバンフレットに就ての私の所感はこれだけである。これは併し何といつても主として教育の形式方面の新傾向を一目瞭然たらしめたものである。故に教育の内容方面、即ち教育の目的論であるとか、方法論であるとかの新傾向は、別の材料によつて研究して行かねばならない。

そこで私は教育の目的論としての新傾向を述べることは後廻しとし、教育の意義、教育の方法等に就て今日果して新傾向のあるや否やを確かめて見たい。私の見るところでは、確にそれがあると思ふ。アメリカのウオーター・バアンズといふ人も教育の新傾向として七つの要素を算へてゐる。私はこの意見を悉く賛する譯ではないが、此人はかういつてゐる。教育の新傾向を促がしたものは第一に新心理學である。新心理學はどこまでも實驗的に精神の要素を研究するのであつて、舊心理學が實驗的方法を輕んじていつもアブリオリに考へて先驗的説明しかなし得なかつたのであるが、それとは全く異つた新心理學の生れたといふことは、教育の新傾向を促がし教育の新傾向

を特色づけることになつたのである。何故かといへば、(1)新心理學は精神が肉體に依存する關係の密接なことを認めて、凡ての學習は直接關係に肉體を通してなされるといふことを明かにするに至つた。また新心理學は(2)個性の發見に對して努力した。それから新心理學は(3)精神がばらばらな要素から成立たすして凡ての要素が機能的に關係してゐることを證明することが出来た。なほまた(4)新心理學は統覺といふことが各個人の場合に如何に重要な中心を占めるかを實證することが出来た。かくして教育は肉體の活動に注意せねばならぬとか、個性を尊重しなければならぬとか、精神の凡ての要素が機能的に全體的に活動するやうに教授法學習法を改めねばならぬとか、主觀的の統覺作用によつて教授學習の過程がなされねばならぬとかいふやうな教育の方法論としての新傾向が生れるに至つたのである。私はこの第一の新傾向といふものには一部分賛成し一部分反對すべきであると思ふ。成るほど精神と肉體とは密接な關係がある、そこに疑ひはない。個性、機能、統覺といふやうなことの大切なことと十分認め得る。けれども吾々の先驗的考察を全然排斥して了ふやうな意見は論據が薄弱でなければならぬであらう。吾々の精神を實驗的方法によつてのみでは到底いひ現はせない奥底を有つてゐる。心理的にのみ考へては考へ盡せない

方を有つてゐる。先驗的考察によらずしては吾々の精神の形式内容の十分な理解をなし難い。かくしてナトルプの如きは心理學を論理學によつて基礎づけようとしてゐるのである。個性機能、統覺といふやうなことが、實驗的新心理學によつて説明され得たかの如くに考へるのは潜越極まることである。いはゆる新心理學はそれ等のことを叙述することは出来ても確實に説明することは不可能でなければならぬ。何となれば個性といふことにも意志の力を考へねばならぬ、機能にしても統覺にしても、孰れも意志の力を豫想しなければならぬ、その意志の力は何から生れるか。これが迂濶には定められない問題である。蓋し意志の力ほど内面的なものはないので、またその意志の力に伴ふ感情の力も單に外部的に付度することの出来ない根柢を有つてゐる。これ等は人格の内面性から湧き出づる力と見ねばならぬ。この人格の内面性に至つては實驗的方法によつてのみさぐり得ない深味に富んでゐる。従つて個性であるとか、機能であるとか、統覺であるとかが、いはゆる新心理學によつてのみ發見された如く考へてはならない筈である。私の見るところでは、精神と肉體との關係問題を始めとし、個性、機能、統覺等の問題は實驗的新心理學の取扱ふべきものであると同時に、先驗的考察の對象たるべきものである。否、先驗的考察によつてのみ十分な説明が出来るので實驗的新心理學によつてはこれはかくかくである

といふ叙述の説明しかなし能はぬものとすらいひたいのである。それは兎に角として、精神と肉體との密接な關係問題、個性、機能、統覺等の問題に注意するやうになつたのは教育の新傾向の一として看做すに足ることは事實である。次にウォーター・パアンズ氏は第二の新傾向として、知能検査及び教育測定といふことはいはゆる新心理學によつて教育上有要に實行されることを述べてゐる。これはその通りで、この意味の新傾向は學生の試験制度を改める上にも、教師の成績を測定する上にも大に利用すべきことで、我國に於ても矢筈しく論せられるやうになつてゐる。もはや論じてのみならず着々實行しなければならぬけれども、ただ我國にふさはしいテスト標準といふものが碌々作られてゐないのは残念のことである。第三の新傾向は、新心理學の副産物としての新哲學である。パアンズ氏はいつてゐる。新哲學といふのは、教育は即ち生活であるといふ意見に外ならない。この意見によれば、教育は或る意味では生活準備である、生活準備ではあるが、兒童が生活に參與しながらの準備でなければならぬといふのである。生物學的にいへば人は動物の如く、その能力が獨り立ちの出来ることに於て一人前となり得るであるが、心的發達といふことからいふと、幼兒は幼兒として少年は少年として青年は青年として、それぞれの生活にたづさはらなければ一人前の人となることは出来ない。即ち幼兒の生活、少年の生活、青年の

生活それぞれの生活に意義と価値とがある。幼児の生活をそのまま尊重し、少年の生活をその儘尊重して、その生活を完全ならしめるところに、幼児の教育もあれば少年の教育もある。従て幼児の教育は幼児の生活であり、少年の教育は少年の生活である、かくして教育は即ち生活だといふことがいはれて来るのである。けれども一方から見れば、少青年は大人の生活を將來に於て營まんとすの目當てを以て生活もし学習もするのであるから、教育は生活の準備であるといはれないことはない、けれども彼等めいめいの生活に參與しながらの一層高い生活への準備を教育と見るのが當然だといふのである。パアンズ氏にいはせると、この意見は新心理學の所産たる新哲學であるのだが、それは考へものと思ふ。一體生活そのものが教育でないことはいふまでもない。生活を教育的に改造して行くときに、その生活は教育であるといはなければならぬ。ところがこの生活を教育的に改造するといふことが、簡単に説明し盡されることではない。それは教育とは何かの問題から論じなければならぬ。今日ここで詳しくこの問題を論じようとは思はないが、教育とは要するに、ありのままの動物的生活から多少づつ理性的生活に入つて行くことである。全くの自律的生活に入り得ないのが普通の状態であるが、これは本能的無法則の生活から他律的生活に入るといはれる、この他律的生活から全くの自律的生活に入り得るとき教育は終ると

になる。ロオゼンクランツのいふやうな「自己の解放」の出来る時期が到着すれば教育の終止期が来たことになる。さういふ自己の解放の出来る時期へと開展して行く生活が教育的生活であるといはねばならない。ところがかかる自覺に導くためには吾々に自己活動的な獨創的な能力を豫想しなければならぬ。いひ換れば意志の働き、理性意志の働きの存することを必要とする。かう見て来ると、吾々の生活に立派な規範の立てられることが解る。立派な規範といふものは單なる實驗的心理學などによつては到底立てられるものではない。どうしても先驗的に立てられるの外はないのである。かういふ意味での教育と生活とは相等的なことになる。教育は即ち生活であるといふことが出来る。かくして教育は即ち生活であるといふ考は哲學の生むところのものであるが、その哲學が新心理學の所産たる新哲學であるといふのは當らない。従つて教育は即ち生活であるとの考は先驗的哲學によらなければ正當に成立たないことになるのである。けれども兎に角、教育の新傾向として教育は即ち生活であるといふ考の大に唱道されつつあることは疑ひ得ない。かういふ事情から兒童の生活が教育上甚だ尊重されることになつたのである。パアンズ氏は第四の新傾向として新社會學の考が附加へられたといつてゐる。新社會學といふのは一部分新心理學、新哲學からも起つたものであるが、一部分はデモクラシーに對する要求から起つたも

のである。それはどういふ意味かといふに、今日以後唯一の社會はデモクラシイ的社會でなければならぬが、かくの如き社會の實現するためには、教育の普及といふこと、廣さからいつても深さからいつても或る程度までは何人も教育を受けなければならぬといふことが新社會學によつて認められた。従つて教育に新生面が開かれると看做されるのである。これ等四つの新傾向——新心理學、新測定法、新哲學、新社會學によつて教育の上に齎した新傾向は、更に新學校組織、新學科課程、新教授法を生むに至つたと見られるのである。新學校組織とは、國民の何人たりともいづれ何かの學校に於て何かの教育を受け得るやうに、學校の新組織を立てることである、アメリカではその方針で進んでゐるといふのである。この新傾向はひとりアメリカのみでなく、英獨佛到る所に見られるものである。新學科課程といふのは従來の如く人文的に偏したり實科的に偏したりすることなく、初等中等の教育に於て如何なる兒童學生にも適當するやうなものを配置する心掛けである。これまではあまりに書物を好む學生 (Bookminded) に適する學科を多くしたり、或は活動を好む學生 (Motor-minded) に適する學科を少くして片手落ちであつたがこれからはそんなことのないやうにしたいものである。これも甚だしい考へで誰も反對するものではない。最後に新教授法であるが、これは正確にいへば新學習法である。學習動機の喚起であると

か、劇化の方法であるとか、社會化の方法であるとか、構案教授法であるとか、近くはドルトン法であるとかは新學習法に屬すべきものである。バアンズ氏はかくの如く算へて教育の新傾向として七つに總括してゐる。今一度繰返していへば、新心理學、新測定法、新哲學、新社會學等から起つた教育の四つの新傾向の外に、新學校組織、新學科課程、新教授法の三つを加へて、都合七つになるといふのである。

ところがつひこのごろ私の手許に届いた書物に、ロンドン大學教授アダムス氏の新著「教育實際上に於ける近時の進歩」といふのがある。これによると第一章は「新教授法の根柢」と題され、第二章は兒童と學校と世界との三様の關係を論じ、第三章は知能検査と教育測定とを批判し、第四章は教育の效果に就て述べ、第五章は學級の心理のことを調べ、第六章は學級教授の研究を説いてゐて、これまでは何の奇もないが、第七章に於てドルトン法のことを論評し、第八章に於てゲーリー、システムの巧過を論じ、第九章に於て遊戯尊重説を、第十章に於て構案教授法を、第十一章に於て教育上の心理的分拆といふことを、第十二章に於て自由訓練法のことを述べて、これを以て終としてゐる。アダムス教授の考へでは、これ等の問題は凡て教育の殊に教育の方法の新

傾向と看做すべきものである。教授は前のバアンズ氏の如く新傾向の生れるに至つた理由に就て明かに個條的詮索をしてゐるのではないが、頗る穩當な、それでゐて透徹した意見を述べてゐる。教授の見るところでは、(1)イギリスの小學校の先生は教育教授の方法といふことに詳しく、中等學校以上の先生は専門的學科に就て得意である。それで兩者は各々領域を異にしてゐるところから、互に輕蔑し合ふ風がある。一方は君等は方法を知らないだらうといひ、他方は君等はよろづやであるから専門的知識がないだらうといつてさげすむといふ悪い習慣がある。これは互に改めて缺點を直して行くやうにしなければならぬ。この警告は我國の場合にもびつたり當振りはしないだらうか。次に教授は、(2)イギリスに於ける教育の新傾向といふものも始めは單なる主張にとどまるのもあるが、それが教師によつて實際に適用されない以上は、いつのまにか忘られて了ふ恐れがあるから、教師は進んで自分の共鳴してゐる新傾向を實際にためして見ることも必要であるといつてゐる。かくして多くの教師が多くの新傾向を實施して行くうちには、そこに新傾向の大勢ともいふべきものが現れて、即ち主な潮流だけが目立つて、他のものはいふに足らないものとなるといふ意見である。(3)そこでつらつら現今の新傾向を見るといふと、それ等は表面上いろいろ異なるやうでゐて、その實は非常に共通な要素を有つてゐることが解る。そ

れならば何が共通な要素であるか。教授はその疑問に答へようとする。教授が或時例として用いた言葉に、「教師はジョンにラティン語を教へた」といふのがある。教育の舊傾向はラティン語といふことに力を入れ過ぎたのであつたが、教育の新傾向はジョンに力を入れ過ぎる風がある。最も穩健な考はジョンにもラティン語にも、いひ換へれば兒童にも學科にも同等の力を入れて教授し教育して行くことが肝要であるといふのである。然るにこのジョンに力を入れることの無視されてゐたことは實に久しいもので、一七六二年ルソウの「エミール」が現れ、ベスタロツチ、フロエーベル等の活動以來殆ど絶えてなかつたことであるのに、今日に到つて漸くルソウの主張が是認されんとしてゐる。かくしてスタンレイ・ホール教授は眞先に兒童中心のといふ語を發明したのであつた。Pailoour は即ちバイドは兒童を意味しセントロツクは中心的を意味するのである。此兒童中心的思想は近代ではモンテッソリ女史によつて先づ實行され、最近ではドルトン法によつて最も徹底的に實行されることとなつた。その一方に於て兒童研究が盛んになり、知能検査、教育測定等が大に行はれることとなつた。ところが早くこの兒童中心的思想の缺點を見抜いてフランスの諸學者が全体的教育といふことを唱へるやうになつたのも最近のことである。例へばエルメントラキツスといふ歴史家が「教育とデモクラシー」といふ書物の中で論じてゐることがその

主張である。教師中心といふことも不可であつた、さればとてこの頃のやうに児童中心一點張りでもよくない。今日の學校は教師の一斷片が児童の一斷片に觸れて児童が學科の一斷片を學習するに過ぎないやうな事になつてゐる。よろしく教師と児童と學科との有機的統一活動が行はれねばならない。即ち學科課程は有機的全体として結び付き、教師も児童も教育的統一活動として活動するやうにならねばならない、この意味に於て教育は全体的教育であることを要するとの主張である。ドルトン法なるものは前述の通り児童中心主義に加擔すると共に實はこの全体的教育を行はうとするのがその衷心からの本意であることに注意しなければならぬ。私もこの全体的教育の主張は矢張り新傾向であると認めると同時に頗る穩健な考であると思ふ、この意味に於てドルトン法のやり口にはかなり賛成する一人である。次に(4)教育の新傾向として他の根本的特色と思はれるのは、教育の社會化といふことである。これには二様の意味がある。一は児童學生が實際の社會に直接ブツかつて自己を教育するといふことで、他の一は學校内に社會の縮圖を作つて仲間同士に社會的關係を打立てながら協同活動をして學習して行かうとするのである。學校の社會化とは主としてこの後者を意味する。これはアメリカに起つた新傾向であるが、ヨオロッパにも傳はりつつあるものである。さうしてこの社會化の主張は教育の生活化であるとか教育即生

活論であるとかに密接に關係してゐる。何となれば教師児童間に社會的關係が打立てられて協同活動をするといふこと自身が生活に見られるからである。故に教育の社會化は教育の生活化であるといつても大した誤りはない。今日の教育の新傾向は孰れもかかる社會化の特色を有つてゐる。なほまた(5)教育の仕事化といふことも以上の社會化、生活化といふことに直ちに結び付く思想である。Work-educationといはれ、Arbeitspädagogikと稱せられるものは、これを具體的にいへば手工其他の活動作業を中心として教授學習を實行して行かうとするので、この風潮はアメリカの構案教授法、ドイツの作業教授法、國民教育等の現に實行しつつあることに屬する。またイギリスやフランスのポリテクニクの運動も然りである。將來大にこの方面に向つて進轉するであらうと思はれる。兎に角この教育の仕事化といふことが教育の社會化、教育の生活化といふことと深い因縁のあることは多言を要しないところである。最近のドルトン法といふのは少くとも教育の社會化、生活化に向つて突進しつつあるので、やがて構案教授法とも提携するとは今一步といふところまで行つてゐる。して見ればドルトン法はまた教育の仕事化をも實行しようとするものと考へられる。アダムス教授のいふところはこれで盡きてゐる譯ではない。教育の新傾向ともいふべきものは大体に於てこの通りであるといふのである。

そこで私の考へるところでは、教育の方法としての構案教授法とドルトン法とは最近に於ける最も重要な産物であると思はれる。この二つは教授法であると共に學習法である。構案教授法のこととは既に熟知されてゐる方が多からうと思ふから、ドルトン法に就て、それから探るべき點と警戒すべき點とを擧げて見ようと思ふ。これをするにはアダムス教授の意見にも徴するが、私自身の見解をも添へたいと思ふ。ドルトン法の要點は大正十一年十月の「三田評論」に述べた通りであるから、ここには略して置く。兎に角にこのごろではイギリスにドルトン協會なるものが設立された。この協會の目的はドルトン法に就ての一層の研究をすると共に同志の學校なり教師なりを指導してこの法の普及を計らうとするにある。協會の秘書がアダムス教授へ宛てた説明書は簡短ながら最もよく要領を得てゐるから、ここにこれを譯出して見る。

『ドルトン法は八歳から十八歳までの兒童學生の學校作業に適用し得る新教育組織計畫である。それは子供に自由を與へようとする、學校を一社會たらしめようとする。その社會では分團的の協同活動をなし得るのである。それは仕事の全問題に近づくのに兒童の見地からして行く、それをして行くのに兒童に教育に對する責任と教育に於ける興味とをこれまで以上に多く課し與へよ

うする。……學級の教室は實驗室となつて特殊の學科に關係のある凡ての書物と道具とを蒐集して置く。……兒童は今のところ便宜上學年別に別けられてゐる。』

アダムス教授はかかるドルトン法を以てドイツ學生の好んでする自由學習「*Unfreiheit*」に比すべきものとする。眞に然りて、教育の新傾向とも見るべきものは悉く兒童學生の自由學習を獎勵する。獎勵しなければならぬとする。ところが英語で自由學習とか自由教育とかいふ適當な語が見出されてゐない英語で「*Preschool*」とか「*Liberal education*」とかいふとは全く異なる意味で用ゐられてゐる。即ち前者は無月謝の學校を意味し後者は實科的教育に對する人文的教育の意味である。フランス語にも新教育「*éducation nouvelle*」といふ語は明に使はれてゐるが、自由學習とか自由教育とかいふ意味の成語がない。ただ獨逸語では今のレンプライハイトといふ語の外に自由教育「*Freiheitspädagogik*」といふ語を用ゐる人がある。之はエレン・カイやモンテッソリの自由教育、自由學習の主張に當儀のられてゐる。語の上ではかくの如く自由學習とか自由教育とかが一般的の成語となり得ないでゐるが、現今の教育の新傾向といふものは自由學習といふことを獎勵しないのは一つもないといつていい。かくしてドルトン法も自由尊重するところに成立つのである。それと同時にドルトン法の主張のうち最も重要なもの一つは協同といふことである、自由以外に協

同といふことを大に奨励する、これは教育の社會化を志してゐる證據である。さうしてこの協同といふことには構案教授法に優るとも劣らぬほどの力説點を置いてゐる。これは甚だしいことと思ふ。

さてかかるドルトン法を誰しも直ちに歓迎しないとは明かである。(1)第一に両親や政府といふものは教育の新傾向なるものには先づ食はず嫌ひの態度を示すものである。これまでの惰性的慣習と意見とで満足してゐるものである。(2)第二に學級教授を愛する多數の教師から反對を招く。學級の一齊教授は無上に楽しく思はれるものである。分團的學習に變ずるドルトン法がこれ等の人々から受けられないのは當然である。(3)第三には積極的の反對として學級教授の大切なことを述べるものがある。單に學習のみをさせて教授と刺戟とを怠ることは大へんな危険を伴ふものである。ところがこの教授や刺戟は學級教授に於て與へ易いのであるから、學級教授も必要であるとなすのである。この第三の反對には儘に一理がある。従つて前に述べたフランスの全体的教育の思想をも顧慮する必要のあることはいふまでもない。ドルトン法にもいろいろの種類があるが、中には單なる學習のみでなしに、學級教授といふことに意を注いでゐるものがあるのはいいことと思はれる。

以上三つの反對があるにも拘らずドルトン法は大体に於て滞りなく教育の新傾向たるの途を辿つて行き得られるやうである。もしこれが構案教授法と結び付くに至らば教育の方法の新傾向としては最も注意すべきものと思はれる。そこでこれを或る學校若くは或る學級で實施して行くとして危険に陥る恐れのある二三のことに就て考へて見たい。(1)第一に警戒を要することは、幾ら新しい計畫であつても、それがイズムになるといふと、必ず固定して了ふ。二進も三進も行かぬ場合があるといふのである。例へばヘルバルトの五段階説の如きも初めは生氣あるものであつたが、後にはイギリスに於て「題目と内容と方法」といふやうに凝固停滞して了つた如きである。もし子供に自由を許すがいいとして自由ならしめねば置かぬやうな強制的態度を取るやうなことがあれば、弊害續出すべきである。次に(2)起る危険は、かく組織されたドルトン法のために、これによつて各教師の自由を束縛して了ふが如きことが起るかも知れぬといふ點である。これではまた先生に對して自由活動を與へなくなるのであつて、ここにおもしろからぬ弊害のあるはやむを得ないことである。(3)第三に注意すべきことは、ドルトン法はあまり早くから兒童に重い責任を課せ過ぎる恐れがあるといふ點である。尤も兒童によつてはどういふ學習法によるも常に重い責任の課せられたやうに感ずるのである。ドルトン法の趣意は、重い責任を直ちに感ず

るやうな児童をしてさう感せしめないやうにするにある、といふことである。願はくばその心掛を以て進んで行つて貰ひたいものである。(十) 第四に注意すべきことは、ドルトン法によると、児童が人から仕事を課せられてするといふよりも、自分勝手に仕事を選ぶといふ風を習ふことになるのであるが、世間といふものはさう自分勝手に仕事を選べないやうに出来てゐる。そこでドルトン法が児童に及ぼすべき道徳的影響はどうかといふ問題が起る。これに對してドルトン法實施者の一人であるバセット女史は、然らば從來の時間割制度によつて學んで行く児童はあらゆるものが義務の感によつてなされ、訓練の感によつてなされるといふ理想を抱くであらうかと反問してゐる。この女史の反問にも一理がある。併しいつも自由選擇のみが世間の常態でないといふことをも児童に了解させる必要があることを知らねばならない。アダムス教授はかやうに述べて来て、更にドルトン法とモンテッソリ法との比較を論じ、ドルトン法實施者の總じて樂觀的なことを説き、(五)最後に樂觀的な實施者とても、教科書の問題には大分頭を悩ましてゐることを明かにしてゐる。何となれば從來の教科書はいづれかといへば學科本位であり教師本位であるがドルトン法の教科書はどうしても児童本位のものであらねばならない。從來の教科書はいはゞ論理的に書かれたものであるが、ドルトン法の教科書は心理的に書かれる必要がある。

いび換へればドルトン法の見地から書かれた教科書といふものが必要になつて来る。ドルトン法實施者はこの新教科書の編纂に全力を注ぐだらうと考へられる、またさうしなければならぬことである。教科書のみならず参考書に就ても大に考究すべきであらう。かうアダムス教授は結論で、ドルトン法の迫るべき途を警戒しながらも祝福してゐるのである。

私は以上小西博士の歐米土産話、バアンズ氏の意見、アダムス教授の批判に就て説述して来た。孰れを見ても教育の新傾向——それは形式上に於ても内容上に於ても——が確かに存することを知り得た。教育の方法としてはドルトン法と構案教授法とが最も注目すべきものであることも知り得た。なほこれ等の點に關して、これまで私の發表した論文の中でも種々異つた方面から教育の新傾向の如何なるものかを述べて置いたのであるから、以上は成るべくそれと重複しないやうにして同じ問題を取扱つて来たのである。教育の目的方面での新傾向に就ては、以上の諸家はあまり多く觸れてゐない。ところが教育の目的方面での新傾向といふものも、明かに認め得ることである。バアンズ氏の擧げた新心理學であるとか新測定法であるとかは教育の目的論には殆ど無關係であるが、新社會學、新哲學となるとかなり關係を有つて来る。即ち新社會學、新哲學等に

よつてデモクラシーの意義と價值とが説かれ、教育の社會化、教育の生活化といふことが論せられ、従つて人は新社會教育を受けなければならないとか、人は活動的教育を受けなければならないとかいふやうに、教育の目的論にまで觸れて來ないではゐられない。けれどもこれ等の新社會學、新哲學の如きは教育の目的論を経験論的立場から見えてゐるので、先驗論的立場から論ずることを敢てしない風がある。新社會學新哲學の代表者とも見られるデュウキ教授の如きも經驗論的立場から一步も出ないといつていい。ところがドイツの新カント學派の代表者とも見られるナトルプ教授の如きは教育の目的をどこまでも先驗論的立場から考へて行かうとするので、同じ社會的教育學活動的教育學を論ずるにしても、其立場は前者とは全く行き方を異にしてゐるのである。この點に於て教育の目的方面での新傾向はドイツ派とアメリカ派との二つに大別されるといつて差支ないのである。併し私はここではこの問題に深く立入らないで置く、また立入る餘裕を有しないのである。

かうして私共が今日教育の新傾向の問題を研究し、教育の實際に従事して行かねばならない。何をするのも人生である。吾々に與へられた教職といふものは割に合はないものである、もつと世

間的に暢氣な、實入りのある職業はないか知らと思つて、吾々の圍周を見渡すといふと、ありさうでゐてなかなかない。此職業をすればと思ふ。一旦教職を止めてやつて見ると、どうも思ふやうには行かないとの方が多い。私の見知つてゐる人で、こないだまでは小學校の校長さんをしてゐて、今は代議士になつて得意な人がある。さういふ人は一寸成功したやうでもある。また自身成功したと思つてゐるかも知れない。校長さんを止めて代議士になり得るやうな人は、校長さんとしては恐らく成功しなかつた人で代議士たるべく適してゐる人であらう。去るものは行かじめよ。けれども吾々残らずがそんな氣を起して見たところで、うまく行くものではない。先づ十中の八九は失敗である。これよりも現在の地位を大切に思つて現在の境遇のうちに眞の生命を見出す工夫を考へた方が、生甲斐があるのではないか。

然らばどうしたらこの教職に眞の生命を見出すことが出来るか。それには先づ第一に人生觀の確立をしなければならぬと思ふ。私はこれまで二三回、公けの席でケツセラールといふ人の人生觀の一部分を述べたことがある。それによると、現代に於ては先づ四つの人生觀が行はれてゐると見られる。(1)は純粹心情文化の理想主義である。(2)は純粹作業文化の現實主義である。(3)は純粹概念文化の合理主義である。(4)は理想主義的、現實主義的、人格文化の活動主義である。

今これ等の一々を詳述する餘裕はないが、(1)の純粹心情文化の理想主義といふのは一種の遁世的理想主義である。フイヒテもいつてゐるやうに「人の幸福は單なる遁世によつては得られない」筈で、吾々にかかる人生觀に賛同し得ないのである。(2)の純粹作業文化の現實主義は、自然主義若くは社會主義に外ならない。自衛を征服し自然を理解し自然に加工してそれより生ずる便益によつて人の幸福を増さうといふのは自然主義の思想であり、社會の秩序を保ち社會の組織制度を改めさへすればといふ方面にのみ注意を向け過ぎて社會の半面である個人の内面性を顧慮しないのは社會主義の思想である。かくしてこの自然主義も社會主義も現實的思想であつて到底吾々を満足するに足らない。(3)の純粹概念文化の理想主義は理想主義たる點で吾々をよろこばせるが、餘りに吾々の内面性に重きを置き過ぎて、内面性の深みを増す所以の現實性を忘れる傾きのある思想であつて、これも十分のものとはいはれない。この理想主義の代表者ともいふべきナトルプも大戰後「社會的理想主義」といふ書物を著して、よほど現實的活動主義を考慮の中に入れてるやうになつた。恰もプラトールがイデーの世界といふものを此世の彼岸に認めてゐたのが再び現實に歸つて此現實の世界にイデーの世界を打立てようとした如く實際的活動を重んずる事によつて理想主義は社會的たるべく社會主義は理想的たるべしといふ意味で、理想と現實との合一

といふことに注意して來た模様がある。(4)の理想主義的、現實主義的人格文化の活動主義といふのは、もとオイケンの主に唱道したものを考へ直して來たもので、純粹概念文化の理想主義もそれをナトルプの代表する限りでは、だんだん此(4)の人生觀に接近しつつあるやにも思はれる。この活動主義は理想と現實との抗爭の間に人格文化を建設して世も人も共に眞の幸福を味はうとするものである。私の思ふところでは、ペスタロッチにしてもフイヒテにしてもフロエーベルにしても、純粹概念文化の理想主義を奉じたといふよりも、理想主義的、現實主義的人格文化の活動主義を奉じた人のやうに思はれる。ペスタロッチの生涯はこれを學べば學ぶほど尊くなる。彼が戦ひ疲れて七十九歳の老齡を提げて元の古巢のノイホーフの寒村に歸つて「人の運命」や「白鳥の歌」を書き、それから二年過ぎて死んだその姿を見るといふと、一生涯努力奮闘を続け、失敗苦惱を重ね、飽くまで單純で純粹であつた巨像として吾々の眼に映するこの人を以つて理想主義的、現實主義的人格文化の活動主義を奉じた人と見るのは頗る當然の事と思ふのである。またフイヒテにしてもさうであつた。彼はいつてゐる。「吾々の幸福は永しへに地上の日常行爲に埋れることから生ずる」と。蓋しかくすることによつて人間の魂の奥底にある自由を開展させて行くことが出來ると彼は考へたのである。彼のかういふ語もある。「現實的に、さうして科學的に働くも

のは經濟上の心配からも免かるべきものである」と。彼れのいつたことを顧みると、孰れも理想主義的活動主義の鼓吹でないものはない。自己活動といふことに人格文化の創造があると考へたのである。それからまたフロエーベルの生涯と思想も慥に理想主義的活動主義である。吾々には先づ「自己一致」といふことがなければならぬといふ、それは自己を凝視して自分自身のうちに完全な集中をするといふことである。さうして自分自身から不純なもの一切を取除いて了ふところの自己活動と創造とをなさねばならぬといふのである。それと同時に「世界一致」といふことを心掛けねばならない。人に社會に自然に總て愛を籠めた歸依をするといふことである。さうして他我を自我のうちに包容して了ふといふことである、これをするにも少からぬ努力を要する。またそれと同時に「神人一致」といふことまでに至らねばならぬといふのである。即ち我は神と同じものといふ考を抱くに至らねばならぬといふのである。これにも非常に努力の必要なことはいふまでもない。併しその努力といふのは自己活動と創造活動とを盛んにして行くより外の方法ではないといふのである。吾々はかゝる人々によつて代表されるこの理想主義的現實主義的人格文化の活動主義によるの外はないと信ずるものである。どうしたら教職に眞の生命を見出し得るか、第一の策は、教育者が積極的任務を自覺するとである。その意味は教育の重要な意味、人の職業と

して教職ほど重要な意義を有するもの少いことを知つて、この教職を果す任務の頼母しきを悟り、これに就ての仕事の興味といふものを、もつともつと増して行くことを心掛けることである。第三の策は教育のことについての研究は勿論人として知つて置かねばならぬ一般的知識を力めて修得するといふことである。小學校の先生でも中等學校の先生でもみな大學程度の教育を受けなければならぬといふ思想は殆ど歐米諸國に於ける有力な主張となつてゐる。例へばプロイセンでは師範學校を廢してそれを大學化せんとさへしてゐる。かくして一般的眞理に通ずることを怠らず心掛けるのである。第四の策は教育者たるものの本質的資格を日常ますます磨いて行くことである。或る學者は本質的資格に次の三つを算へた。即ち(1)は自制といふこと、これは一口にいへばうはつらの感情を押へて理性的に行動するといふことである、センチメンタリテトに陥らぬといふことである、兒童を感情を以て見ないといふことである。(2)は若いものへの愛を燃やすことである、それには自分自身ますます若くなければならぬが、若いものを眞に愛してやるといふことである、その現在その將來の生活を心から思つてやるといふことである。(3)は自己を傳達する能力を養つて行くことである、それには先づ學科に通曉しなければならぬ、それを明かに巧みに傳達し得るやうにならねばならないのである。私はこの三つに更に附加して教

育者たるものが得て偏狭になり勝ちなのを警戒したいと思ふ。凡てのものに理解と同情を持ち決して排他的氣分に陥らず、停滞氣分を養はず、凡庸主義者にならぬといふことを附加して置きたい。尤もこれは以上の如き人生觀に蘇り、活氣ある精神を高め、一般的知識を修得するに成功する限り、その恐れなからしむるかも知れないのであるが、併も特にここに注文して置くのである。教職をして生甲斐あらしむる第五の策は十分の休養を取り得るといふことである。これは先づ物質上の待遇をよくして貰はなければ不可能である、さうして十分の休養を取り得ても樂に食べて行かれるやうになつて來なければならぬ。安い俸給によつて成るべく長時間を駄馬のやうに鞭打つて扱使はうと考ふる如きは全く愚かなことである。No one can teach long and teach well とは味ふべき詞である。教育者は十分の休養時間を取り得て、この間に於て娛樂もすれば運動もすれば旅行もすれば修養もすることの出來るやうにならなければならぬ。小學校の先生の俸給が高等教育の先生の俸給と大きな懸隔があつたり、教職にある凡てのものとの待遇が他の職業にあるものの待遇よりも數等劣つたりするやうな社會は最も不健全な社會であると思ふ。吾々はこの不健全な社會から一日も早く免かれねばならないのである。そこで第六の策として吾々教育者は小學から大學に至るまであらゆる階級のものが教育者組合を起すとか教育者俱樂部を起すとかし

て、以上に述べた様な策をして一日も早く可能ならしめるに努力すると共に、この休養と待遇とを多く教育者に與へて貰ひたいといふ正當な要求を堂々と提出する時期が來なければウツであると思ふ。歐米諸國では既に疾くからさういふ氣運に向つてゐる。これも教育の新傾向の一と看做すべきである。私は思はず長談議をしてつた、併し教育の新傾向といふからには勢ひこのことまで述べて來なければ満足され得なかつたからである。けれどもまだ述べ足りない。ただほんの概略の私の所感のみをこゝに披瀝した次第である。(終)

本會機關雜誌

●教育學術界唯一學術雜誌

教育學術界

(價正) 半年分 三圓五十錢
一年分 六圓五十錢

本誌は教育雜誌中最古の歴史を有するものにして、また唯一の學術雜誌なり。従つて高級教育者の伴侶として、永遠に斯界に冠たるの榮譽と重責とを擔ふものなり。

●初等教育界唯一専門雜誌

算術教育

(價正) 半年分 二圓八十錢
一年分 五圓五十錢

本誌は初等教育の算術科全般に渡りて、理論と實際と、共に用意を周到ならしめたるもの、各學年毎月の教材取扱に至りては、四高師教官の競争的研究の發表なり。

教育上の實際問題

樋口長市述

明治の初め、我國は嘗に外國人に知られなかつたばかりでなく、我國人すらも、自ら自國の如何を知らなかつた状態でありました。然るに、五十年後の今日は押しも押されぬ五大國の一とし、否、三大強國の一として世界を指導する位置になりました。是は恐らく明治五年學制頒布當時の人々の夢想だもしなかつたところであらうと思ひます。今日この記念に當つて、お互が過去を追懐するのは勿論一つのよい記念事業には相違ありませんが、又一つには、將來五十年の先きを計畫するのも、意義のある記念であらうと思ひます。私はこゝに此の將來五十年を見越しまして、我國が更に進歩發展して、他に類例のない三大強國どころか、世界唯一の指導國となるには、先づ我々の教育のどう云ふ點に注意し、我小國民をどういふ風に仕立て上げねばならぬかと云ふ

ことについて、私が過般外遊中に感じた二三を申し述べて見たいと思ひます。

私は外遊二箇年中の約半分、詳しく申せば五ヶ月と十九日間を日本人の最も多いアメリカのカリフォルニア州に暮しました。カリフォルニア州に斯く長居いたしましたには、色々の理由がありますが、その第一は、我々の後繼者なる日本の児童が、果して將來世界第一の國民として、我國を脊負つて立つだけの素質を有するや否やを、現實に西洋人の子供と比較して、研究せんが爲でありました。これは我國内に居つても出来ない仕事ではありませぬが、何分にも、國內では西洋人の子供が少うございますから、比較して見ましても、正確な結論を得ると云ふことは六かしい。是にはカリフォルニアが最もよい、彼の地には、日本から移住した人々の子供、……日本から連れて行つた子供や、彼の土地で生れた子供が、大勢アメリカ人の子供と共學して居る。この共學して居る所で、兩々相對して比較をして見て、後更に遡つて日本人の本性とアメリカ人の本性とを比較して、そこに何等かの結論を得ることが出来たならば最も正確に近い結論であり得やうと思ひました。此結論を以てイギリスに渡り、フランスに渡り、更に其地の子供と比較したならば、やがて大和民族將來の可能性とそのものを論決することが、出来ようかと思つて、惜しい

日子ではいざいざでしたが、半年近くの日子を、此所に暮したのであります。研究の方法としては、日本人にして、永く彼の地に住居して居る人々、竝にアメリカ人の經驗に聞き、日本の児童の在學する學校を訪問して、その校長或は教師に付てむき／＼に話を聞き、又實際教授も見、成績物を検査して、果して彼等の言ふ所が信なるか否かを確かめたのであります。調べました結果につきましての詳しいことは今日は省き、唯、結論だけを申し上げますと、日本人の子供は、數學の能力と、手先の能力に於ては、少くともアメリカ人の子供に優つて居ると言ひ得るのであります。數學の能力と云ふと、諸君はお疑ひになるかも知れませぬが、それは我國の小學校に於て最も成績の悪い學科と云へば、諸君は直ちに算術と綴方をお舉げになりませう。それがアメリカの子供のより良いといふのは、何んだか受け取れないやうに思はれるからであります。所が、これは事實であります。どこの小學校の校長に訊きましても、日本人の子供は、アリスメチックがよく出来る、ピクチュアが巧みだ、裁縫の手際がよい、手工もよいと言ふ。是は誰の言ふ所も符節を合せることが如くである。

算術は、彼國では日本と同じやうに、尋常四年頃までは大抵運算の練習を主として居りますがそれより上になりますと、事實問題が漸次に多くなつて來て居る。而して日本の子供の成績のよ

いのは、嘗々その運算問題ばかりでなく、事實問題に付ても亦然りであります。アメリカは、御承知の通り、實用主義の國で、實際に用多し卑近な問題に重きを置いて教育して居りますから事實問題が出来たからとて、それを以て直ちに日本人の子供の頭がよいといつて安心する譯には参りませぬから、私は更に試験問題を廣くあさつて見ました。漁つて見ますと、決して簡易な實用問題はかりではありません。假りに問題が十ありと致しますると、その内二三は頭を捻らなければ出来ない問題であります。偕てこれも出来るやうならば先づ安心してよろしからうと私は大いに喜んだのであります。私は、實はこの頭を捻ねらねばならぬやうな問題を混することについても、その源を突き止めて來ました。聞く所に依ると、同州の學務課長が或る所で演説をして、算術教育に於ては、實用的な計算をなさしめることは勿論必要であるが、これと同時に頭を練ることも忘れてはならぬと。言ふたことがあつた。爲めに實際教育家はその意を受けて、前申す通り十題の中に二三題は思考問題を混するやうになつたといふことであります。

因に申しますが、アメリカに於ては試験が非常に多い、世界の内でフランスとアメリカが試験の一番多い國でありませう。我國の小學校では試験をしないのが本統で、もし行つても一年の中に二回か三回、女學校でも試験は全廢しなければならぬと言つて居りますが、所がアメリカでは

毎日試験をして居る。従つて子供は試験を何とも思つて居ない、校長教師は長い間の試験の経験から日本の子供は算術の成績がよいと言ひ、私も亦それが偽でないと言ふことを確めたのであります。私は之を諸君の前に陳述して御承認を乞ふ爲に百分比を御覽に入れることの出来ないのを甚だ遺憾とおもひます。百分比にして現はすが科學的研究法であるとは豫ねく承知はいたして居りますが、何分にも試験成績表も口課點表もない米國で、しかも半年やそこらでは、迎もこれは出来ない業である、それ故先づ私は出来る限り多數の校長、教員その他の人の言ふ所と私の見た所との大體の結論を持つて歸りました。偕て算術の能力の良いと云ふことは、やがてサイエンスの頭のあると云ふことを證するものと見ることは出来ませぬか、私は此點に於て我民族の將來を非常に有望なるものと看破したのであります。併し算術の成績の良いと云ふ日本人の子供がもしも日本に於て若干の教育を受け、然る後に親に呼び寄せられてアメリカに移住したものと致しますれば、是は日本に於ける教育法がよかつたので、日本民族の頭が良いと云ふ證據にはならぬのであります。そこで私は飄つて今度はアメリカで生れた日本人の子供だけに付て調べて見ました。すると矢張りその結論には違ひはない。アメリカに生れて、オギャアと云ふ時から英語で育つた子供も矢張り算術の成績は良い。是は私ばかりでなく、私共と畧ぼ同時に彼の

國に参りました、政友會の故代議士高橋本吉君も、ハワイで日本人の子供と、アメリカ人、支那人、朝鮮人、メキシコ人等の子供と比較して、算術の能力の良いのを見て、非常に喜んで居りました。私もハワイを見ましたけれど、ハワイに居るアメリカ人の子供は少いし、そこで支那人や朝鮮人やメキシコ人に優つて居たとて將來第一等の國民となる素質ありなど、云ふ結論は得られないと思つて居ましたが……。私も高橋君の話を聞いて一層自分の考の確かであつたと喜んでいたのであります。我々民族が、サイエンスに堪能な頭を持つて居ると云ふことは、將來、大工業國民大商業國民、としても、きつと世界を睥睨するに足る國民たり得ると推測いたしましたも、強ち無謀な推測を申す譯には行かまいと思ふのであります。

更に手先の方になりますと是れも亦事實であります。圖書の教場に臨んでも、手工の教場に臨んでも或は裁縫の教場に臨んでも、教師はいつも成績を持つて來て見せる。日本の子供は斯くくだと現實のものを突きつける。時には又、私が「良い」と鑑定した物のすべてが日本人の子供の成績であつたこともあります。一例を申しますと、サンフランシスコのアダムス、クールを參觀しました時に、この圖書教室に、日本の教室のやうに一ぱい成績物が貼つてありましたが、その成績を校長が批評せよと強要するので私は再三辭退しましたが、併し校長は老人でございました

から、此上辭退は禮を失する所と思ひまして、試みに三つばかりの點から品臨して見ました。すると校長は私の云ふまゝにペリオルヴェリグッド、グッドなどと評語を附して居りました。斯様に致して居る所へ圖書擔任の教師が這入つて來ました。校長は私を紹介した後、私の批評を傳へますと、教師は實にその通りだと言つて、その圖書を外づして机の上に並べました。すると姓は皆日本流の姓です。如何にも日本人の子供は書が上手である。是は同市のホレーマンスクールに行つた時もやはり同じでありました。

裁縫の成績と來てはアメリカ人は極く無器用ですから無論比較にならぬ。彼の國では裁縫をいたしましたが、日本でやるやうなものばかりでなく、刺繍のやうなものをやつて居ります。自分で以て模様圖案をして居りますが、是も亦日本人の子供は上手い。私が東洋流の眼からさう見るばかりでなく、アメリカ人の教師の眼に映する所も亦然りであります。アメリカの西海岸には、日本の模様書が非常に流行して居りました。さつき申しましたアダムス、スクールの如きは、日本の更紗を集めて、それを手本にして子供に書かせて居りました。又エマソンスクールでは、代議士植原悦次郎君から貰つたといふ古代更紗を澤山持つて居つた、それを手本にして、模様書を習はせて居りました。之はイギリスに行ても同じく、イギリスの我小學校で日本風の模様を見ま

した故。私は尋ねて見ました處、日本模様を集める英文の教科書がある。これを教師が持つて来て生徒に教へて居るのを發見いたしました。日本では忽せにして居るものが先方では教科書となつて居る。又日本の毛筆を用ひて居る所もあります。(日本では先方の筆を用ひて、毛筆廢止などを言つて居るのに)先方の教師に聞きますと、こんなものは無いといふ。何故と聞きますと、第一手の練習にいゝ、微妙な筋肉でなければ是は使へない。第二で書いた線がよい、ペンでは逆も出来ない。第三隈取りをするによい。といふことでありました。私は彼我兩國人の申す所を考へ合せて見まして、可笑しな感じがいたしました。しかし日本風の模様を見ることは東へ行く程少くなります。先づアメリカの大勢を申しますと、日本の模様がズン／＼東に押して行きつゝあると言つて宜しからう。是も日本の兒童の成績の良い一つの原因と思ひます。日本人の頭にあつた模様を、日本人の子供が書くのでありますから、巧みに出来るのだとも思ひます。兎に角裁縫の方に使ひます摸様に致しましても、圖書で繪かせる繪に致しましても、比較にならぬ程日本の子供は成績が良いのであります。……頭がよし、手がよしと参りますから、我國五十年後の進歩は推して知るべきのみだと思ふのであります。

日本人の子供の長所の最たるものを挙げますと、以上申した二點であります。これと同時に、他の方面に於て、逆も捨て置くことの出来ない短所を有して居るのを見ました。次に之を申して見たいと思ひます。

是は、ちよつと行つて見ても分ることではありますが、どうしても我々は身體に於ては西洋人に及ばない。勿論皮膚の色が黄色だとか、目が釣り上つて居るとか、頬骨が出張つて居るとかいふのはこれは亞細亞人種の特質で、五十年百年経つても變りはしまし。従つて我々は五十年間に皮膚の色を白くしようだの、頬骨を低くしようだの、目尻を引き下げようだのとは企つべきではありませんが、足の曲つて居ること、是は亞細亞人種の特質でなく、大和民族の特有ではない。全く或事情の爲に一時斯うなつたのでありますから、これだけは如何様にもして矯正して、立派な足、見栄えのする足にせねばならぬ。又必ず斯くなり得ることは私は信じます。或は言ふ人がありません、足が曲つて居つても、天下の大勢に關係はないではないか、と……之はお互國內に居る時はそれでよいのですが、一度西洋に行つて見ますと、著しくこれが醜い、逆も一等國民の足とは見られませぬので、誰人もいたく恥かしい心持ちが致します。西洋に行つて居る大抵の日

本人のは釘抜足である。やつとこ足である。先きの方から来る背の低い短かい足の曲つた人間がある。どうか日本人でなくつて欲しい」と思つて近寄つて見ると日本人である。試みに「君は支那人だらう」と尋ねて見ますと「イヤ俺は日本人だ」と言ふので、すつかり悲観してしまひますどういふものか来る奴も来る奴も日本人が足が曲つて居る。足の真直な西洋人に比較して見る所がこれが著しく目につきます。御承知の通り、西洋人は足が長くて真直ぐて、誠に立派である。しかもこれは自然に依るばかりでなく、注意して直す爲に斯うなるのであります。何故西洋人は、そんなに足に氣を付けるかと申しますと、是には譯がある。その一つは、西洋人は足、曲つたのを畸形とする、片輪とする。それ故少しでも曲つたものがある時には、これを矯正することを第一の急務と考へる、日本で衣服美を非常に尊重する様に、先方では肉體美を尊重する。自分より先立つ足を後方から眺めては「いゝ足だナア」と褒める、私ども西洋人と一緒に散歩して見ましても先に歩いて居る人の足を見て「堪らないナア」と言ふ。男の人は女の足を見て頻りに悶だへ、女の人は男の足を見て頻りに顔を赤くする。而かもその美を見せようとして、御承知の通り、婦人などは故らにスカートの薄い短いのをして歩く、さうすると後から男が見て「チエツ、チエツ」と言つて居る。彼等は足の美を異性美の一とするのみならず、進んで性物の一種と看做す。これで男

は婦人の足を見て劣情を起すさうであります。従つて人の前に裸足を出すと云ふことは非常に無禮である。お互ひが我國で裸體で人の前に出たと同じやうに無禮である。萬一にも裸足を人の前に出さうものなら、我々を侮辱して居るといつて怒る。時には法廷に訴へることもある。三浦環女史がバッターフライを演じます時日本流に、揚屋の座敷でツボ足を出しますと、観客は一齊に舌打をする。それはいゝ意味で打つのではなく、「醜態だ」「失禮だ」といふ意味で打つのださうであります。足を見せられるのはお互が尻を見せられたと同じやうに向ふの人は考へます。

さう云ふところから、西洋人は自分の子供の足に自然に氣を附ける。勿論西洋でも、小さいまま幼稚園にも行かぬやうな子供には足の曲つたものがチョイ／＼見えます。しかしそれは小學校の中學年以上になれば、皆矯正されて終ふ。日本では子供を背負ふから足が曲ると言ふ人がありますが、先方では背負ふ代りに乳母車に入れる乳母車に座すれば矢張り足が曲がる。されば背負ふが、日本人の足の曲つて居る唯一の原因と申すことは出来ませぬ。寧ろ日本人は足の曲がつたのを尋常一様のことと考へて、敢えて慥しまない所に罪があると私は考へます。西洋では、これを畸形として、宛然もアザカソバカスの如く苦しみますから、自然に直してしまふといふ氣になる。兎に角小さな子供には足の曲つたのがありますが、小學校に這入つて來ると、皆癒つて終

ふ。小學校へ行つて見ますと、よく足に添木をして歩いて居る子供がある。是は足の曲つたのを癒す爲であります。それで、小學校の二年、三年以上になつて、足の曲つて居るのは先づないと云つてよろしい。特に女子が鹿のやうな足をして、ばつばつと歩くところは、如何にも一等國民の子供と思はれます。パリーの高等女學校の生徒などが、黒色の大きなカバンを懐いて姿勢を正して鹿のやうな足をして、ばつばつと揃つて歩いて行く様を見ると、如何にも立派です。何はともあれ崇敬の心が自然に湧出したします。斯う云ふのを見て、日本へ歸へつて見ますと如何にも足が……。此頃は少し馴れましたが……。先方へ行く前には餘り女の子の洋装は流行らなかつたが、歸つて来て見ると、猫の子も杓子の子も洋装の眞似をして足を出して居る。それが悉く曲つて居る……。私は此間高等師範の附屬小學校の門前で子供の出て来るのを見て、數へて見ました所、先づ半分以上は西洋人の眼から見れば畸形である。これはどうかして直さなければならぬと切に感じたのであります。諸君は、隣邦支那の婦人が纏足の結果ひよろ／＼して歩くのを御覧になつて、あれは一等國民だ、世界を指導する婦人だ、と尊敬の念を起されますか。西洋を見て、日本の子供を振り返へつて見ますと、宛もこれと同じ感じが起ります。

次に歩き方がまたよくない。たま／＼曲らない足がありましても、その歩き方がよろしくない。足は上がるけれども、兩方平均に上らない。片一方は此の位に高く上るかと思ふと、片方は此位しか上らない。内股は暫く措くと致しましても、足の運び方が均齊に、又立派に行かないのが多い。これに就ては私は日本の體操の教師は従前何をして居つたかと恠しみます。日本人の足の運びといへば一體にちよ／＼して、丁度鼯か猿かのやうです。西洋の寄席へ行つて見ますと、よく日本人の眞似を致して見せますが、それがいつも必ず扇子を持つて、それをバカバカバカとセツカチに動かす、是が日本人です。道を歩く時にはちよ／＼する、私どもが見ますと、日本人はあんな者ばかりではないと思ひますが、西洋人には、これが日本人の特質のやうに見えるやうであります。三浦環女史のバターフライの芝居にも、長崎の藝者家の封筒が赤い長い股引を履いて、男の癖に内股で、ちよ／＼出て来て、べこ／＼、頭を下げる。蝶々夫人の小父さんと云ふ人も大きな體をして居ながら、歩く時にはちよ／＼と歩く。現在日本人の先方に行つて居るもの内にも矢張りさういふ手合があります。電車の道を横切る時に、鼯が道を切るやうに駆けて行く。私は友達によく「大國民は大股にゆつくり歩るけチョコ／＼をするは大國民の品位に關する」と申して笑つたことがあります。

思ふに、是は教育の結果でありませう。私は子供にもう少しく日常の歩行の仕方を教へなければならぬ。體操の時間には、馬のやうな歩き方ばかりを教へず、不漸の歩き方を教へなければならぬと思ひます。斯う申しますと、諸君の中には、「それは逆も駄目だ。日本人が重い下駄を履いて居る間は駄目だ。西洋人は靴だからよいのだ」と、仰せられる方があるかも知れませぬが、私の考はさうではない、フランスへ行つて見ますと、日本の下駄よりも重いサポーと言ふ木で造つた靴を穿いて居る。田舎へ行つて見るときつとそれを履いて居る子供が一層多い。戦争中には巴里市中でも労働者がそれを履いて居りました。朝四時眠から醒める頃、表の方でガタ／＼とする音がする、これはこのサポーを穿いた労働者が早朝に勤めに出るのであります。この靴は恐らくは一貫目近くもありませう。決して日本の下駄より軽いとは言へませぬ。それでも矢張り足は立派に動く。斯うして見ると、下駄が我國人の歩き方を悪くする、唯一の原因とは受け取れませぬ。

先方では足の格好ばかりでなく、歩き付きをもやかましく申します。二人で歩く時、……是は

日本でもよく言はれて居ることありますが、西洋人は足が揃ふ、日本人同志は決して足が合はない、西洋人と歩いてても、始めの間は、先方で合せても、此方では構はないものですから、遂にまち／＼になつてしまふ。もしも先方と足を揃へようとなると、始終足にはかり注意して居ねばならぬ。その苦しいことは譬へ方もない。然るに、西洋人同志は特別に注意することなしに足が揃ふ。一體是はどう云ふ譯かと思つて、色々調べて見ますと、これも矢張り譯があるのであります。御存じの通り、西洋人は二人になれば必ず腕を組む、組まぬのは小さい子供だけで、是は兩親の間にぶら提つて居る。小學校に行くやうな子供になりますと、親が手を子供の肩に掛けて、さうして足を合せます。故らに小足にして子供に調子を合せます。大きくなると母親が男の子を馴らし、父親が女の子を馴らします。是は一つには男の子には婦人に對する禮儀を教へ、女の子には紳士に對する禮儀を教へる爲であります。それ故親子で腕を組めば歩調が揃はなければならぬ。それを小さい時から馴らされて居るから、小學校の子供でも矢張り學校へ行く時、歸る時を見ますと、何人居りましてもゾクゾクゾクと揃つて行く、實に見事である、私は是は都會地の石で固めた道路で歩けば音がするから、自然に律動的にそうなるので、田舎道の音のない所では、斯うは行くまいと思ひました、特に田舎の子供について注意して見ましたが、矢張り足並は

揃つて居りました

これに就いて、今一つの原因は先方の學校の唱歌教授が、大部分は律動の教授である。日本では忽ち歌を教へますが、あちらではピアノをぼんぼんと弾じ始めますと、子供の體が毬のやうに弾じき上る。歌ふに致しても愉快さうに歌ふ。因に申しますが、唱歌の時間はあちらでは七分か十分位で終ります。日本のやうに三十分も一時間も子供を苦しめることはありません。又ピアノや兒童音樂隊の奏する合奏に合せてダンスを致します。日本でも、昨今幼稚園や小學校にダンスが流行り、惟しげな先生が踊り方を教へて居りますが、先方では幼少の子供には踊り方は教へない。唯律動的に手や足を動かさせるだけです。幼稚園などの子供が、ピアノに合せて跳ね廻はつて居る様は、宛も鴛鴦の子が跳ね廻はつて居る様です。歌を歌ふても、何でもなく唯面白さうに、律動的に足や手を思ひ／＼に動かして居るばかりであります。藝術の本元は、手や足の末にはらずして却つて此邊にありはしないか、動き方はどんなにでも、唯々愉快に、律動的に、心も體も合して動くところにダンスの精髓がありはしまいか。日本では、之を知らずして、最初から手や足の末を教へ込もうとする。向ふでは形は後にして先づ内容から作ります。又書方などを律

動的にやつて居るところがある。ABCを書くのに、教師はピアノを奏する、ピアノのないところでは口で一二三四五六七八と唱へ、七八の所で一際聲を高くして文字を書く、裁縫の時も然り、斯様に、學校の教授に於て、リズムを非常に尊重する。これがやがて子供の足に及ぼすのではないか、否子供ばかりでなく、一般に及ぼして居るのではないかと私は思ふのであります。

翻つて考へて見ると、我國では、足を性物の一種などとは見ませぬが、然し曲つて居るのはどう考へてもよくない。又歩き附きの悪いのもよくない。二人で歩く時に足を揃へることは五十年後に譲つても、足の格好と歩き附きは、是は五十年前に直さなければならぬと思ひます。或は斯う云ふ人があるかも知れませんが、足を真直ぐに伸ばすと、西洋人のやうに膝が曲らなくなる。是を真直ぐにするには、今迄のやうに座つてはいかぬ、腰掛けでなくてはならぬ。今迄の生活法を全く變へて、腰掛けにしなければならぬ。さうすれば、足が曲らぬと云ふ人があるかも知れませぬ。是は一面の眞理でありませうが、併し、全體の眞理であるとは思はれませぬ。試みに考へて御覽なさい、支那人は腰掛けて居ります。けれども足は曲つて居る。これは毎日皆様のお宅を訪問する傘賣や瀬戸物繼ぎについて御覽になれば分ります。殊に婦人などは股引を履いて、五升樽

でも這入りさうな股附きをして歩いて居ます。されば腰を掛けると云ふとは、足を真直ぐにする唯一の方便ではない。足の曲直の依つて生ずる所は全く人の頭である、之を畸形と見るか、之を當前と見るかに依つて出て来るものであります。西洋人は膝の屈伸は日本人程は巧みには行きませぬ。私共は行き歸りの船の中で、彼我相混じて駈つこをするのを見ましたが駈けるだけでは日本人が負ける、けれども倒れた時にはきつと勝つ、先方が倒れた時に此方が勝つのは當然であります。是は膝の屈伸が利かないからであります。然るに我々は座つて居るお蔭で膝が自由に利く、それ故起上ることが早く、遂に勝利を占めるのであります。

この膝の屈伸が自由であるといふことは、仕事の能率の上に、非常な利點を與へます。カリフォルニア州などで農業をして居る日本人に付いても、野菜や、果樹の栽培や採集については、日本人の方が遙かに能率が高い。西洋人は如何に働いても、日本人の三分の二位の仕事しか出来ぬ。これは、日本人が膝を折つてシャガムことが出来るからである。ロサンゼルスには大きな、恐らく二町四方もあらうかと思はれる野菜市場がありますが、その野菜の七分は日本人が栽培した

ものであります。我々は足を真直ぐにすることも必要であります。又屈伸の自由に出来るやうに保持することも必要である。この兩者は果して兩立し得ないものでせうか。これが第一に研究すべき問題であるのであります。西洋人のやうな生活法に改めて、足を真直ぐにすることはたやすい業であるが、西洋人通りにせずして、日本在來の生活の如く疊の上に座つて、しかも足の真直になるやうにする、斯うしますと、我國人は西洋人にも優つた足、世界無敵な足を持ち得るやうになると思ひます。

身體について今一つ申して置たいのは姿勢のことです。日本人は、どうも姿勢が悪い、私はその標本であります。彼の國では、學校であまり姿勢のことを矢笠しく申しませぬ。日本の學校は姿勢のことに口矢笠しい、恐らく姿勢に就いては世界一の小言の多い國でせう。然るに實績は御存じの通りであります。是は家庭その他一般の標準が然らしむるのだと私は思ひます。即ち西洋では、姿勢の悪いのは、不美として、家庭でも、社會でも、これを許さないが、日本では、普通のこととして注意しない。もしこれを口にするものがあれば「何だ、つまらぬことを言ふ。」位にしか思ひませぬ。我々お互は斯ふ云ふ姿勢で、兎に角三大國の一まで艘き附けましたが、今後は一つ姿勢の點に於ても、第一の國民と言はれるやうに子供を仕立て上げねばならぬと思ひま

す。尤も、是は既に諸君の御注意になつて居ること、思ひますから、こゝに詳しくは申しません。

次に精神の方面に付て、一つ二つ彼我兒童の長短を申して見ませう。先方の子供は、日本の子供に較べて見ますと、觸りが温かく柔らかであります。日本人の子供は、一體に觸りが冷たくて硬い。外來者が教場に臨んで見ても、日本の子供と言つたら、馬鹿真面目な、生れてから未だ喋つたことのないやうな顔附をして、「宇散な奴が來た」と言はんばかりの素振を見せる。途で出會つても亦然りです。「坊ちゃん」と愛嬌を振撒いても變な顔色をして逃げ出す。ところが先方の子供は、參觀人が教室に入ると、柔かな微笑を以て迎へる。校長が「この方は日本から見えたのだがお前等は日本を知つて居るか」と尋ねると、「よく知つて居る」、「地理で學んだ」とこゝししながら私の顔を見て言ふ。如何にも歓迎するが如く實に愉快な感が起ります。送中で會つても一見識もない吾々に「君今は何時か」と尋ねる、時計を見せてやると、「まう阿母さんが歸つて來いと云ふ時だ」と言つて飛んで行く。我々を外國人だと思はない様子であります。當方から、「お前の學校に見に行くが、連れて行かぬか」と言ふと「よし一緒に行かう」と云うて校長の所

行つて、紹介する、如何にも馴れたものです。是は日本ではとても見られない現象です。無論西洋諸國は互に接近して居つて、隣國人が色々入混つて居りますから、自然に外人に馴れて居るのである、と思ひますが、又一つには教育が然らしめたのではないかと思はれます。

先方では家庭でも學校でも常に「人に對しては成るべく愉快を與へるやうにせよ」と教へて居ます。對者に愉快を與へるが美德と考へて居る。これは「人を見たらば盗人と思へ」と教へると大いな差異であります。校長が私を生徒に紹介しますと、生徒は一齊に起立し、「ミスター樋口、吾々は衷心君を歓迎します」と齊唱した所もある。校長が「この紳士は、お前等の唱歌を聞いたいと云ふが、一つやつて聞かせる氣はないか」と言ふと「歌つて聞かせよう」と一齊に言ふ、又「この紳士は、一時間中お前等の稽古を見たいと仰しやる」と言ふと、生徒は腰掛を持つて來て「座れと」云ふものもあり、自分の本を私に渡して「吾々は今此處を稽古する、君見たまへ」と言つて自らは隣人に乞うて書籍を見せて貰ふもある。これは小さい一年生でも然りで、如何にも世界を平和に見て、世界の人をなづける人種の卵らしく見える。いつでも他國人を自分より低く見て、「彼は自分の國に習ひに來た」「我々の國に指導を受けに來た」と考へて居るやうに見える。此目で日本の學校に行つて見ると、それは一雲泥の差で、子供は「變な奴が來た」と言は

んばかりの顔付で固くなつて居る。殊に、先生が少しでも態度を變へようものなら、生徒は益々固くなる。西園寺さんがヴェルサイユの會議で議員中一番お行儀がよくて、巴里の新聞紙が「象牙の置物のやうだ」と評したと言ふことですが、西園寺さんばかりではない、日本の子供はすべて象牙の置物のやうに見えます。生れてから未だ曾て笑つたこともなければ、泣いともないと思ふやうな顔付に見えます。是が將來世界を指導する國民でありませうか……如何なものでありませう。少なくとも西洋人は感心はしますまい。

今一つは、先方の子供の長所は心が素直に出来て居る。スラリツと曲がらずに伸びくして居るといふ事である。これはどう云ふ譯であらうかと色々調べて見ると、先方の教育法が少くともその一原因をなして居るのを發見するのであります。西洋人は、家庭教育、学校教育、社會教育、全体を通じて、日本人とは違つた意味に於て子供を尊重して居る。どんな小さな子供に對しても、親や教師が權威づくめで抑へつけるやうなことはない。如何なる悪い言行があつても、先づ子供をして自ら反省せしめる、是は實に日本と反對である。例へば、食物の小言に致しましても、若し恐ろしく言つて食べませぬ時には、母親は「お前は今日は變だ。いつものお前ぢやない。よ

くよく悪魔に見入られた。悪魔を出しておいでなさい。外套を着て、公園を廻つておいでなさい」と言ふ。子供は又従順で泣きながら外套を着て飛び出す。さうして飛んで歸て来て、「ママ今歸つて来た」といふ、母が「よく早く歸へつて来た之が食べられるか」といふと「食べる」と云ふことになる。又、飽くまでも強情を張ります時には、「どうもお前は今日は變だ、そこに這入つて考へなさい」と押入を指差します。先方の押入には我國のやうに、蒲團が這入つて居ない代りに着物が衣紋掛けにかかつて並んで居る。子供はそこへ泣きながら這入つて行く、外ではピアノを弾いたり唱歌を歌つたりして居る。偕て子供は涙の種子が盡きると泣くにも泣かれず出たいけれども、きまりが悪くて出られない。日本なら祖父が行つて出して呉れるが、先方の祖父祖母などは決して家庭の躰けの妨害はしない。それ故、子供は、母親か父親に一言言はれるが最後取り附く島はない。そこで、自ら戸をそつと開けて笑つて居ます。しかし誰も相手に致しません。そうなるに終いには子供の方から折れて出で、「ママ、ママ」と呼びます。「どうした、もう悪魔は出たかい」と阿母さんが開けてやる。「どうだ、食べるか……さうだらうやつとものお前になつた」と、さきの強情張りは皆悪魔の仕業にしてしまふ。決して「嫌なら食べるな一体お前は……」などと子供を悪るものにはしない。學校に於ても然りであります。教場に於て側見を何遍もしま

すると教師は「お前は今日はちつと静だ、ここで考へて居よ」と教室の隅を指す。すると子供は教室の隅に立つて居る。あやまつて来るまでは先生はちつとも構はない。こつちからあやまり言葉をお教へてやるなどと云ふとは決してしない。飽くまでも教師の言ふ事を聞かぬ時には、教師は「校長室に行け」と命ずる。子供は校長室に行つて戸を叩く。校長が「お這入り」と言ふと子供は室内に這入る、校長が「何用か」と尋ねると「先生が校長の所へ行けと言つたから来た」と言ふ。どう言ふ譯かと聞くと、一伍一什を陳べる、校長が「先生を呼んで来い」と言ふと、再び教師を迎へに行く、偕て校長が教師の陳述を聞いて後、「お前は變だぞ、よく考へよ」と言つて又室の隅に立たせる、さうして子供から「校長さん、悪うございました」と言つて出て来ると「漸く悪魔が出たと言つて頭を撫で肩を軽く叩いてやる。若し如何程立たせても謝罪して出なければ、「今日の悪魔は餘程しつこい」と言つて、子供の尻を叩く子供がヒーヒー言ふのを聞かぬ振りして、笑ひながら、而かも私と話しながらビシ／＼叩く。「どうだ、日本では斯う云ふことはしないか」「日本で斯んな事をしたら大問題だ、日本では法令で体罰を禁じて居る」それで躰がうまく行くか」行くも行かぬもない体罰は出来ぬ」日本の子供は從順だからさうだらうが、俺の方の子供は悪魔に見入らるゝからいかぬ」と言つて笑ひながら叩く。子供が「御免なさい。御免なさい」と

云ふと叩くのを止める「私が悪うございました」と言ふと校長は「やうやく悪魔が去つた、今日の悪魔は随分しつこい悪魔だつた」さあ教場へ歸へつてお稽古をせよ」と言ふ。斯う言ふやり方では子供は誰を怨みやうにも人がない。怨みれば自分に附いた悪魔を怨む、より外に餘憤の漏らし所がない。先生も、校長も、その子を憎まぬで、悪魔を憎んで居る。決して「お前は生れ附が……」お前は本當に性質が……」などそのやうに見ない。

他の例を申しますと、私が或學校を參觀した時に、休みの時間に、子供が鬼ごっこをして講堂へ驅けこんで来た。丁度その時、私と校長とが、その中で話をして居つた。校長は私に向つて、「日本は軍國主義で、學校の子供を皆兵隊のやうに訓練して居るさうだが、定めし子供は見事なものだらう」と言ふ。私は「いやそんなことはない。お前の國こそミタリズムだ、私の國では、お前の國のやうに、教場を出入するのに、喇叭の合圖で足列を揃へて、しかも學級の旗を立てたりなどはしない。ミタリズムの名はお前の國に献上する」と言つて居つた。そこへ子供が鬼ごっこをして驅け込んで来た、校長は之を見て「ニッコリ」笑ふと子供も亦「ニッコリ」と笑つて出た。是が日本であつたら如何でせう、「何だこゝへ這入つて、チョットこつらへ来い」といふ位は出ませう。どうも彼方の遣り口は柔かである。あれでは子供はひねくれやうがない。斯

う言ふやり口は社會に於ても異なる所がない。

これも私が桑港で見たことでありますが郊外に散歩に出ますと、丁度電車通りを横切つた阪道を子供等が自轉車の手を離して、隋勢で向の阪へ上る競争をして居る。實に危険千萬である。私は「危い」と思ひながらも、外國人の關する所ではない、アメリカ人の子供だから死んだつて構はぬと見て居りますと、アメリカ人の太い奴がすたく／＼やつて來て、「ボーイたしか。」と聲をかける。「危いぞ」と言はぬ。すると、「子供等は振り向いて「ありがとう、たしかです」と答へる。さうするとその人は「さうか」と小聲に言つて過ぎ去つてしまつた。「自信があるか」「十分だ」「さうか」何といふ交際振りでせう。

今一つは同所でボイスカウトの大會を見た時のことでありますが、何百人と云ふ大勢の子供等が芝居小屋に集まつて、「ガヤ／＼」噪いで居る、誰も「諸君お静かに」などとは言はぬ。勿論「やかましいからやめろ」などとは言はない。市長が立つて「少年は非常に元氣のあるものだ」と言ふと、子供等は静かになる。「諸君の元氣のあるのを見て、我々は衷心喜んだ」と言ふと益々静かになつてしまう。私は、是が先方の子供を素直にする所以ではないかと思つて來ました。

畢竟するに、先方では子供を善い者と解して仕向け方が皆これから割り出されて居る。言はば

向ふの子供は、野中の一本杉のようでストラツツとして如何にも將來棟梁の材となるかの如く見える。然るに日本の子供は窳々鉢植の松の如く、彼方此方にひねくれて居る。西洋の子供に比べると、頭には利くやうだが、どうも腹が素直でない。人が甲と言ふと乙を考へ、西と言ふと東を考へる。或は、我國人が素直でなかつた爲に、斯く現在の國威を築つき上げた。若し素直にして、西洋人の言ふ通りになつて居たら、三大國の一にはなれなかつたのかも知れませぬが、將來はどう云ふものでありませうか。此れが又私の「第一に研究すべき教育上の實際問題」の一つであると思ふのであります。

以上、私は、身體上、精神上に付て、私が見た第一印象だけを申し述べたに過ぎませぬ。も一つ……西洋諸國は御承知の通り工業が盛んである、日本も將來は、どうしても工業立國でなければならぬと思ひますが、偕て工業國の少國民としての、日本の子供を先方のそれとを比較して見ますと、そこに又大なる差のあることを見出すのであります。先刻、私は日本人の子供は算術が上手いと申しましたが、是は將來の工業國民として有望な性質でありますが、惜しいことには、日本の子供には機械に對しての理解が少ない。西洋の子供は大きな機械に對しても相當の理解を